特別奨学生プログラム

「ＲＫＵ未来力チャレンジ」
2014 年度活動報告書

RKU 流通経済大学

50th ANNIV.

目　次

はじめに ･･･ 1

ＲＫＵ未来力チャレンジについて ･･･ 2

　ＲＫＵ未来力チャレンジとは ･･ 3

　2014 年度ＲＫＵ未来力チャレンジ 活動実績について････････････････････ 5

活動報告 ･･･ 8

　経済学部 ･･･ 9

　社会学部 ･･･ 35

　流通情報学部 ･･･ 69

　法学部 ･･･ 85

　スポーツ健康科学部 ･･･ 103

ＲＫＵ未来力チャレンジ活動報告会 ･････････････････････････････････････ 134

　ＲＫＵ未来力チャレンジ活動報告会 概要 ･････････････････････････････ 135

　発表資料 ･･･ 137

　2014 年度ＲＫＵ未来力チャレンジ 優秀活動････････････････････････････ 161

はじめに

本学の特別奨学生制度は 2013 年度に導入され、今年で 3 年目を迎えている。規程に定めるように、特別奨学生は「学業に秀で、向学心に富む、心身共に健康な学生」（特別奨学生に関する規定）であって、公私ともども、本学の模範的な学生として成長することを期待している。この特別奨学生には、入試時点で選抜される 1 号奨学生と、入学後に学内選抜で選ばれる 2 号奨学生との 2 種類がある。それぞれ給付される学習奨励金の額に差があるだけでなく、学年末に行われる特別奨学生の継続審査において、年間の学習状況や学習態度などが厳重に審査されている。

また本学の特別奨学生は、給付金の支給を受けるだけでなく、特別奨学生としての育成プログラムに参加することが義務付けられている。具体的には、1 年次には「キャリア特講（基礎）」「グローバル・コミュニケーション（基礎）」という科目が、特別奨学生専用の科目として教育課程表に記載され、この他に教育学習支援センターの所員によるチューター指導を受け、毎週、学習ポートフォリオ（学習記録帳）などを作成している。2 年次にも同様な特別奨学生専用の科目（「キャリア特講（発展）」「グローバル・コミュニケーション（発展）」）が用意され、1 年次の学修内容をさらに深める工夫が凝らされている。

さらに 2 年次の育成プログラムには、これら正規の課程表とは別の活動である「RKU 未来力チャレンジ」が用意されている。これは教室の外（学内でも、学外でも）に出て、自ら企画・立案したプログラムを実践し、その結果をみんなの前で発表して評価を得るという活動である。大学としては、なかなか外に向かって発信し、リーダーシップを発揮する機会の少ない学生たちの背中を少し押して、いろいろなことにチャレンジする積極性を身に付けてもらおうという意欲的な試みである。ここにまとめて記載されている「活動報告書」を読むと、学生たちは我々の意図をよく汲みとって、濃淡はあるが、それぞれが興味・関心のある活動を積極的に、意欲的に展開したようである。現在、盛んに喧伝されている「アクティブ・ラーニング」が、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法」（文科省・用語集）であるとすれば、この「RKU 未来力チャレンジ」はまさに「問題解決型の能動的学修」の一つであると言えるかもしれない。

またこの活動を進めるにあたって、特別奨学生は基本的には、各学部のコーディネーター（特別奨学生指導・計画委員会委員）と相談し、それぞれ個別にアドバイザー（学部の教員）を決め、テーマの設定から具体的な活動、報告書の作成・発表まで、複数の教員（場合によっては、他学部の教員も含む）および教育学習支援センターの所員などの指導・協力を受けながら活動を行なっている。これも、これまでの大学が不得手としてきたチーム・ティーチングを取り入れた学修活動であり、学部・学科・専門の垣根を越えた教育の在り方を示しているかもしれない。

本報告書の作成に当たっては、指導・計画委員会委員の先生方、またそれぞれの学生のアドバイザーとしてご尽力いただいた学部の先生方、また日々、特別奨学生の指導に当たっている教育学習支援センター所員のご協力をいただいた。深く感謝申し上げる次第である。最後になるが、「RKU 未来力チャレンジ」活動報告会の開催に際して、本学校友会より、優秀賞として図書券の贈呈を受けた。ここに記して、お礼を申し上げる。

特別奨学生指導・計画委員会
委員長　　大西　哲

「ＲＫＵ未来力チャレンジ」について

■　ＲＫＵ未来力チャレンジとは

1.　ＲＫＵ未来力チャレンジ

ＲＫＵ未来力チャレンジとは、本学の教育理念のひとつである「実学主義」に基づき、「教室」の外をフィールドとして、学内・学外で累積 20 時間以上の自主的な活動を行うことにより、実社会を知り・学び、そして未来への力を育むことを目的とした教育プログラムである。

プログラム運用の初年度にあたる本年度は、特別奨学生 2 年次生を対象とした必須の活動プログラムとなっている。

2.　ねらい

未来への力とは、実社会のなかで、本当の意味での専門能力を積み上げていくための土台作りを行うことであり、生涯学び成長し続けていくための土台をつくることである。本学ではこの具体的な一つの形として「ＲＫＵ総合力」を位置付けている。「ＲＫＵ総合力」は【学ぶ・チャレンジする・つながる】の３つのキーワードで構成される。

特別奨学生については、専門講義である「キャリア特講」で積極的に「学ぶ」力を育んできている。したがって、ＲＫＵ未来力チャレンジでは、特に、「チャレンジする」・「つながる」力を醸成させることをねらいとしている。

3.　活動場所・活動時間

「教室」の外をフィールドとするため、活動をする場所は学内、ひいては国内にとどまらず様々である。

学内・学外における既存のイベントや奉仕活動等に、実践者自身のアイディアや企画を盛り込むことで新たな活動へと発展させていく「既存活動発展型」や、実践者自身が新たなイベント・活動を企画・立案し、実際に運営・運用を行う「新規活動運用型」など、その他実践者の創造性によって様々な形態での活動が考えられる。

活動時間は累積で 20 時間以上とする。これには、事前の準備や学習の時間も含まれる。また、単一の活動のみではなく、複数の活動の時間を組み合わせることも可能である。

4.　コーディネーター

ＲＫＵ未来力チャレンジの実施にあたり重要なことは、実践者がひとりで活動を進めるのではなく、実践者一人一人の興味や関心に応じた活動を行うことができるような支援体制を構築することである。そこで、各学部には「コーディネーター」として担当教員を配置した。

コーディネーター教員は、実践者が活動を開始するにあたり、ヒアリング・面接を行い、実践者の希望する活動内容、また、興味・関心などから、アドバイザー教員とのマッチング・調整を行う。

また、活動の進捗状況や修了状況を把握し、必要に応じて、全般的なアドバイスやフォローアップ等を行う。

5.　アドバイザー

実践者が、興味・関心に応じた活動から得られる「学び・気付き」を、より専門性に捉えていくこと目的に、実践者一人一人はＲＫＵ未来力チャレンジの活動を、「アドバイザー」の指導の下で実施する。アドバイザーについては、活動内容や、実践者の興味・関心分野をふまえ、各学部のコーディネーターのマッチングにより、大学内から適切な教員を選び、実践者自身が交渉し依頼する。

6.　活動の流れ

実際の活動の流れは、まず、実践者が各学部のコーディネーター教員に活動内容の希望や概要を伝え、実践者とアドバイザー教員とのマッチングの後、アドバイザー教員とともに具体的な活動内容を決定することとなる。それ以降はアドバイザー教員の指導の下、活動前の目標設定、事前学習、実際の活動、活動後のふりかえり、発表準備、最終報告が行われる。

活動実施の際の注意点としては、安全面に十分な配慮を行い、積極的に且つ、計画通りに活動を行うこととした。特に、受け入れ団体等がある場合には、挨拶、礼儀等の社会マナーを厳守し、一社会人として自覚をもった行動をするよう、コーディネーター、並びに各アドバイザーにより徹底した指導を行った。

7.　ふりかえり・活動報告

活動中間時と活動修了時には、アドバイザー教員と共に「ふりかえり」（学びや気づきを整理し自己内省を図ること）を行うこととした。活動を「楽しかった」、「面白かった」のみで終わらせることなく、専門分野へのフィードバックを行うことで、学びをより深めていくこと、並びに関連分野への興味・関心のさらなる誘いに繋げていくことを目的としている。

また、年度末となる 3 月には「ＲＫＵ未来力チャレンジ活動報告会」を開催し、実践者全員が活動報告を行った。

8.　正課への位置付け

本学では、正課 2 年次配当のキャリア科目郡に「ＲＫＵ実践」が設置されている。

ＲＫＵ実践では、大学が承認する無報酬のボランティア活動等を行い、実働 3 時間以上を 1 ポイントとし、合計 15 ポイントで 1 単位が付与される。「ＲＫＵ未来力チャレンジ」は、ＲＫＵ実践の枠組みのなかで、その活動の一部と位置付けられている。そのため、ＲＫＵ未来力チャレンジの活動時間である 20 時間終了後も活動を継続することで、ＲＫＵ実践の単位を取得することも可能である。

■　2014年度「ＲＫＵ未来力チャレンジ」活動実績について

1.　活動人数

2014年度は、特別奨学生2年次生56名が活動対象者であった。このうち、54名（96%）の学生が指定期間内に活動を修了している。

2.　活動分野

商品開発、学生生活支援、キャリア支援、社会福祉、災害復興支援、地域貢献、スポーツ地域貢献、地域イベント運営、国際貢献・国際交流、フィールドワーク、起業・チャレンジ、インターンシップ・実践、大学イベント運営　の13分野にわたり活動が行われた。

3.　活動エリア

大学内では、ゼミ、各種説明会を活動拠点とする活動が見られた。また、図書館利用支援やゼミ選択支援など、大学内の生活環境自体を活動の拠点とする活動が見られた。

学外では、キャンパスのある龍ケ崎市地区、新松戸地区、並びにその周辺地区で活動をする学生が多く見られた。ただ、中には、東京都内での活動、東北地域での活動も見受けられた。

また、海外では、学生自らの手配によりインドネシア、カンボジアで活動が行われた。

4.　活動項目

活動項目数は延べ43活動であった。

活動項目	実践者数
商品開発	
流通経済大学オリジナル商品の開発・販売	4
学生生活支援	
海外旅行の魅力　～ヨーロッパツアーのススメ～	2
アメリカ短期留学紹介	1
勉学支援サークルの立ち上げ	1
2年ゼミ選択相談会の開催	3
ゼミの活動内容を伝えるFacebookページの作成	1
先輩学生へのインタビュー　～新入生向けDVD作成～	1
図書館利用支援	1
音楽部プロモーションビデオ作成	1
キャリア支援	
高校での特別奨学生説明会	2
特別奨学生制度向上に向けてのアンケート	2
社会福祉	
社会福祉に関するボランティア	2
高齢者施設での高齢者のサポート・ふれあい	2
障害児と地域交流イベントのボランティア	1

知的障害者生活介護施設ボランティア	1
障がいのある人へのサポート ～市民同士の交流を通して～	1
ベルマーク仕分けボランティア	1
災害復興支援	
福島・石巻での災害ボランティア	1
仮説住宅に住む被災した高齢者に対するボランティア ～ふれあいハンドケア～	1
震災・災害復興支援活動ボランティア	2
地域貢献	
新松戸での清掃ボランティア	3
森の清掃ボランティア	2
野田・里山公園の美羽と野田の自然保護活動団体のボランティア活動	1
小学一年生の学習補助	2
スポーツ地域貢献	
「throw アップトライ！！」体育授業サポート	2
セルフコンディショニングを行う環境つくり	1
ミニバスケットボールのボランティア	1
サッカースポーツ少年団におけるサッカー指導	1
スポーツクラブでの健康づくりとスポーツ指導	1
ウォーキング教室	1
野球教室で恩返し	1
地域イベント運営	
「二子玉川ビエンナーレ 2014」のボランティア	1
ふるさとへの貢献 ～納豆列車ボランティア～	1
国際貢献・国際交流	
インドネシア・ジョグジャカルタスタディツアー	2
海外スタディツアー ～村の小学校の子どもたちに体育を教える活動～	1
フィールドワーク	
浅草調査とレポート冊子の作成	1
日本の物流事業に貢献した梁瀬仁先生の軌跡を辿って （物流科学研究所にて資料整理）	1
起業・チャレンジ	
龍ヶ崎市で市役所の許可を得て行う無料塾実現の取り組み	2
スマートフォンのアプリを開発してマーケットに公開しよう	1
インターンシップ・実践	
バンタンデザイン研究所東京校（イラスト＆アートコース）	1
子供向けワークショップからファシリテーション技術を学ぶ	1
広告関連企業へのインターンシップ	1
大学イベント運営	
学生会が行うイルミネーション作成及び学務課の大学周辺の電飾作成	1

活 動 報 告

活動テーマ　：　大学　ＰＲ　の商品開発

活動分野　：　商品開発

実践者名　：　金森　東基（経済学部　経済学科　2 年）

活　動　先　：流通経済大学内

日程・場所　：

10 月ごろからなんども新松戸キャンパス内での会議。昼休みや 5 限終わった後などを使いました。また、11 月にはお茶の水女子大学のキャンパスに出向き、お話を伺いました。

概　　要　：

10 月の最初の会議では、最初にどのような日程で行っていくかを決めました。また、松戸市にはどのような名産や特産があるのか、どのようなイメージで商品を作るかを話し合いその時点では、かぼちゃ・あじさいねぎの 2 つに絞れていたと思います。10 月に 2 回目の会議で、今後の大まかな日程を決め、商品を材料には、松戸名産のあじさいねぎを使うことにしました。このような活動をしている大学の学生たちに話を聞こうという事になり、11 月に、商品開発のグループで、お茶の水女子大学の学生が作った商品開発サークルにお邪魔することになりました。その際私は補講で行けなかったのですが、話を聞くと細かい計画案を作っていたことに驚きました。また、企業や、実際にお店の人と交渉していたと聞いて、驚かされました。そして、12 月にはあじさいねぎを使った料理のアイデアを出し合い、実際に作った料理を持ち寄った結果、あじさいねぎを使ったネギダレに決まりました。しかし、その後は年末年始や、テスト期間にかかり、これ以上は計画が進んでいません。

活動レポート　：

目標として、流通経済大学の PR を、新松戸キャンパスのある松戸市名産のもので商品を開発する。また、新松戸キャンパスの学生たちに松戸市の良さを知ってほしい、という目標また、地元にも商品を出品することで、流通経済大学をもっとよく知ってもらおうという活動を考えました。当初位￥のスケジュールとしては、10 月上旬、何で商品を開発するか決める。細かい予算などの案を作成し、経営学科の先生に見せアドバイスをもらう。11 月、作成するにはどんなことが必要か、具体的なアドバイスをもらうために、過去に商品開発をした他大学の人たちにも会い、道筋を立てる。12 月、そして具体的な商品アイデアを出し合い、議論、アイデアを固め改良。1 月、細かい予算なども計算。販売、生産してくれるお店を探す。となっていましたが、年末年始や、テスト期間に入ったため、1 月の計画はまだ進んでいません。実際の進捗状況を詳しく書くと、10 月の最初の会議では、最初にどのような日程で行っていくかを決め、また、松戸市にはどのような名産や特産があるのか、どのようなイメージで商品を作るかを話し合いその時点では、かぼちゃ・あじさいねぎの 2 つに絞りました。10 月に 2 回目の会議で、大まかな日程を決め、商品を材料に、松戸名産のあじさいねぎを使うことにしました。また、このような活動をしている大学の学生たちに話を聞こうという事になり、11 月には、商品開発のグループで、お茶の水女子大学の学生が作った商品開発サークルにお邪魔することになりました。その際私は補講で行けなかったのですが、話を聞くと細かい計画案を作っていたことに驚きました。また、企業や、実際のお店の人と交渉していたと聞いて、驚かされました。そして、12 月にはあじさいねぎを使った料理のアイデアを出し

合い、実際に作った料理を持ち寄った結果、あじさいねぎを使ったネギダレに決まりました。しかし、1 月以降の計画は進んでいません。今後もこの計画を続け、商品を販売したいと考えています。
　いままでの感想としては、学生同士でアイデアを出し合いながら、真剣に話し合うことはなかなかない機会だったので、いい経験であり、面白かったです。また、１から何かを作るというのも新鮮でしたし、反省しなければいけない点としては、材料費のことなどをもっとグループ内で話し合うべきだったと思います。今回の活動で得られたことは、会議の進め方や、計画の連絡をどのようにしたらしっかり伝わっているかなどに気を付けました。全員に伝わっているか、自分の担当はどこかチェックしてから作業を行うことでミスせず進めることが出来たと思います。これを将来の仕事につなげることが大切だと考えます。

活動テーマ　：　母校での特別奨学生についての説明会

活動分野　：　キャリア支援

実践者名　：　金森 東基（経済学部 経済学科 2年）

活 動 先　：　流通経済大学付属柏高等学校

日程・場所　：

8 月に説明会の開始を高校側に提案。8 月に内容を決める。

9 月 2 日に高校側の先生と最終調整　9 月 5 日に、流通経済大学付属柏高等学校の視聴覚室を借りて、特別奨学生の説明会を行いました。

概　　要　：

　流通経済大学の特別奨学生として、母校である流通経済大学付属柏高等学校にて、特別奨学生とはいったいどのようなものなのか。それを学生自身の目線で伝えたいです。まず、これは当日に決まったことですが、3 年生の学年集会での 5 分間ほどお話しする機会をもらいました。そこでは、特別奨学生がどのようなものかを軽く触れて、放課後に説明会を行います。という告知をしました。

　放課後の説明会では、30 名ほどが参加してくれました。流れとしては、最初に SPI 問題を高校生たちに解いてもらいました。苦戦している様子で、解けた人数は数人でしたが、真剣に取り組んでいてくれました。また、解説は私がやりました。練習ではスラスラ言えていた部分も、うまくいかず、何回も聞かれる結果になってしまいました。次に、パワーポイントでの特別奨学生が実際どういったものなのか説明を行いました。奨学金の金額や、試験の点数ボーダーラインなど実際の数字を出すことによって、高校生たちも興味を持って話を聞いてくれていました。最後に、ポートフォリオを配り、大学の授業がどのようなものなのかを、学生目線で伝えました。

活動レポート　：

　流通経済大学の特別奨学生として、大学の付属である流通経済大学付属柏高等学校で、特別奨学生について学生目線を踏まえて説明をしたいと考え、8 月上旬高校側に提案しました。その後、大学側に説明会を行うという報告。高校側と大学側との連絡の仕方の指示をもらい、次に、佐高君との目標のすり合わせを行いました。大きな目標として、最初に考えた特別奨学生の生徒として生徒目線からこの特別奨学生がどのようなものなのか具体的に伝える。次に、実際の金額を出すことによってもっと興味を持ってもらう。一般の生徒の差額で何ができるのか。例えば留学や、自分も行った海外旅行などを例に出していきたい。また、他の一般生徒にはない特別奨学生の利点とは。これは 3 年次に予定されているインターンシップや、ポートフォリオを使った、授業振り返り、また報告会での人前に出る練習など様々な点を高校生たちに話したい。そして、質問の時間では、高校生たちが疑問に思っていることをすべて解消して説明会を終えたい。と、細かく目標を掲げました。そして細かな日程なども取り決め、8 月中旬から下旬には、実際に説明会で配る資料や、問題、パワーポイントの作成、それらを、アドバイザーの先生やコーディネーターの先生に確認をとる。このあと、実際の説明会を行う流れなどの練習をし始める。ここでの練習、準備をもっと時間を割いて行うべきだったと反省しています。9 月 2 日に高校側の先生と最終連絡。ここで高校に入る時間などの指定を受けました。

　9 月 5 日本番の日は、1 時ごろに高校に入り実際使う視聴覚室でリハーサルを行いました。ま

た、先生からこの時に 5 限の学年集会で少し話してほしいと言われ、驚きはしましたがいい経験だと思い、話をさせていただきました。とても緊張しましたが、はっきりとは喋る事ができました。

放課後に入り、本番の説明会を行います。参加者は 30 名ほど、そして数人の先生方でした。流れとしては、最初に SPI 問題を高校生たちに解いてもらいました。苦戦している様子で、解けた人数は数人でしたが、真剣に取り組んでいてくれました。また、解説は私がやりました。練習ではスラスラ言えていた部分も、うまくいかず、何回も聞かれる結果になってしまいました。やはり、もっと準備をすべきだったと考えています。次に、パワーポイントでの特別奨学生が実際どういったものなのか説明を行いました。奨学金の金額や、試験の点数ボーダーラインなど実際の数字を出すことによって、高校生たちも興味を持って話を聞いてくれていました。最後に、ポートフォリオを配り、大学の授業がどのようなものなのかを、学生目線で伝えました。

終わった感触としては、高校生達も集中してくれていましたし、先生方もほめてくださいました。これを受けて、今回の説明会を行って本当によかったと思いました。より大学の付属である流経柏高校の生徒たちにもっと私たちの大学を知ってもらえたのかなと思います。この、説明に対する準備の大切さや、大勢の人の前で喋るなどの経験をこれから、社会に出て生かしていきたいと強く思いました。

アドバイザーコメント：

取り上げたテーマに向けて真摯に取り組む姿勢を評価したいと思います。さらに全体の流れの中で次にどのようにすべきなのか、意識しながら行動すると、さらに素晴らしいと思います。

（経済学部　山形 万里子）

活動テーマ　：　東北ボランティア活動

活動分野　：　災害復興支援

実践者名　：　杉浦 慎也（経済学部 経済学科 2 年）

活 動 先　：　Chance seed

日程・場所　：

11 月 8 日

　被災地見学

　被災者との語り合い

11 月 9 日

　商店街ボランティア

　語り合い

概　　要　：

東北震災見学

商店街ボランティア

被災者との語り合い

活動レポート　：

　被災地の人たちから話を聞いて、福島では内部被爆は全然なくて、私たちが過剰に思いすぎているんだと分かりました。他の県の人たちの方が食べ物などに気を使っていないので、内部被爆が少し多いようです。被災地では、放射線量などが多すぎて除染するのにも物凄い時間がかかるので、政府がもう戻れないと言ってくれた方が前に進むことができると思うそうです。政府が何も言ってくれないので被災者たちはいつ戻れるか、また被災地に戻ろうか考えていて考えすぎて鬱になる人たちもいるそうです。被災地の人たちのために復興住宅が建てられたが材料が安かったりするので、そこで住んでいる人たちはあまりいないそうです。

　場所によって除染作業の進み具合がちがく山は除染ができない。 防壁や駅があったおかげで津波の被害は抑えることができた。津波が来たときは真っ先に高いところに逃げる。２０km以内は誰も住んでいなくてごみの請負場所になっている。震災のときの逃げ場所で受け入れてくれないところもあったそうです。

　被災の活動を行う自衛隊、消防、警察は真っ先に自衛隊に情報が入り、消防には全然入ってこなく、危ない状況の中で活動していた。被災者どうしの協力は綺麗ごとで自分たちのことしか考えることができず、全然協力できていなかった。

　石巻では、４０人に１人が亡くなっている。石巻では、２日間水が減らず何も活動できなかった。津波は地震がおきてから少し時間がたってからくるので、みんな逃げようとして渋滞になっているときに津波がきてしまった。４２８万トンのガレキが出て処理に８０年かかるそうです。 石巻では津波対策として誰でも津波のときに入れる高いビルなどを作ったり、もともとの建物を活用している。

　被災地などの状況はテレビで放送されていることから知っている状況とは別で、自分の目で見て確かめることがとても大切だと分かりました。また、情報が違うのでたくさんの人に被災地を見て

もらいたいし、見に行った人たちが周りに伝えていかなければならないと思いました。消防に情報が一番遅いと聞いたときとてもショックで市民に一番身近なのが消防だと思っているので少しでも改善していければいいなと思っています。自分が消防士になれたら、地元の消防士たちの被災の話をして少しでも被災した時の対処がすばやくできるようにしたいと思いました。また、避難訓練していることによって逃げ場所を決めておくことで助かった人たちもいるので避難訓練の大切さを伝えていければいいなと思いました。今回の体験でいろいろ知ることができたのでよかったです。

アドバイザーコメント：

実際に被災地に行くことで，メディアを通さない実態を見ることができて 考えさせられることが多かったと思います。たとえば、政府が帰ることはできない、と 明言してくれた方が先に進めるとか、消防への情報が遅かったことなどは、メディアからは知ることのできない情報で、ボランティアを体験しなければわからなかったことです。この意味でも、意味のある体験だったと思います。

この経験を踏まえて、さらに、復旧があまり進捗していないのは、アベノミクスによって他の公共事業が息を吹き返し、被災地復興への労働供給が不足しているのではないかとか、放射能汚染水が本当にコントロールされているのかなどについても考えをめぐらして欲しいと思います。

（経済学部　中山 幹夫）

活動テーマ　：　ボランティア活動とコミュニケーションの重要性

活動分野　：　地域イベント運営

実践者名　：　松浦 晃子（経済学部 経営学科 2 年）

活 動 先　：　一般社団法人 IDTA セラピスト協会　杜の都チームドルフィンドリーム

日程・場所　：

11 月 2 日: 二子玉川ライズ ガレリア(東京都世田谷区玉川)

12 月 14 日:東京都鷺宮都営住宅仮設集会所（東京都中野区）

概　　要　：

二子玉川ビエンナーレのボランティアでは、主に、展示作品の監視、会場設営、撤収のサポートをした。

一方、ハンドケアボランティアでは東日本大震災で被災した高齢者に対し、ハンドケアを行った。

活動レポート　：

今回の自主活動において、人生には″コミュニケーション″が必要不可欠であり、重要な要素の一つであることを再認識した。

それを再認識させたのはアートイベント「二子玉川ビエンナーレ 2014」のボランティアとハンドケアのボランティアであった。

前者は、「こどもたちのために、芸術をもっと身近な存在にしたい。これからの未来をつくるのは、こどもたちだから」という思いから誕生したイベントである。作品の展示だけでなく、ワークショップも多かったため、参加しやすく、子どもも、その親も楽しめる魅力があったように思う。そこで見たのは喜怒哀楽を全面に出していた子どもたちの姿だった。作品を触ろうとしたり、自分で実際に筆で絵を描いて一喜一憂したりと、好奇心が旺盛で、純粋に感動できるような素直さがあった。そんな子どもたちを大人は大事にしていかなければならない。また、そういった経験をさせてくれる芸術は、″何でできているのか、どうしてこんな風に描いているのか、そうすることで何を伝えようとしているのか″などを考えさせてくれるもので、その想像力は人を思いやる上で重要な要素だと思う。子どもだけでなく大人も、もっと関心をもつべき文化活動ではないかと思う。

一方、後者のハンドケアボランティアでは、中野区の都営住宅仮設集会所で、東日本大震災で被災した高齢者に対し、ハンドケアを行った。まず、午前中に講師からレクチャーを受け、午後、呼びかけに応じて来てくださった被災者の方に施術するという形だった。

レクチャーされたのは圧をかけるタイプのハンドケアで、緊張もあり、肩や腕に力が入ってしまった。肩や腕に力が入ると施術を受ける側も痛く感じるが、する側自身も痛い。そこで、脱力して圧を加えるのだが、それがなかなか難しく、技術も手順も不十分なまま実践となってしまった。二人で一人を担当したので、隣のボランティアの方のやり方を見ながらできたが、同時に会話もするので大変だった。一方に注力すると他方が疎かになり、きちんとできたとは言えない結果となったが、今回担当させて頂いた方は皆さん明るく、ボランティアの方も継続している方がほとんどだったこともあり、終始アットホームな雰囲気でとてもやりやすい環境だった。

お昼には、自治体の方が炊き出しをしてくださった温かい美味しいごはんを頂いた。洋裁が趣味で、自分で縫った服を着て、自ら作ったキューピー人形の服やマスコットの写真を携帯電話で見せ

てくれたおばあちゃんは「みんなには内緒よ」と言って、ハンドケアを担当した私にポケットティッシュ入れをプレゼントしてくれた。また、若い母親が連れた小さな子どもたちは、私たちが行うハンドケアを真似して遊んでいた。そんな賑やかで明るい現場は、春の暖かい公園のようにさえ思えた。それを見ていた「100 年後の未来のこどもたちの笑顔のために被災地を笑顔でいっぱいにしよう！」という思いで活動を続けてきた仙台の講師は、感極まって涙を流していた。

だがやはり、自分としては上手くできなかった悔しさもある。今後もできるだけ継続し、被災者の心の傷を癒すお手伝いができたらいいなと思っている。

今回の経験は、雇用者と被雇用者の関係ではなく、ボランティアという無償の奉仕という形で人と関わることで、人への″真の″接し方、関わり方を考えるきっかけになり、同時に、コミュニケーションの重要性を改めて感じた。子どもからお年寄りまであらゆる世代と関わったが、年齢に関係なく、少しでも苦手意識を持っていたりすると、おのずと相手にそれが伝わってしまう。心持ちがそのまま表情や行動に表れてしまうと思うので、言葉に気を付けるだけでなく、意識から変えていかなければならないと感じた。

そして、今回の 2 つのボランティアに共通していた″未来のこどもたちのために″という思いも、忘れてはならない。戦争などの歴史を伝える手段の意味での芸術も続けていく必要があるし、たとえ言語が通じなくても、音楽で共感したり、泣きわめく赤ん坊を抱っこしてあやす母親のような、言葉に依らない温もりや優しさを大事にしていけば、もっと平和に生きられるのではないかと思った。こうした社会を目指す一人として、まずは勉学に励み、それ以外の時間も今回のようなボランティア活動などで充実させて生きていくよう心掛けたい。

アドバイザーコメント：

松浦さんは、今年度のゼミでは、文献を読んで著者の主張を汲み取り、レジュメにまとめる作業を着実にこなし、他のゼミ生の手本となるレジュメを作成するなど理解力や思考力に秀でており、性格も素直で、教員の指摘・指示に対しても注意深く耳を傾け、常にメモすることを心がけているところは高く評価できます。

ただ、控えめな性格で、そのこと自体はある意味長所でもありますが、一方、人と積極的に交わるという点からは、やや消極的な面があることは否めません。

おそらく松浦さん自身もそのことは十分認識しており、「未来力チャレンジ」として、意識的にみずからの弱点の克服に役立つ活動を選択・実践したように思われます。

実際、今年度体験した二つのボランティア活動を通して松浦さんは、相手の気持ちに寄り添いながらコミュニケーションを深めていくことの重要性を感じ取り、表面的に触れ合うのではなく、相手の心に響く人との接し方・関わり方を身につけようと努力し、その成果も実感できたようです。

松浦さんがボランティア活動を通じて幼児から老人までの幅広い年齢層の人々と接した体験は、彼女のコミュニケーション能力の向上に結び付き、今後も継続的に努力していくことで、人間関係の一層の広がりを作り出してくれることを期待したいと思います。

（経済学部　石田 譲）

活動テーマ ： 流通経済大学オリジナル商品の開発・販売

活動分野 ： 商品開発

実践者名 ： 石井 美貴（経済学部 経営学科 2年）

活 動 先 ： 流通経済大学内

日程・場所 ：

9月22日 大学 講堂前
9月23日 大学 コンピュータ室、学生会室
9月25日 大学 学務課前
9月26日 大学 学務課前
9月29日 大学 講堂前
11月21日 お茶の水女子大学
11月25日 大学 コンピュータ室
12月5日 大学 学務課前
12月11日 大学 教室
12月19日 大学 教育学習支援センター

概　　要 ：

松戸市のホームページで二十世紀梨について調べた。
田村先生にアポを取り、活動についてのミーティングを２回した。
活動メンバーに連絡し、ミーティングを複数回行った。
インターネットで大学オリジナル商品について調べた。
学生会に、補助金について尋ねた。
インターネットでお茶の水女子大学の「Ochas」というサークルを見つけ、サークル代表の方とメールで連絡を重ねた。その後、実際にお茶の水女子大学に訪問し、サークルの方々に大学オリジナル商品についての話を伺った。
松戸市役所に電話で問い合わせし、松戸市の特産品について尋ねた。
自分の作りたい商品を作り、試食会を開催した。
販売企画書の作成にとりかかった。
アドバイザー教員にアポを取り、ミーティングをした。

活動レポート ：

私は、流通経済大学に入学してしばらくしてから、大学オリジナル商品が大学内に販売されていないことに疑問を抱いていた。東京大学や早稲田大学などを始めとした有名大学のオリジナル商品は、一般客に広く販売されており、お土産となっている。未来力チャレンジをすることになり、私は、大学オリジナル商品を自ら開発し、販売するちょうどいいチャンスだと感じた。このチャンスを活かし、実現を目指して活動しようと決めた。

新松戸キャンパスに所属しているので、松戸市の特産品を使った商品を開発、販売したいと考えた。そのため、まず、松戸市にはどのような特産品があるのか、市のホームページで調べた。その結果、二十世紀梨があることが判明した。よって、私は、二十世紀梨を使った商品の開発、販売に

向けて活動することにした。その後、田村先生とミーティングを重ねた。この段階では２人で活動していたが、活動メンバーをもっと増やすべきだと田村先生にアドバイスを受けた。私は、同じ経済学部の友達を誘い、４人で活動することにした。また、活動の進め方が全くわからなかったので、他大学に行き、私達と同じような活動をする団体に話を聞きに行くことを決めた。インターネットで調べ、お茶の水女子大学で活動するサークルにアポを取ることにした。メールでの連絡を繰り返し、11 月に実現することができた。「Ochas」という、大学オリジナル商品を開発、販売しているサークルの代表、副代表、チーム代表の方に、どのように活動を進めていくべきか伺った。活動について丁寧に教えてもらい、進め方を学ぶことができた。その後、本格的に活動を進めた。まず、松戸市役所に電話で問い合わせし、二十世紀梨についての生産状況を尋ねた。その結果、二十世紀梨は現在生産されていないことがわかった。松戸市の特産品について尋ねたところ、大学からも近い小金地域において、あじさいねぎという特産品が、生産、販売されていることがわかった。ねぎは、一年を通して多く生産されており、大学オリジナル商品を開発するのに適していると考えた。そこから、二十世紀梨ではなく、あじさいねぎを使った大学オリジナル商品の開発、販売をすることに決めた。その後、一人ひとり、あじさいねぎを使い、どのような商品を販売したいか作ってきてもらい、試食会を開催した。活動メンバーから様々な意見が飛び交った結果、せんべいを作ることにした。そして、私達と共に商品開発に携わってくれる企業を探すため、販売企画書の作成にとりかかった。アドバイザー教員にアドバイスしていただき、少しずつ完成に近づいているところである。

実際に活動を進めると、秋学期という半年間では時間が全く足りないことを実感した。また、予定通りに進めることの難しさを痛感した。店で陳列されている商品も、長い年月を経て、試行錯誤を重ねて販売されているのだと考えた。この活動は、まだまだこれからである。３年生となっても、たくさんの人 の助けを借りながら継続して活動し、大学オリジナル商品の販売を実現させたい。

アドバイザーコメント ：

未経験のゼロからのスタートではじまり、数度のミーティングやすでに成功事例を出している他大学生や市役所への聞き込みを重ね、松戸市の特産品を使用したお菓子販売というところに焦点をあて、また実際に自分たちで試作品を作って試食会をしているなど、商品化に向けて試行錯誤している点は素晴らしい。

今後は、より最終消費者や、またそれを製造するメーカーの立場も考えた経営的な視点を取り入れて商品化を進めて欲しい。今後の彼らの活躍に期待する。

（経済学部　小沢 佳奈）

活動テーマ ：「特別奨学生説明会」「経営学科ゼミ説明会」「松戸市の特産品を使っての商品作り」

活動分野 ： キャリア支援　学生生活支援　商品開発

実践者名 ： 佐高 友滉（経済学部 経営学科 2 年）

活 動 先 ： 流通経済大学付属柏高校、流通経済大学、松戸市

日程・場所 ：

「特別奨学生説明会」：流通経済大学付属柏高校　9 月 5 日

「経営学科ゼミ説明会」：新松戸キャンパス　11 月 19 日～20 日

「松戸市の特産品を使っての商品作り」：新松戸キャンパス、松戸市役所

概　　要 ：

「特別奨学生説明会」とは、母校（付属校）へ行き、特別奨学生制度とはどういうものか、どういった活動をしているのかなどを説明、アドバイスしに行くという活動です。私はパワーポイントの作成、特別奨学生制度の説明をしました。

「経営学科ゼミ説明会」とは、１年生に向けて、経営学科のそれぞれのゼミの代表が集まり、自分のゼミはどういうゼミかというのを説明する活動です。私は 2 年吉村ゼミ代表として参加しました。

「松戸市の特産品を使っての商品作り」とは、松戸市の特産品を使って、何か商品を作ろうという活動です。

活動レポート ：

まず初めに行った自主活動は、「特別奨学生説明会」でした。私は高校３年生の時に、流通経済大学に特別奨学生として入学しようと決めたのですが、その時に特別奨学生についての説明がなく、またこういった制度があるというのを知ったのも夏休み後であったため、非常にあやふやな状態で不安でした。そこで、特別奨学生を目指している後輩のためにも、説明会みたいなものをしたらどうかと考えました。そして、経済学科の金森東基君も同じ事を考えていたため、2 人で実行しました。説明会の日時などは金森君が高校の先生に連絡をとり、決めてくれました。私は説明会で使う資料と説明会の流れ決めを担当しました。説明会は９月５日の１３時頃に開始で、まず３学年全員の前で特別奨学生制度の概要の説明と、この後、特別奨学生を希望している人向けに詳しい説明会をするというアナウンスから始まりました。この学年全員の前で説明するというのは直前まで知らされておらず、とても緊張しました。その後の説明会の流れは、まずパワーポイントを使って、特別奨学生制度の説明、その後私達が受けている特別授業でどんなことをやっているのか体験してもらおうと思い、キャリア特講でやっているＳＰＩ対策問題を配り、解いてもらいました。パワーポイントでは、入試の形、受験料、受験回数、募集人数、奨学金、特別奨学生特別プログラムについて詳しく説明し、特に特別奨学生制度の一番の魅力は返済不要の給付型の奨学金にあると考えたため、奨学金により授業料はどれほどになるのか、毎年審査があるため、テストなどはまじめに取り組むことなど、奨学金関係のことについて力を入れて説明しました。奨学金の話しをした時に、男の子が目を輝かせていたのがとても印象的でした。特別奨学生プログラムについても、パンフレットに詳しく書いてないので、興味を持って聞いてくれました。キャリア特講の問題は数学Ａで解ける問題を使い、グループになって問題を解いてもらいました。最後に、「あまり易しくない。油断

していると落ちる。最後まで気を抜かずに頑張って。」と言い、説明会を終えました。１０人来たら良いほうだろうと思っていたら３０人以上、しかもセンター試験説明会も同時にやっている中来てくれたのでとても嬉しかったです。説明会自体も、かなり質問され、いい反応が見られたので、やってよかったと感じました。また、私自身も、大勢の前で喋る事を経験出来たので、とてもいい経験になりました。

「経営学科ゼミ説明会」は、経営学科の渡辺篤史君に、２年吉村ゼミ代表として出てくれないかと誘われ、参加しました。１１月２０日の１２時頃に実施し、９０５教室を訪れてきた１年生、特に吉村ゼミに興味を持っている学生に自分のゼミは何を学ぶのか、他のゼミと比べてどうかなどを説明するものでした。規模は特別奨学生説明会よりも小さかったため、それほど緊張はしなかったのですが、４年の吉村ゼミのゼミ長の説明の上手さに驚きました。私もあれくらい喋れるようになりたいと思いました。

「松戸市の特産品を使っての商品作り」は、経営学科の石井美貴さんから誘われたものです。松戸市の特産品を使って商品を作り、販売しようというものです。計画としては、商品企画→市役所に協力してもらい提携先企業を探す→販売という流れです。しかし、私達は最初何をしていいかわかりませんでした。そこで、まず本格的に商品開発をしている他のサークルにインタビューをしに行くことにしました。商品開発サークルを探したところ、お茶の水女子大学のオチャスというサークルが見つかったので、そこへ連絡をし、インタビューをしに行きました。そこで色々お話を聞き、まずは商品企画ということで、商品を企画する段階に入りました。皆で意見を出し合い、４つほど商品を考え、その商品を作ってきて、皆で試食会をし、松戸市の特産であるアジサイネギというのを使ったアジサイネギ煎餅という商品を作ることにしました。しかし時間が無く、この活動はこの段階で止まっています。

私の大学生活の目的として、大勢の前で喋るのが苦手なので喋れるようになる、コミュニケーション能力を向上するなどがあります。今回、未来力チャレンジを通じて、大勢の前で喋ったり、一対一で知らない人と喋ったりとかなり良い経験になり、自分が成長したのではないかと思います。これからの学生生活でも、このような機会を自ら作っていき、もっと自分を成長させていきたいと思います。

アドバイザーコメント：

３つの取り組みとも、それなりの成果を収めたようである。

付属高校で行った「特別奨学生説明会」と本学で行った「経営学科ゼミ説明会」では、そこで伝えるべき内容を正確に理解し、またその内容を聞き手にうまく説明することについて、多くの努力（工夫）がなされたようである。特に、「特別奨学生説明会」については、パワーポイントを使った分かりやすい説明であったとのコメントを付属高校の教員から得た。

また、「松戸市の特産品を使っての商品作り」については、経営学科の学生として良い経験であったと考える。売れる商品を企画し、それをいかにして顧客に販売するか、というプロセスがより具体的に理解できたものと思う。ただ、最終段階である商品の販売には至っていないとのことでこの活動を継続することを期待する。

（経済学部　吉村 聡）

活動テーマ　：　2014 年度入学対象経営学科 2 年ゼミ選択相談会の開催
新松戸での清掃のボランティア

活動分野　：　学生生活支援　地域貢献

実践者名　：　土屋 宗之（経済学部 経営学科 2 年）

活 動 先　：　流通経済大学 新松戸キャンパス構内　新松戸駅から南流山駅周辺

日程・場所　：

11 月 19 日（水）、20 日（木）のお昼休みの時間二日間限定で活動。

場所は 905 の教室にて実施した。

2 月 6 日（金）、13 日（金）の新松戸駅から南流山駅周辺で活動、実施した。

概　　要　：

- 来年度ゼミ選択を控える 2014 年度入学した経営学科生に対しゼミ選択に関する疑問や不安を相談 できる相談会を実施した。 内容としては、各ゼミにそのゼミに所属する学生(2〜4 年生)を相談員として迎え、各ゼミ別に相 談ブースを設けた相談会を行った。
  私自身は、渡辺君のサポートや、各階のエレベーター付近の掲示板にポスター張りをするなどバックグラウンドで活動した。
- 新松戸駅周辺から南流山駅にかけて清掃活動を行った。 内容としては、坂本君、木下君とともに駅から駅までの道を歩き、ゴミ拾いや落ち葉拾いをした。
  私自身は、二人とともに下見をし、どこらへんにゴミがあるかを調べ、ゴミ拾いをした。

活動レポート　：

今回の未来力チャレンジは、いろいろな人に助けられる形で実行した。まずゼミ選択相談会は渡辺篤志君に声をかけてもらい、彼の、１年生のために少しでも手助けになる事が自分にも出来るのではないかという考えに賛同し、企画のサポート、協力をして実行した。次に清掃ボランティアの方は坂本靖季君に声をかけてもらい彼の自分のキャンパスがある新松戸を少しでもきれいにし、地域に貢献したいという考えに賛同し、一緒に企画し、実行した。二人が声をかけてくれたおかげ今回の企画に参加することができたのでとても感謝している。そして企画を終えて振り返りをすることでいろいろ勉強になった。

自分は、今回のゼミ選択相談会ではサポートなど裏方の仕事にまわっていたのだがサポートだけやればいいと思い、最低限の仕事、つまり指示された仕事しかやらなかった。その結果渡辺君に仕事を任せすぎてしまい、彼が体調を崩してしまうなどのことが起きてしまった。自分がもっと積極的に仕事をしにいけばこんなことにならなかったと思うと後悔しかない。だから今回のことで積極的に自分のできる仕事をしに行くこと、つまり積極性が大事ということが改めて勉強になった。

清掃ボランティアの方はゼミ選択相談会の後ということで、少しは積極的に動くことができ、反省を活かすことができ、さらに自分の通っているキャンパスのある地元に貢献できてよかった。しかし、ゴミの量の予想を甘く見て時間がかかりすぎてしまったなどの反省も多かった。

しかし反省も多かったが良いことも多かった、まずは上記の地元に貢献できたことがあるが、ゼミ選択相談会のほうでは今の１年生のどのゼミに進みたいかという意思を聞くことができ、何をどう使えば人がたくさん来るかというこれからの役に立つだろう知識を得ることもできた。この良か

ったことを忘れず、さらに伸ばしていくことが大学生のうち、さらには社会に出た時にもきっと役に立つと私は考えている。だから今回の未来力チャレンジはとても自分のためになる、有意義なものだったと思う。

最後に今回の未来力チャレンジはいろいろな人に助けられ、迷惑をかけてしまった。しかしそれでも最後まで一緒にやってくれた方々にはとても感謝している。そのおかげでまた反省ができ、自分の悪かったところを見つめなおすことができた。もし次にもまたこのような活動があったら、自分の仕事をしっかり見つけ、サポートをし、それか今度は自分で企画をするなど新しいことをしてみたい。

アドバイザーコメント：

本活動は事前に活動目的・内容について相談を受け、トラブルが生じないように報告・連絡相談をしつつ実行した。一年生全員が集まる場を利用して周知を行い、ゼミ担当教員やゼミ生を巻き込むことで活動に広がりを持たせることができた。一年生に対しては学生の視点からゼミを紹介することでより親しみやすく、満足度の高い情報の提供と多数の学生の参加が実現された。こうした活動を学生が主導して行うようになったことは大変喜ばしいことであり、後輩に対しても模範となる活動であり、高く評価できる。今後の活躍を期待しています。

（経済学部　梅木 眞）

活動テーマ　：　松戸市の特産品を使って流大オリジナル商品を企画し、販売しよう！！！

活動分野　：　商品開発

実践者名　：　吉満 彩季（経済学部 経営学科 2 年）

活 動 先　：　流通経済大学内

日程・場所　：

9/22　流通経済大学

9/25　流通経済大学

9/29　流通経済大学

11/21　お茶の水女子大学

12/5　流通経済大学

12/10　流通経済大学

12/19　流通経済大学

冬休み中　自宅

概　　要　：

9/22　話し合い　内容は大まかな販売の日程（短期の活動にするか長期の活動にするか等）。

9/25　話し合い　内容は 9/22 の続きと市役所で伺うことについて（市の特産品、ふるさと納税について等）。

9/29　話し合い　内容は松戸市の特産品のかぼちゃ、あじさいねぎ、二十世紀梨の中から何を使って商品を作るか。また、どのような商品にするか。

11/21　お茶の水大学の０ｃｈａｓサークルの学生にお話を伺う　内容は実際に商品販売までにかかった経緯や時間、費用など。

12/5　話し合い　内容は商品の案を出し合い、次の試食会時に商品候補の決定。

12/10　試食会　商品をあじさい煎餅に決定。

12/19 小沢先生にお話を伺う　商品の魅力やアピールポイント、売り方や似た商品はないかなどのアドバイスをいただく。

冬休み中　家で松戸市内のお煎餅の会社の調査。

活動レポート　：

　私は石井さんに誘われて経済学部の三人の仲間と一緒に、松戸市の特産品を使って流大オリジナル商品を作り、その企画から販売までをするという活動をしました。

　最初は、話し合いから始まりました。一回目は、これから何を調べて決めて行けばよいかということについての話し合いと、長期の活動にするか短期の活動にするか。また、その大まかなスケジュールについて話し合いました。短期の活動にする場合には松戸市で有名な食べ物を売り、長期の活動にする場合には松戸市の特産品を使って流大オリジナル商品を企画から販売まで行うということに決定しました。

　二回目の話し合いでは、市役所に聞くことをまとめました。話し合いの結果、聞くことは市の特産品、市と連携で商品（お菓子）を作っている店、ふるさと納税の品についての三つにまとまりました。また、市役所へは石井さんに連絡していただきました。その結果、市の特産品は二十世紀梨

とかぼちゃ、あじさいねぎの三つがあるということ。市と連携で商品を作っている企業はないということ。ふるさと納税の品は特にないということが分かりました。

市役所に聞いた結果を踏まえ、三回目の話し合いではどの特産物を使って商品を作るかということと、どこで商品を売るかということについて話し合いました。使用する特産物については、決定しませんでしたが、どのような商品にするかという点については、パイやソフトクリーム、ケーキやジュースなどいろいろな案が出ました。また、どこで販売するかという点については、スエヒロやカフェ、丸善での販売に決定しました。そして次のお茶の水大学の Ochas サークルの方に聞くことなどもまとめました。

Ochas サークルの方のお話では、主に商品の企画から販売までの実際の経緯や時間、費用などを聞くことができました。このときは、不二家とのコラボ商品の“二層の贅沢バウム～お茶の水仕立て～”という商品を作った時の実際の大まかな流れを聞くことができました。六月の下旬に区役所に話を持っていき、八月の初めに企業に試作の依頼をし、八月の末には商品の確認をしたそうです。そして、九月中旬に入荷し、十一月の初めごろに発売となったそうです。次に、この商品が実際に売られる値段は 135 円で、納品の価格が 135 円ということを教えていただきました。また、販売は大学や提携先の不二家、そのほかにイベントでも販売されているということでした。このイベントは、NPO 団体と新宿の高島屋が開催しているもので、大学生が作った商品の展覧会のようなもので、毎年六月に開催されているようです。そして、最後に、市役所に企画を持っていくときは、予算やスケジュール、どのような商品にしたいか等の具体的なイメージを明確にして持っていくとよいということ、学生らしく元気とやる気をもってとアドバイスをいただきました。

四回目の話し合いでは、あじさいねぎを使った商品にすることが決定し、事前に一人一つ商品の案を考えておきました。出た案を次の試食会時までに自分で作り、実際に食べてからどれを商品化するかを決めるということになりました。そして、試食会ではそれぞれ作ったものを食べあい、商品化するものをあじさい煎餅に決定しました。

次は、決定した商品の企画書を持って、アドバイザーの小沢先生にお話を伺いに行きました。アドバイスとして、商品の魅力やアピールポイント、袋で売るか小売りにするか等の売り方について、なぜあじさいねぎにしたのか、ほかに似たような商品はないか、協力していただけそうな松戸市内のお煎餅の会社のピックアップ等のアドバイスをいただきました。これらのアドバイスの中から分担して、自分は松戸市内のお煎餅の会社のピックアップを担当し冬休み中に調べました。

現在はこの辺りまで進行しており、三月から活動を再開する予定です。

アドバイザーコメント：

未経験のゼロからのスタートではじまり、数度のミーティングやすでに成功事例を出している他大学生や市役所への聞き込みを重ね、松戸市の特産品を使用したお菓子販売というところに焦点をあて、また実際に自分たちで試作品を作って試食会をしているなど、商品化に向けて試行錯誤している点は素晴らしい。

今後は、より最終消費者や、またそれを製造するメーカーの立場も考えた経営的な視点を取り入れて商品化を進めて欲しい。今後の彼らの活躍に期待する。

（経済学部　小沢 佳奈）

活動テーマ　：　2014 年度入学生対象経営学科 2 年ゼミ選択相談会の開催

活動分野　：　学生生活支援

実践者名　：　渡辺　篤司（経済学部　経営学科　2 年）

活 動 先　：　流通経済大学　新松戸キャンパス構内

日程・場所　：

11 月 19 日（水）、20 日（木）のお昼休みの時間 2 日間限定で活動。
活動場所は 905 の教室にて実施した。

概　　要　：

来年度ゼミ選択を控える2014 年度入学した経営学科生に対しゼミ選択に関する疑問や不安を相談できる相談会の実施した。

内容としては、各ゼミごとにそのゼミに所属する学生（2ー4 年生）を相談員として迎え、各ゼミ別に相　談ブースを設けた相談会を行った。

私自身は、相談会が円滑に行われるよう、バックラウンドからのサポート、また、相談会に使用する　資料の準備、相談員から寄せられる疑問〃不安の解決の役割を担当した。

活動レポート　：

まず、この企画をやろうと思ったきっかけが三つある。一つ目は、このレポートを仕上げるため、二つ目は、友人が発した、「ゼミ選択をもう一度やり直したい。先輩が相談に乗ってくれる機会みたいなのがあればよかった」の一言があったため、三つ目は、私が昨年経験した「RKU WEEK　の SA」を務めていた時、担当していた一年生から「ゼミとはどんなシステムでどういうのがあるのですか」の一言があったからである。そして、それらのきっかけがあったからこそ、少しでも手助けになる事が自分にも出来るのではないかと考えに至りこの企画を立案した。この活動は私にとって人生で初めて自らが企画・運営したものであった。そして企画を終えてたくさん苦労があったのと同じく勉強になった事があった。

様々な苦労の中でも特に苦労したことは人の管理である。この企画にはたくさんの人が関わったものだった為にその人達をどのようにまとめていかなければいけないかを考えるのが大変だった。例えば、相談員を務めてくれる人を探し企画スケジュールを立てていかなければならない、コーディネーター教員を務めてくれる人を探さなければならない、経営学科の１年生１４２人に興味を抱いてもらうためにどうアプローチしていけばいいのかなどであった。相談会の実施時間はお昼休みの５０分間に設定したので、当日会場に来てくれた１年生・相談員をどう配置し運営していくか等諸事も考えてかなければいけなかった。また、イベントを実施するにあたって、使用場所の許可を取ったり、資料を用意しなければならなかったりと様々な段取りを踏まなければいけなく、その手続きに時間がかかってしまいスケジュール調整に手間取ってしまった事もあった。

しかし、たくさん苦労し自分の実力・考え不足を痛感した中でも、得た事があった。それは、相手の視点に立った考えを持ち行動していく大切さである。他人は自分の都合でもちろん動いてくれる訳ではない。そして、自分の考えの甘さによって、他人に迷惑をかけてしまった所もあるかもしれないと思う点もあり、もう少しよく考えてしっかりと前準備をして行動すれば良かったと反省する事ができた。

また、もう一つ自分の中で大事だなと考えさせられた事があった。それは、他人をどう管理するかではなく自分の体調をどう管理するかである。やらなければいけないたくさんの事に追われ睡眠時間の確保が難しかった日が続いた事もあった。そのため、イベント本番の前日に３９度の熱を出してしまった。企画立案者ゆえに休む事譌出来ず、当日の間も体調不良の中で臨み実施した。たくさんの人が関わってくれただけにしっかりやらなければいけないと根を詰めすぎて、自分の体調変化に気づく事 ができなかった。それゆえ、自分の管理もこの企画を実施するにあたってはとても大切な事なんだと改めて考えさせられた。

最後に、私はとても運がよかったと思っている。なぜなら、このイベントを企画できる機会に出会い自分の悪い所に気付け、勉強になった事もあり人生初で企画したイベントが自分が体調不良の中でも無事に終わる事ができたからだ。そして、なにより、協力をお願いしたみなさんに快諾を頂けたのに加え、様々なサポートまでも頂けたからだ。人に恵まれていなかったらこの企画の成功は無かったと思う。協力して頂いた方々に本当に感謝している。ありがとうございました。

アドバイザーコメント ：

本活動は事前に活動日程・内容について相談を受け、トラブルが生じないように報告・連絡・相談をしつつ実行した。一年生全員が集まる場を利用して周知を行い、ゼミ担当教員がゼミ生を巻き込むかとで活動に広がりを持たせることができた。一年生に対しては学生の視点からゼミを紹介することでより親しみやすく、満足度の高い情報の提供と多数の学生の参加が実現された。こうした活動を学生が主導して行うようになったことは大変喜ばしく、後輩に対しても模範となる活動であり、高く評価できる。

今後の活躍を期待しています

（経済学部　梅木 眞）

活動テーマ ： 自主的勉強・研究

活動分野 ： 学生生活支援

実践者名 ： 松山 文哉（経済学部 経済学科 2 年）

活 動 先 ： 経済研究サークル(仮)

日程・場所 ：

11 月……メンバー集め。活動の仕方の決定。

12～2 月……月曜日 6 限には龍ケ崎キャンパスで勉強会。金曜日 5 限には新松戸キャンパスでプレゼン・議論。

1 月 27,28 日……目黒先生とそのゼミ生(1 人紹介していただいた)と合宿

2 月 13 日……野村證券見学

概　　要 ：

勉強や研究に関心のある学生が集まるサークルを作る。そして、専任教員の指導を受けながら、通常の講義で学習する内容についての復習を通じて確実に理解するだけでなく、より高度な内容や、講義では取りあげられることの少ない現代経済の問題点などを議論し、質問などを通じて視野を広げ、理解を深める。

活動レポート ：

RKU 未来力チャレンジで私が行った活動は、勉強をしたり、発表をしたり、それを聞いて意見を出したりすることでる。これはゼミでできることだと思われるだろう。そうだとすればこのような活動をする必要もない。しかし実際には、経済学科に限った場合かもしれないが、ゼミによってはそのような活動が少ない場合もある。さらに、経済学部を選ぶ学生の多くは目的意識をもって入学する学生が少ないといわれている。しかし、普段の授業以上の勉強をする学生は、その数は少ないだろうが、何人かはいる。そのような学生は目的があるからこそ自主的に勉強している。そこで、彼らの関心のあることや意見などを私は知りたいと思った。また、それらを発表したり、先生から教えてもらったりする機会を作るべきだと考えた。教えられるだけでなく、自分が教える側になったほうが、本人の頭に強く記憶されるのである。そこで、関心のある学生たちで学習サークルを作ろうと考えた。

まずは、先生方を通じて学習に関心のある学生を紹介していただいた。そして、その学生たちで勉強会について話し合った。月曜日には先生から通常の授業以上の専門的内容を教えていただき、金曜日には各人の関心のあることを発表し、それに対する質問や意見を出し合うことにした。難点だったのは、そのメンバーと先生のスケジュールにより、集まる時間が限られていることだった。今のメンバーは、偶然にも共通した空いた時間があったので集まることができた。しかし、学生の立場から何か新しい活動を始めようとすると、各人の日程や地理的要因によって、参加する意思があっても参加できない人もいることを考えさせられた。

勉強会は、ただ先生が教えるだけでなく、わかっている学生が説明したり、考えを出し合ったりする形式になった。普段の授業は先生が教えている時間が長く、学生の方から何かを話す機会が少ない。しかし、私たちの勉強会では後者を重要視した。私も以前からこのような機会があった方が良いと考えていたので、実際にその機会が得られて良かったと思っている。私としては、説明した

り考えを出したりすることを積極的にできたと思う。頭の中ではイメージできていても、それを説明するのが難しく、上手くできたかどうかには自信がない。しかし、その経験をしただけでも自分にとってはプラスになったと思う。

2 月 13 日には、長瀬先生からの紹介で、野村證券の見学に行った。そこでは、実際に証券会社に勤めている人の話を聞いたり、現場を見たりすることができた。実際の業界の人の話は、普段の教室内では勉強できない実践的内容も多くあり、とてもためになった。今の私は、就職先を決めてはいないが、業界研究のためには良い勉強になった。

RKU 未来力チャレンジの活動を通して勉強したことの中身は、実際の社会の分析に直接的に活かすことができると思う。さらに、説明する力や聞く力は、仕事や勉強のプレゼンなどの、さまざまなことに活かすことができると思う。この活動を通じて、様々な人と知り合った。その人々との関係を、これからの学習面やサークル活動において継続させて、大学生活に活かしたいと思う。来年度の新 1 年生の中にも、勉強しようという目的意識を持っている人がいるらしいので、彼らの期待に応えられるようにしたいと思う。また、野村證券を見学したとき、塩野七生さんの次の言葉を知った。「私が歴史から学んだことの一つは、才能ある人間が少なくなったから国が滅ぶのではなく、才能ある人間を活用するメカニズムが機能しなくなったから滅ぶということです。能力のある人間はいつの時代にもいるんです」。流通経済大学には特別奨学生制度があるが、「能力のある人間」と特別奨学生が一致するとは限らない。私は能力のある人間を活用する活動ができたと思うし、これからも続けたいと思う。

アドバイザーコメント ：

松山君は、今年度に新たに立ち上げた経済研究サークル（仮）の中心的メンバーとして、とても精力的に活動しています。立ち上げの段階では 3 年生の有志と連絡を取り、1 年生にも声を掛けて仲間を増やし、立ち上げの原動力になり、活動が軌道に乗ってからも、教員に積極的にアプローチして学習の領域を広げていくなど、サークルの運営に関わる重要な仕事を担当してくれています。サークルの次世代を担っていく戦力として、頼りになる存在です。

勉強会では、基礎的な学習を地道に積み重ねており、学問的理解は本学経済学科の中では出色です。教科書の内容を確実に修得することに秀でているだけでなく、現在の資本主義経済体制の矛盾点や今後の展望、現在の経済学の理論的背景となる経済思想にも興味を持っており、同じ知的好奇心を持ち合わせる仲間や教員と交流しながら、堅実な知的基盤に裏付けられた議論を行い、自身の理解を深めています。こうした、講義では深く掘り下げる時間的な余裕のない、しかしながら学生

時代に是非とも思索を深めてもらいたい事柄に対する知見を、サークル活動を通じて自身の教養の一つとして築くことに精進している松山君の姿勢は高く評価できます。

今後もサークルを盛り上げながら、自身の知的好奇心をより高い内容で満たすことを目指しながら、先輩としてサークルを中心に後進への指導を行ったり相談に乗るなどの、組織をまとめていくリーダーとしての体験を積み重ねていってもらいたいと思います。また、彼の取り組みが、学びへの意欲を持っている本学科の仲間たちへの刺激を与え続けてくれることを希望します。

（経済学部　長瀬 毅）

活動テーマ　：　清掃活動　新松戸での落ち葉拾い

活動分野　：　地域貢献

実践者名　：　坂本 靖季（経済学部 経営学科 2 年）

活 動 先　：　新松戸地区

日程・場所　：

①　アドバイザーとの相談、注意点の確認、日程調整→新松戸・2014 年 11 月～2015 年 1 月
②　フィールドワーク→新松戸・2015 年 2 月 2 日
③　清掃活動→新松戸・2015 年 2 月 6 日
④　反省・改善点→自宅・2015 年 2 月 6 日
⑤　清掃活動→新松戸・2015 年 2 月 13 日
⑥　まとめ→自宅・2015 年 2 月 13 日

概　　要　：

①事前調査
・アドバイザー教員に相談し、行うにあたっての諸注意をいただく。
・アドバイスを基に不明瞭な点をインターネットで調べる。
（新松戸地区におけるゴミ区分のルールなど）
・地図などを確認し、具体的な活動範囲を決定。

②フィールドワーク
・実際に新松戸地区を歩き、落ち葉の多い場所や落ち葉を捨てる場所の確認。
・人通りの多さを確認し、重点清掃箇所や通行の邪魔にならない地点などの確認。
・清掃箇所の決定、清掃箇所の地図の作成

③清掃活動
・新松戸地区の歩道及び車道の清掃

活動レポート　：

今回私は新松戸地区の清掃活動を行った。新松戸地区は強い風が吹くことが多く、それによって落ち葉が舞い上がり邪魔だと感じたからだ。また、落ち葉の数が多ければ、歩行者はもちろんのこと、自転車や自動車の運転者の視界も奪う可能性があり、危険であるとも感じたためである。

清掃活動を行うにあたって、まずゼミの担当教授である梅木先生に相談したところ、ゴミの捨て方などいくつかの注意点を教えていただいた。それまでは、落ち葉は燃えるゴミに捨てれば良いものだと思っていたが、松戸市のホームページで調べたところ、落ち葉は燃えるゴミでは回収せず、資源ゴミとして回収していることがわかった。理由としては、屋外に落ちている落ち葉や枝などは放射能によって汚染されている可能性が高いため、燃えるゴミと一緒に処分せずに別に処分するためと書いてあった。そのため、当初は新松戸地区の燃えるゴミの回収日である月水金の前日である日火木のいずれかで行うことを計画していたが、資源ゴミの回収が土曜日のみであるため、金曜日に行うことに決定した。

清掃を行う前に、私は新松戸地区を実際に歩くことでどこに落ち葉が多く落ちているかを観察した。この際に、落ち葉が特に多く落ちていると感じた場所が 3 か所あった。１つ目は流通経済大

学新松戸キャンパス前。ここは、歩道および自転車道と車道の間に木が立ち並んでいる。そのため、木の下には落ち葉がたくさん落ちていた。また、ここは新松戸のメインストリートでもあるため、落ち葉が風によって舞い上がれば、多くの歩行者、自転車及び自動車の運転者が迷惑することが考えられる。２つ目はメインストリートを流山方面に 10 分ほど歩いた地点にある新松戸中央公園。ここは木や植物が多く、公園内には多くの落ち葉が落ちていた。また、それは風によって移動し公園の周囲にある歩道や車道に多く散乱していた。3 つ目はメインストリートと平行に並ぶ、武蔵野線側にある道路。ここは、メインストリートに比べると車道、歩道ともに狭く、利用者も少ない。しかし、メインストリート同様木が植えられているため落ち葉もかなり落ちていた。その他の箇所にも落ち葉は落ちていたが、この 3 地点が特に落ち葉の量が多いと判断し、候補として挙げた。

清掃活動 1 日目は、前日に雨が降ったことにより葉が湿っていることが予想された。そのため。清掃活動前にこの 3 地点を見てまわった。案の定、キャンパス前に落ちている葉は湿っていた。そして、実際に清掃するという視点で見ると、この場所に落ちている葉は下から生える植物と密接に絡まっているため、落ち葉だけを清掃することが困難であることがわかった。また。メインストリートということもあり清掃活動を行っていると歩行者の邪魔になってしまうことが予想された。次に、新松戸中央公園を見てみると、そこでは清掃業者の方が落ち葉の清掃活動を行っていた。そのため、初日は、メインストリートと平行して並ぶ道路の清掃を行うことにした。人通り及び車通りが少ないため、自分たちのペースで作業ができたが、風が強いために、清掃しているはずが反対に散乱してしまう場面が何度かあった。

清掃活動２日目は、武蔵野線の下の道路と、新松戸中央公園の周囲の歩道を中心に活動をした。武蔵野線の下には落ち葉も多く残っていたが、それ以上にコンビニの袋やペットボトルなどが目立った。しかし、ゴミ収集の日程の都合上燃えるゴミに区分されるゴミやペットボトルを拾うのはやめ、落ち葉のみを拾った。清掃後は、落ち葉こそ無くなったが、他のゴミはそのまま残してしまったため達成感はあまりなかった。新松戸中央公園では、公園内では清掃業者の方が清掃している所を見たため、おそらく業者の方は清掃しないであろう周囲の歩道を中心に清掃した。ここは他のゴミなどはなく、落ち葉も湿っている物がなかったため、清掃しやすく、清掃後の達成感も大きかった。２日目は活動中に声をかけてもらえる事が何度かあったため、１日目よりは達成感が大きいように感じられた。

準備、活動を通して、「清掃活動」と一言で言っても、歩行者や車両、ゴミの収集日といった周囲の環境に大きく左右され、簡単に活動できるわけではないことがわかった。それにより、今まで気にも留めていなかった日常の光景は、多くの計画によって成り立っていることがわかった。これからは、誰かのために活動をしている人々、そしてそれを計画した人に感謝して、できれば挨拶をしたり感謝の気持ちを伝えたりしていけたらと思う。

アドバイザーコメント：

現在の大学は地域社会に開かれた存在であり、学生が地域社会活動に積極的に参加することはきわめて意義のあることである。街路樹が豊かな新松戸地区は整然とした景観であるものの、落ち葉の清掃も含めた維持活動には多大な人手を必要とする。そういう問題を踏まえ、地域のステークホルダーとして本学の学生が活動に参加することはとても大きな意義がある。地道な活動ではあるが、

こうした活動の積み重ねがより良い地域社会と、地域と共生する大学を創っていく上で重要である。今後はこうした活動を自分自身で行うだけでなく、広く周囲に呼びかけることで活動の輪を広げていくことを期待している。今後の活躍を期待しています。

（経済学部　梅木 眞）

活動テーマ ： 新松戸をよりきれいな街へ

活動分野 ： 地域貢献

実践者名 ： 木下 隆宏（経済学部 経営学科 2 年）

活 動 先 ： 新松戸地区

日程・場所 ：

2 月 6 日　2 月 13 日

概　　要 ：

新松戸の街に落ちている落ち葉をメインにいろんなゴミを拾った。
自分は主に掃きを担当した。

活動レポート ：

新松戸に少しでも貢献できることがしたいと思い、3 人で話し合った結果、新松戸の街をきれいにしようという結論にいたりました。後日、坂本くんが下見をし、ごみがたくさん落ちている場所をいくつか、みつけてもらいました。

第一回目の活動 2 月 6 日。この日はとても風が強かったので清掃するにはあまりよくない日でした。この日は土屋くんがいなっかたので坂本くんと僕の二人で活動をしました。いざ現場にいくとたくさんのゴミ（特に落ち葉）がたくさん落ちでいました。落ち葉に混じってタバコの吸い殻もたくさんありました。おそらく、車の運転中に捨てたんだと思われます。清掃活動していると、ときどき街の人が「ご苦労様」ですなど、声をかけてもらえたのでとてもうれしかったです。1 日目はお昼の 1 時から 5 時まで活動をしてゴミ袋 3 袋ぐらいになりました。4 時間の間でけっこう綺麗になったと思います。

2 月 13 日　2 回目の活動。この日は土屋くんも参加し 3 人での活動を行いました。1 日目清掃した場所を見にいったのですが、ごみはほとんど落ちていなく、清掃した甲斐がありました。2 日目は少し人通りが多い道も清掃しました。この日は 3 人での活動だったんで、1 日目より効率よく清掃が出来ました。この日も前回と同様に 1 時～5 時までの活動。この日はゴミ袋 5 袋くらい拾いました。

今回の活動では 3 人しか人が集まらなかったのですが、他の奨学生の人や新松戸の人と協力して清掃活動などの新松戸に少しでも貢献できるような活動をしていきたいと思います。

アドバイザーコメント ：

清掃活動というボランティアを通して、共同実施者と協力して、活動を行ったことは良いことだと思います。また、清掃活動での感謝の気持ちを実感したことも重要な経験になったと思います。今後も継続していってほしいと思います。

ただし、報告書提出直前にアドバイザーを頼むことは反省すべき点です。「ＲＫＵ未来力チャレンジ」の重要な意図である、活動を自主的に計画し、アドバイザー教員にアドバイスをもとめ、活動を実施して、それを振り返るという一連のプロセスが疎かにされます。

（経済学部　田村 太一）

活動テーマ　：　ゼミの活動内容を伝えるページを作る

活動分野　：　学生生活支援

実践者名　：　長谷川　優（経済学部　経営学科　2 年）

活　動　先　：　流通経済大学　経済学部経営学科　崔ゼミ

日程・場所　：

12 月 18 日　アドバイザーの先生と相談

12 月 18 日　動画撮影

2 月 12 日　動画編集やページ作成に関して相談

概　　要　：

ゼミの風景の写真や動画を撮影する。

Facebook 内にゼミを紹介するページを作成する。

撮影した動画や画像を編集しページ内で閲覧できる状態にする。

活動レポート　：

最初に企画していた自主活動の内容が途中で変更になってしまったり、動画等の資料をそろえるための時間が足りなかったりと、少し計画と違ってきてしまった。

この活動内容にした理由として、ゼミの先生でもありアドバイザーの先生でもある崔光先生の助言によるものだった。竜ヶ崎キャンパスの経済学部の授業の資料が少ないという話を聞き、自分がゼミを選択するさいに悩んだことを思い出した。

ゼミの活動内容などはシラバスや資料で知ることはできるが、実際の活動を動画で確認できたり、所属する生徒や担当の先生に確認できたらゼミを選ぶ手助けになるのではないかと思った。

それを先生に相談したところ、先生が受け持つ他学年のゼミの資料を提供していただき、この活動を進めていくこととなった。

活動の内容としては、Facebook ページの作成やその編集等だったがその知識や技術がほとんどなかったため苦戦してしまった。これから、Facebook ページの機能を利用してシラバス等に Facebook ページに参加申請・閲覧できるようにしていければいいと思う。また、ゼミを紹介していくページとしてはまだまだ至らない点が多いためこれからも管理・更新をしっかりとやっていこうと思う。

崔光先生のゼミの資料を集める際に他の学年の授業風景を見ることができ、これからどのようにゼミを進めていくかや、どういった姿勢でやればよいかなども勉強になった。他の生徒のためになるページを作成していこうと始めたこの活動だが、結果的に自分のためにもなるいい活動だと思った。

今回の活動は自分の所属するゼミだけの紹介ページの作成だったが、これから他のゼミや学部にもこういったページを作成し、同じゼミ同士の交流も深めていけるようになっていけばいいと思う。

またシラバスにリンクを掲載し、授業内容や評価以外にも雰囲気や実際の活動内容の動画等を参考にしてもらう。そして他の生徒が新しい学年に上がった際、ゼミ選択の役に立っていけばいいと思う。

活動テーマ ： 高齢者のお手伝いをする

活動分野 ： 社会福祉

実践者名 ： 小山 葵（社会学部 社会学科 2 年）

活 動 先 ： 高齢者デイサービスセンター

日程・場所 ：

日程：2015 年 1 月 27 日から 2015 年 1 月 29 日の三日間

時間：午前 9 時半、または午前 10 時から午後 3 時まで　合計 15 時間 30 分

場所：竜ヶ崎市総合福祉センター内にある高齢者デイサービスセンター

住所：茨城県竜ケ崎市川原代町５０１４

概　　要 ：

高齢者の方の話を聞き一緒に話をし、レクリエーションの際には進行役になり、場を盛り上げるなど主にサポートをしていた。話すときは大きな声ではっきり、ゆっくりとしっかりと目を見ながら話し、高齢者の方にもわかるよう心がけた。他にも人形作りの際には、高齢者の苦手な細かい作業のみを担当し、老化を防ぐため、なるべく自分たちの力で作業してもらい、手伝いすぎないよう気をつけた。また、日々おこなっている老化防止の体操に一緒に体操に参加し、親睦を深めた。さらに、高齢者の入浴やトイレの手伝いなど、職員の方はできるが私たちにはできないことが多かったので、その際には、私にもできる食器洗いなどの雑用をして職員の方のサポートをした。ただ一緒に楽しく過ごすのではなく、高齢者の方が楽しく、安心して過ごせるようにサポートするように努めた。

活動レポート ：

今回、たった 3 日間という短い期間ではあったが、ボランティアをして感じたことや学んだことがたくさんあった。私が最初に高齢者デイサービスセンターに抱いていたイメージは、高齢者の世話はほぼすべて職員がやり、職員は常にやさしくしているような感じであった。しかし、実際には、職員はあまり手を貸さず、ちょっとしたサポートをしているだけだった。たとえば、車イスに乗っている人であっても、極力自分自身の力で車イスを漕いでもらい、椅子に座るときだけ手伝うなど、あまり手伝っていなかった。はじめは、やることが多く手が回らないから手伝わないのかと思っていたが、時を経るにつれて、わざとそうしていることに気付いた。高齢になってくると体を動かす機会も減り、どんどん老化が進んでいく。それを予防するためには、普段から自分のことは極力自身にやってもらう事が大切であることを、職員の方は知っており、だからこそ相手のことを思い、厳しくしているのだと分かった。そして、それがやさしさであると学んだ。なので、私も車イスを乗っている方を手伝う際には、扉の開閉だけ手伝い、あまり手伝いすぎないようにした。また、職員の方たちは、体調管理にはとても気を使っていた。高齢になるにつれ、免疫力が低下していくので、手洗いうがいはもちろん、体温や血圧をこまめに測り、アルコール除菌をするなど体調管理に気を使っていた。私自身も、ご飯を配膳する前やお茶を配る前など、こまめに手洗いをし、高齢者の体調管理に気をつけた。また、食事の際にはひとりひとり食事を分け、アレルギーのある食べ物や嫌いなものを入れないようにし、ご飯が食べにくい人はおかゆにするなど工夫をしていた。私たちが普段気にせず食べている食事も、高齢者にとっては一歩間違えれば危ないということが良く分

かった。そして。この体験を通して私が今まで、どれほど周りを見ていなかったかということに気付いた。いつものように自分基準で物事を考えていては高齢者の方や他の人に対応しきれないと感じ、自分の視野がどれほど狭いものかを実感した。今後は今回の体験を活かし、もっと視野を広げ、相手の立場に立って考えられるように努力したい。今回の体験で私が一番大切であると感じたのが、サポートである。ボランティア初日、私は高齢者と話すだけでもボランティアになり、サポートにつながると考えていた。しかし、どの職員の方をみても、ただ話しているだけの人はおらず、問題が起きた時や会話が途切れそうになったときに軽く会話に入ってくる程度であった。そして、高齢者の方が話している間、職員の方は高齢者の体調を気遣い、次は何をしたら良いのかなど常に高齢者の方が安全に、安心して過ごせるように裏でサポートしていることに気付いた。ただ一緒に話し、楽しむのではなく、高齢者の立場に立ち、高齢者が楽しく、安心して過ごせるようサポートすることが大切なのだと分かった。

　初めてのボランティアで、うまくできたとは言えないが、高齢者の方はみな、笑顔で喜んでくれたので、とてもうれしく感じ、ボランティアをして良かったと心から思った。そして、将来は高齢者が楽しく、安心して過ごせるよう、サポートできるような仕事に就きたいと考えた。今回の体験では、普段高齢者と共に生活していなければ分からないことや、高齢者と関わるうえで必要なことをたくさん学んだ。これからの生活で活かしていきたいと思うと同時に、またボランティアしたいと感じた。

アドバイザーコメント：

・実施計画書に書かれている内容はおおむね実行されている。

・ボランティア活動を通じて、「自分基準」ではなく、相手の立場（この場合は、高齢者）に立ってものを考える視点を獲得し、それを実行するためにはどれだけ細やかな配慮が必要とされるのかを実感した点は、高く評価できる。

・本人は、私が担当した 2 年演習でも家族社会学に関するレポートを書くなど、福祉およびその周辺分野に関心があるようである。そうだとすれば、今後の一層の学習と経験の蓄積に期待したい。

（社会学部　高橋 巌根）

活動テーマ　：　障害児と地域交流イベントのボランティア

活動分野　：　社会福祉

実 践 者 名　：　齋藤　優華（社会学部　社会学科　2 年）

活　動　先　：　龍ケ崎市社会福祉協議会

日程・場所　：

10 月 19 日（日）ふれあい広場

12 月 14 日（日）ふれあいクリスマス

概　　要　：

龍ヶ崎市社会福祉協議会が主催する障害児や地域の交流イベントに参加した。このイベントでは「障がいのある人もない人も地域での交流の輪を広げる」という目的に、ボランティア連絡協議会や社会福祉施設等と協働し行われている。

参加者には障害児や学生ボランティア、地域の小学生が所属するジュニアボランティア、障害者、地域の人々などがいる。

私が参加したのは「ふれあい広場」と「ふれあいクリスマス」というイベントだ。

ふれあい広場では　「人・ふれ愛・ささえ愛～ボランティアの輪を広げよう」をテーマに、ボランティアによる車いすバスケや点字などの福祉体験、模擬店や縁日、バザーコーナー、コロッケの無料配布をはじめ、小学生金管バンドの演奏や高校生によるダンスが披露されるイベントとなった。私はふれあい広場では、前日と当日の会場準備と当日の障害児の補助（食事、排せつの補助、体調管理など）、模擬店や縁日の手伝い、イベントの管理運営（駐車場案内、ゴミ管理など）、イベント終了後の清掃と片づけを担当した。

ふれあいクリスマスはクリスマスという行事を通して地域の交流を図るイベントだ。私はイベントで行う遊びの計画、スケジュールの細かな確認、イベント中のピアノ演奏、当日の会場準備、障害児の補助、イベント終了後の清掃と片づけを担当した。

イベント前の準備の段階では、社会福祉協議会の方々と学生ボランティア、時には地域のイベントに参加していただく方や流通経済大学の先生にも参加していただき、イベントの内容を何度か確認した。

イベントがみんなで参加し楽しめるものとなるように、昨年のイベントを振り返ったりしながら遊びの内容や一日の流れなどを主に考えた。障害がある人もない人を楽しめるものにすることや会場内や周囲の環境を考え安全を確保すること、飽きたり、疲れすぎないように順番を工夫すること、排せつや水分補給の時間が各自こまめにとれるよう工夫することなどを意識しなければならないことがたくさんあった。このようなイベントの計画にはイベントに参加する様々な人たちのそれぞれの立場となって、一日を想像することが大切ではないかと感じた。その他にもボランティア参加の呼びかけやより多くの人に参加していただけるよう地域の商店などへポスターの配布、遊びに必要なものの準備などに取り組んだ。

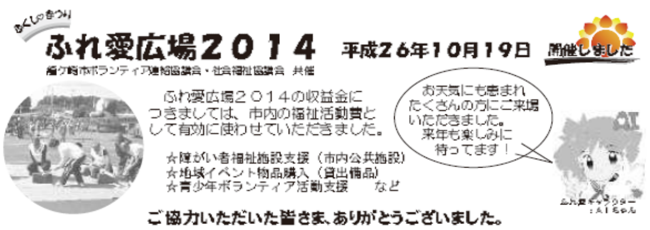
活動レポート　：

私は保育士になることを目標とし、大学で保育を学んでいる。保育士の仕事は幅広く多岐にわたり、障害児についても学ぶ。私は大学で障害児保育について学び、今まで遠い存在に感じていた障

害児に興味を持ち、関わりたいと感じた。そこで、龍ヶ崎市社会福祉協議会主催のイベントにボランティアとして参加し障害児と関わることを試みた。その結果、私は障害児との関わりだけでなく、たくさんのことを改めて学ぶことができた。また、「自分が理想とする保育士」を考えるという私の大学での目標達成にも影響を与える活動となった。

　このイベントは障害児や地域の交流の為に企画されたもので、「障がいのある人もない人も地域での交流の輪を広げる」ということを目的としている。昨年一年間で「ふれあいバーベキュー」や「事前交流会」、「ふれあいキャンプ」、「ふれあい広場」、「ふれあいクリスマス」などに参加し、私はイベント時の障害児の補助や会場の準備・片づけ、日程計画などに携わった。毎回イベントに参加している障害児も多く、何度も会うことで交流を深めることができたように感じる。昨年一年間の障害児との交流を体験して私は結果として、障害児は特別に特殊な子ではなく個性が強調された子として捉えられるのではないかと感じた。私は保育所で保育補助のアルバイトをしており、その保育所でも他の子と比べると落ち着きがないように感じたり気になる存在である子がいる。その気になる子に対し、どう接したら良いか悩むことが度々あった。今回のボランティアで障害児と関わる経験は、保育所での気になる子との関わりに対しても手掛かりとなる経験になった。今まで障害児や気になる子は特別な存在であり、特別な関わりをしなければならないと考えてしまっていた私にとって、障害児も気になる子も個性が際立っているだけで周りの子と違うわけではないと考えると、私は関わりがとてもしやすくなった。人と接する際に、最初の印象や周りの情報でその人を判断し、接し方を変えてしまうとその人を正しく理解することはできないと感じた。実際にイベント時にそのことに気付き、障害を持っているということをあまり考えないようにして障害児に接すると私が考えていた以上に様々なことができたり、自主的に挑戦する姿が見られるようになった。

　私は以上のような経験や発見から、「人の良いところをたくさん発見し、すべての人にきちんとした態度で接する保育士」を目指したいと考える



活動テーマ　：　福祉施設にてボランティア活動を行い現場の実態を探る。

活動分野　：　社会福祉

実践者名　：　立島　拓人（社会学部　社会学科　2 年）

活　動　先　：　小金わかば苑　（知的障害者の生活介護施設）

日程・場所　：

活動場所は全て小金わかば苑

2 月 12 日（木）　9:00～16:00

2 月 13 日（水）　9:00～16:00

2 月 14 日（火）　9:00～16:00

2 月 18 日（水）　9:00～16:00

2 月 24 日（火）　9:00～16:00

2 月 25 日（水）　9:00～16:00

概　　要　：

まず、利用者の方々は大体午前九時頃から来苑され、ジャージ等の作業着に着替えをするため、これをお迎えし、必要な方には職員が補助を行う。

小金わかば苑では利用者の状態・状況に合わせて、利用者をＡからＥまでにグループ分けしており、私はおもにＤグループの利用者の方々と共に作業活動を行った。作業は午前と午後に分割される。作業内容は受注、陶芸、縫製、農園芸などであり、この他にもウォーキングやフィットネスといった運動を行うこともある。

受注作業では業者から依頼を受け、その内容に応じた作業を行っていくが、私が体験した活動はウォーターサーバーの外部パーツの洗浄、胡椒蓋の検品である。どちらも利用者の方々が行った作業の最後の仕上げであった。

陶芸、縫製、農園芸では、定期的に小金わかば苑が開くバザーに出す品物を作る。どの品も市販のものにも劣らない、素晴らしいものであった。

昼食は給食のような形をとる。この際、利用者によっては上手く食べることが出来ない場合があるため、職員も同じ席につき、食事の補助を行う。

活動レポート　：

今回、松戸市社会福祉協議会より紹介を受け、知的障害者通所施設「小金わかば苑」にてボランティア活動を行い、これを自主活動とした。以下にその詳細を記載する。

- 活動目的

福祉施設にてボランティア活動を行い、現地でどのような生活が営まれているのかを把握すること。さらに、そこに勤務する職員がどのような考えで利用者に接しているのかについて知り、人との接し方について考えを深めることを目的とした。

- 活動内容

１日の活動は利用者を迎えることから始まる。利用者は来苑後、ジャージなどの作業着に着替えるため、更衣室に誘導し、必要な方に対しては最小限の補助を行う。

小金わかば苑では、利用者の状態や状況に応じてＡからＥまでのグループ分けを行っている。

着替えが終わると、各グループにて作業が開始される。作業には受注、縫製、陶芸、農園芸がある。

受注では、業者から依頼を受けた内容に沿って作業を行う。例えば、市販される胡椒の蓋の作成と検品、ウォーターサーバーの部品の洗浄などである。

縫製、陶芸、農園芸では、小金わかば苑が定期的に開催しているバザーに出品する品物を作成する。縫製では、無地の生地に裁縫やステンシルなどで絵柄をつけてハンカチなどを作り、陶芸ではお皿を作り、農園芸では野菜や花を育てる。また、こうした作業活動の他にもウォーキングやフィットネスなどで体を動かすことも積極的に行われている。これらの活動は午前と午後に分割され、利用者の希望や状況の必要性に応じて一人ひとりに分担される。

昼食は給食のような形をとる。利用者によっては上手く食べることができないこともあるため、そういった人のもとには職員も同じ席に着き、食べやすいように食事の補助を行う。

● 活動の成果

今回のボランティア活動では、利用者の方々との触れ合いや職員の方々と共に行動することで、目標としていた人との接し方について考えを深めることができた。利用者の福利の追求のためには何をするべきなのか、その人のニーズに合った行動とは何なのかなど、考えさせられるような事柄が多くあった。活動中最も印象に残ったことは職員の方から聞いた、「信念」の話である。人の福利を追求するならば、あらゆる状況下において、「自分はこう行動する」という信念がなければならないという内容の話は今も耳から離れない。私はこの話を聞き、この「信念」は人間の福利追求のみならず、様々な状況、例えば就職活動などにも活かすことができるだろうと考える。今後は自分の信念をより強固に持って様々なことに向き合いたい。

今回の経験によって、自分の考え方の幅が広がったように思う。小金わかば苑で得られた様々な考え方などを活かし、今後の生活に役立てていきたい。

アドバイザーコメント：

知的障害者の施設でのはじめてのボランティア活動から、たくさんの新鮮な感覚が得られたものと思われる。本人の中では、その感覚はまだ十分に整理されない部分もあるだろうが、関連する学問的な知識を摂取するプロセスにおいてその経験を統合し、より深い社会現象の理解につなげていくための基盤ができたのだろうと考えている。

今後は、その基盤の上に社会学、社会福祉学などの理論的知識・方法論的知識を積み重ね、自分自身の視点から社会現象に潜む問題を剔出して考察を加え、2 年後の卒業論文作成につなげていく努力が求められる。

（社会学部　都築 一治）

活動テーマ ： 図書館利用支援

活動分野 ： 学生生活支援

実践者名 ： 前田 望（社会学部 社会学科 2 年）

活 動 先 ： 流通経済大学図書館

日程・場所 ：

7 月～10 月　累計 6 時間以上　自宅・電車内・学校・外出先
11 月 20 日　10：30～11：30　教員研究室・図書館
12 月 10 日　19：00～21：00　自宅
12 月 16 日　15：00～18：00　自宅
12 月 19 日　14：30～15：30　図書館
12 月 29 日　14：00～18：00　自宅
1 月 2 日　14：00～17：30　自宅
1 月 8 日　21：00～23：00　自宅
1 月 9 日　14：30～16：00　CPU 室・図書館

概　　要 ：

どのような活動を行うか等の会議及び今後も活動を続けられるようにするための会談。

必要な物資の買い出し。具体的には、意見箱として使用するボックスや印刷のための資材、図書館ボランティアとして館内を歩くためのネームプレート。

ポスターや用紙のフォーマット作成。その他記録等の雑事。

活動レポート ：

今回の自主活動で、私は「図書館の利用支援」をテーマに選択した。

理由としては、第一に"自身がよく利用している空間を、より快適なものにしたかった"というものが挙げられる。第二には"図書館の情報等が載った WebOPAC のスマートフォン向けページがあまりにも使い物にならず、それを利用可能な状態までもっていきたかった"というものが来る。

第一の理由に関する具体的な案を述べると、①本の配置や分類の改善、②新刊または指定書籍入荷時の通知、③PC 利用区域のルール徹底、④意見箱の設置が挙げられる。しかし、この中で実現できたものは一つ、意見箱の設置だけだ。本の配置や分類については、書籍が多すぎるという点と、龍ケ崎の図書館との連携が難しいという点、更には手間がかかるという人材的な点から不可能とされた。新刊または指定書籍入荷時の通知については、プログラム的なものについては何も出来ないと言われてしまい、不可能とされた。PC 利用区域のルール徹底については、話が上がった段階では手が打てるかもしれないという反応をもらったが、以後何の反応も見られなくなった。

第二の理由に関しては、WebOPAC の改善だ。その他関連して PC 版の方にも手が入れられたらと思っていたが、まずはスマートフォン版の WebOPAC の利用価値を作るという点で切り込んだ。しかし、前述にもある通り、プログラム関連は一切として手が入れられず、こちらも実現は不可能となった。

では、挙げた案のうち意見箱以外は何も出来ないとわかった以後、何をしたかだが、主にはポスター等の制作だ。この件について触れる前に、こうなった経緯を以下にまとめておく。

待つしか出来ない意見箱の設置以外の一切の案が不可能とされたが、そこで図書館側から「この

程度ならしてもいい」と許可をいただいたものがある。それは、″図書館内で困っている人を助ける″という、図書館ボランティアというものだった。これは、図書館内で本を探している人がいれば手伝い、WebOPAC の使い方がわからない人には教える、といったサポーターのようなものだ。迷惑行為等を止めることは禁止され、そういった場合には図書館司書の方を呼ぶのが仕事であった。しかし、開始時期がちょうど試験前に重なり、時間の都合が取れず図書館ボランティアとしての仕事は実行できなかった。また、一人では出来ないことも複数人いれば出来るのではないか、という予想と、今後も学生主体の図書館支援団体があってほしい、という図書館側からの要望が組み合わさり、図書館内でボランティアを募集することとなった。前述したポスターは、この図書館ボランティアの募集をかけるためのものである。しかし、依然として結果は出ていない。

図書館の利用支援というテーマで始めた今回の自主活動であるが、結果から言って失敗だったように思う。では、何がいけなかったのか。まずなにより、″始まりが遅かった″というものがあると思われる。もし、などという言葉で愚考するならば、もし秋学期が始まってすぐに活動を開始できていたならば、図書館ボランティアとしての活動も行えたであろう。次いで、″出来ないことをやろうとしていた″という点がある。はじめの内から出来ないとわかっていれば、また別の案が出せた可能性もある。故に、この件から行動を起こすなら早くから、出来ることと出来ないことの境界を知った状態で行うべき、という 2 点を今回の自主活動で学んだこととしてここにまとめる。

追記として、今後同様の案件に関わることがあった場合、今回のような事態を招かないために必要なことをまとめておく。何より、事前準備をより深く行い、計画段階から成功可能性を概算するようにするとよいのではないかと思う。時間的制約、技術的制約、資源的制約を考慮の上、どの程度の時間でどこまで出来るのか、また、自身の力で行うことが出来るのかを考えた上で案件を進めていきたい。

アドバイザーコメント：

「図書館利用支援」というテーマで、利用者視点からの図書館利用環境の改善に取り組まれました。図書館の利用しやすさの向上とホームページの改善という問題意識も明確で、具体的な改善策までご自身でいくつも考え出されていた点は、主体的かつとても意欲的であったと評価できます。「未来力チャレンジ」の目的とも合致するものと思われます。

残念ながら、実現・実行できたアイディアは一部であったようです。しかし、意見箱の設置と図書館ボランティアの募集という、図書館としては新たな取り組みを学生の力で実行したことは、結果如何にかかわらず、大きな成果であったと考えます。今後、学生・教員・職員３者一体となった流通経済大学付属図書館の改善を目指すにあたり、最初の一手を投じられたと思います。

今回の活動を通して、図書館がさまざまなシステムの上に成り立っていることを知っただけでなく、自身に可能性と限界があること、そして実施前計画を緻密に立てることの重要性について気づけたことは大学、そして社会で生活していく上でとても意義のあることであったと思います。

（社会学部　下司 優里）

活動テーマ　：　海外旅行の魅力を学生に伝える

活動分野　：　学生生活支援

実践者名　：　片倉 美穂　（社会学部 国際観光学科 2 年）

活　動　先　：　第 39 回ヨーロッパツアー説明会、国際観光学科 1 年藤野ゼミ・秋山ゼミ（大学内）

日程・場所　：

＜第 39 回ヨーロッパツアー説明会＞

第 1 回：2014 年 11 月 10 日（月）16 時 20 分～18 時　学務課前

第 2 回：2014 年 11 月 21 日（金）16 時 20 分～18 時　学務課前

＜観光学科 1 年ゼミ訪問＞

藤野ゼミ：2015 年 1 月 14 日（水）1 限目　ゼミ室

秋山ゼミ：2015 年 1 月 15 日（木）4 限目　ゼミ室

概　　要　：

第 39 回ヨーロッパツアー説明会では、同じ特別奨学生の山内菜摘さんと共同で活動を行った。昨年度の第 28 回ヨーロッパツアー参加者として、経験談を踏まえたおすすめの観光スポットや、多くの参加者が抱えていると思われる疑問など、パワーポイントを用いてプレゼンテーションを行った。

私は主にパワーポイントの作成を担当した。自分たちが現地で撮影した写真をふんだんに使い、多くの説明会参加者が興味を持てるようなスライド作成を心がけた。また、説明時も声に抑揚をつけ、参加者が聞く耳を持てるような表現方法を心がけた。

国際観光学科 1 年ゼミの藤野ゼミと秋山ゼミに訪問し、学生のうちに海外旅行を経験する重要さを伝えるプレゼンテーションを行った。この活動は自分一人で行った。第 39 回ヨーロッパツアー説明会とは違うパワーポイントを新たに作り、写真やイラスト、アニメーションをふんだんに用いたスライドを作成した。自分が一方的に話すだけでなく、ゼミ生への質問や、ゼミの先生の体験談を取り入れ、参加型のプレゼンテーションを行った。自分が海外で体験した貴重な経験や、海外旅行が自分の学生生活に与えてくれた良い影響などを発表した。

活動レポート　：

未来力チャレンジとして、私は二つの活動に取り組んだ。

一つ目は第 39 回ヨーロッパツアー説明会である。この説明会は、第 1 回が 2014 年 11 月 10 日（月曜）16 時 20 分から 18 時、第 2 回は 2014 年 11 月 21 日（金曜）16 時 20 分から 18 時に学務課前で行われた。この企画には、同じく特別奨学生の山内菜摘さんと参加した。過去の参加者としての体験談やアドバイスなど、パワーポイントを用いてプレゼンテーションを行った。私はスライド作成を担当し、山内さんは原稿作成を担当した。聞き手が飽きないようなスライド作成を心がけた。実際に現地で撮影した写真を背景に用い、アニメーションをつけ、簡略化した文章でスライドを作ることによって、華やか且つ見やすいものを作ることが出来た。スライドの内容は、パリのオススメスポットやおすすめのお店、ツアー参加にあたって気をつけるべき点や持ち物についてである。私はメモ程度の原稿のみ持参し、紹介中は参加者を見渡しながら話すよう気をつけた。また、声に抑揚をつけ、聞き手が耳を自然に傾けてくれるようなトーンを心がけた。説明会終了後も会場に残り、

説明会参加者の質問を受けたりした。お土産や現地のパンフレットなども持参したが、まだツアー参加に悩んでいる人が多く、あまり活用は出来なかった。私たちのプレゼンテーションが、ツアー参加を決めるきっかけになれていることを望む。

二つ目は、国際観光学部の１年生に海外旅行の魅力を伝える活動である。この活動では秋山先生と藤野先生の二つのゼミを訪問した。パワーポイント、原稿ともにヨーロッパツアー説明会のスライドとはまた違う内容のものを作り直し、学生のうちに海外旅行に行くことを勧めた。具体的には、海外で学べることや気づけることを、実際に私が経験したことを踏まえて発表した。まとめとして、海外で五感を使って学び楽しむということをあげた。この活動のスライドもまた、自分が撮影した写真を背景に使うとともに、アニメーションを使って興味を持ってもらえるものに仕上げた。さらに今回はフリーイラストも効果的に使うことができ、多くのゼミ生の興味を引くことが出来た。プレゼンテーションに飽きを感じていそうなゼミ生には質問を投げかけるなど、こちら側に意識を取り戻すような工夫も出来た。このプレゼンテーションを聞いて、海外旅行に興味を持ってくれた人がいると嬉しい。

今回の二つの活動を経て、様々なことを学んだ。多くの聴衆を目の前にして、いかに自分のプレゼンテーションに興味を持ってもらえるか、いかに自分のプレゼンテーションをきっかけに心が動かされるか、様々な工夫をしなくてはいけないと改めて知った。今後も人前でプレゼンテーションを行う機会が多くあるだろう。就職してからもプレゼンテーションは避けて通れないものだと考える。今回の活動を通して学んだことを、今後のプレゼンテーションにも生かしていきたい。

活動テーマ ： 流通経済大学に在学し、海外に興味がある方へ、“積極性の大切さ”を伝える。そのためにアメリカ短期留学の実体験を参考にプレゼンをする。

活動分野 ： 学生生活支援

実践者名 ： 関矢 充甫（社会学部 国際観光学科 2 年）

活 動 先 ： 流通経済大学内

日程・場所 ：

11 月 14 日（金） 2Ｆ 共同研究室 アドバイザー教員との打ち合わせ

11 月 21 日（金） 2Ｆ 共同研究室 アドバイザー教員との打ち合わせ

11 月 23 日（土）～25 日（月）自宅 発表資料づくり（アンケートも含む）と Power Point づくり

11 月 26 日（火） 6Ｆ 教職支援センター 発表（イギリス、カナダ短期留学ガイダンス）
自宅 アンケート結果から発表資料修正

11 月 27 日（水） 6Ｆ 教職支援センター 発表（イギリス、カナダ短期留学ガイダンス）
自宅 アンケート結果から発表資料修正

11 月 28 日（木） 1004 教室 発表 （Adam 先生ゼミ）

概 要 ：

“留学して私は変わりました”という題材で、短期留学（8 月 23 日～9 月 15 日）の経験を基に私がこの留学でどう変わったのか、行ってよかったと考える理由、次世代の学生に留学を薦める理由をこれから留学してみたい人、外国語に興味のある人たちなどを対象としプレゼンする。

＊担った役割

・資料づくり Power Point、発表原稿、アンケート

・発表準備 アポ取り、ＰＣ、スクリーン

・人集め ＰＣや LINE、Face book で日時場所を載せ、プレゼンへ参加してくれる人を集めた

＊プレゼン役割

・Power Point 始動

・発表資料と共に Power Point コントロール

・スピーク

・片付け

活動レポート ：

私はこの自主活動を通し社会性を学んだ。特にこの活動では、コミュニケーション能力をよりつけられたと感じた。将来社会へ出て行く自分自身にも大きなプラスになり得たものは多かったと感じる。自分が選んだ自主活動を一人でプラン立て、行うことが自分自身を成長させてくれたのだと思う。その中でも、以下の２つのことが自分を成長させてくれたと考える。

１つ目は、活動の計画を立てつつアドバイザー教員の方と連絡を図り、活動内容を深めていったことである。初めて自分のプレゼン資料と向き合った時、最後まで終わらせられることができるかどうか不安だったし、資料作成をも終わっていない私にとって、作成途中でアドバイザー教員と連絡を取ることは凄く大変であった。しかし、資料作成段階で山岸先生（アドバイザー教員）と直接

お話しできたことは自分のプレゼンにものすごく大きな影響を与えた。自分のプレゼンに足りないところを指摘してもらったことだ。一対一で自分自身のプレゼンと一緒に向き合っていただき、その話し合いから学ぶことはたくさんあった。プレゼンにアドバイザーを付けたことが今までなかったためとても緊張したが、その緊張がなおさら話す言葉や態度、話す内容に気を付けなくてはと考えるきかっけとなった。何より社会へ出ていくとこのような場面はたくさんあると思う、その第一段階として、目上の人とのコンタクト作りをより実践的に学ぶことが出来たと考える。その上で、アドバイザー教員との話し合いは私にとってとても貴重な経験となった。

その話し合いの内容もこれから私の将来に活かせるものばかりだと思う。主に、プレゼンの組み立て方や話し方、改善していくために何が必要かを話し合った。自分が比較的得意としていた Power Point 作りでは、最初と最後のページを逆転した方がいいとアドバイスを頂き私はハッとした。同時に、プレゼンを聴く人の理解を深めるためのコツを教わった。結論を先にまとめて言ってしまうことであった。そのコツを聞いてからは今まで以上に、聴いている人の理解度を一番に考えて資料を作成できた。本番では、聴いている人の頷きや真剣な表情がうかがえたため、資料作成に多くの時間を掛けた甲斐があったと感じた。

２つ目は、プレゼン終わりに書いてもらったアンケートから、修正点を探り出し、改善することであった。繰り返し行ううちに良いプレゼンが出来上がっていくことがとても嬉しく感じた。社会に出たら、同じ仕事であっても進歩が求められるであろう。その中でも機会がある毎に修正、整理、追加などをすることで少しでも進歩できることを、身をもって感じられた。

以上の２点が、特に自分を社会人に近づけさせてくれたと考える。私のプレゼンに関わって下さった教員の方々や生徒の皆さんに感謝したい。これからもこの活動で培ったコミュニケーション力を発揮して人とのつながりを増やし、その関わりを通してより成長出来たらと思う。

アドバイザーコメント：

関矢さんは、自主活動として、海外短期留学のガイダンスで留学希望の学生に自分の経験を語り、留学の魅力を説明することを選びました。私は、彼女と直接の打ち合わせ２回（１回１時間程度）、その間にパワーポイントのチェックをメールで行いました。

彼女の「言いたいこと」は、始めから明確だったので、それをうまく伝えるためのちょっとしたアドバイスをするだけで、格段に良いプレゼンになりました。また、聞き手が必要としている情報と自分が伝えたいことが必ずしも一致していない可能性を指摘したところ、アンケートをうまく使って、自分のプレゼンの微調整を行うことができました。このように、何かを企画し、その後に、実際にやってみて、その結果を次に活かすことができ、とても良い活動になったようです。

（社会学部　山岸 直基）

活動テーマ ： 浅草調査とレポート冊子の作成

活動分野 ： フィールドワーク

実践者名 ： 三橋 俊矢（社会学部 国際観光学科 2 年）

活 動 先 ： 台東区浅草、流通経済大学内

日程・場所 ：

11 月 20 日～25 日　文献・資料、インターネットで情報収集

11 月 28 日　フィールドワーク活動計画作成

12 月 5 日　浅草にて現地調査

1 月 9 日～16 日　現地調査、資料や文献調査の結果を踏まえたレポートの作成

1 月 20 日～24 日　冊子を作るための編集作業

2 月 9 日　冊子の印刷、完成

概　　要 ：

今回は国際観光学科２年東ゼミの「浅草調査」を拡張するといった形で自主活動とさせていただいた。 実際に行った活動の内容は、まず浅草についてテーマを決めてから資料・文献、インターネットなどを活用して下調べをして報告書を作成した後、フィールドワークとして浅草に出向いてテーマに沿った場所を訪れ、写真を撮るなどして資料やデータを集めた。それから、テーマに沿ったレポートを作成して調査の成果とした。私は、ゼミ生各々が作成したレポートを集めパソコンに取り込み、冊子を作るための編集作業をした。また、新松戸キャンパスの教員控室をお借りして印刷などの作業を経て冊子した。

活動レポート ：

今回の自主活動では、２年ゼミ秋学期の課題である「浅草」についての学習を拡張して、最終的にはゼミ生それぞれのレポートをまとめて１冊の冊子を作ることを目標として取り組みました。これらの活動についてアドバイザーの東先生には数多くのアドバイスを頂戴したことを感謝しています。まず、各々が浅草について自分なりのテーマを決めてから資料、文献、インターネットを用いて調べました。また、今回は観光学の基礎的な調査、研究方法を身に着けるために、地方自治体が発行する地誌（私の場合は台東区が発行している『ビジュアル台東区史』）を使用しました。これでまずは第１段階として簡易的な発表資料としてレジュメを作成してプレゼンテーションを行いました。

次に、実際にフィールドワークとして資料・文献で調べたことを確かめるために浅草に行きます。まずは、フィールドワークの行動計画としてどのように浅草を行動するのかを決めました。そして、12 月 5 日に浅草で現地調査をしました。私は、「浅草の歴史と現代」というテーマで調査していたので、浅草寺や東京スカイツリーやアサヒビールタワーなどの浅草でもノスタルジーさとモダンの強弱がつく場所を巡りました。やはり、なんとなく行く浅草と下調べをして課題をもってめぐる浅草は違います。観光学の基礎的な研究方法として資料・文献を活用した調査と、フィールドワークを通した調査を行えたことはこれから３年４年次で観光学を学んでいく過程において良い経験となりました。

フィールドワーク終了後は、資料・文献を用いた調査結果と実際に浅草の街を見て分かった事をレポートにまとめていきました。ここでは、論理的な文章を書くことを意識して取り組みました。上手い文章が書けているとは決して思いませんが、自分なりに努力して作成しました。それと同時に Word などの文章作成ソフトの使いこなしも意識しました。具体的には、文章の章や節の区切りを明確にするためにスタイルを適用したり、見出しレベルを設定しながら、全体の構成を組み立てることが出来る表示形態であるアウトラインを適用したりしました。これは、これからレポートや卒論を書くときや、社会人になってから原稿を書くときに必須のスキルなので、この機会に習得する事を目指しました。レポートが書き終わったら、ゼミ生のレポートを回収して、冊子を作るためにページの編集作業をしてから印刷をしました。印刷は、新松戸キャンパスの教員控室の製本機を使って作成しました。

活動テーマ　：　特別奨学生制度向上に向けてのアンケート

活動分野　：　キャリア支援

実践者名　：　岩井　良平（社会学部　国際観光学科 2 年）

活　動　先　：　流通経済大学新松戸キャンパス

日程・場所　：

流通経済大学新松戸キャンパス

11 月　企画し書く内容を決め、配布人数を把握

12 月　アンケートを word で作成

1 月　アンケートを配布、回収

2 月　アンケート統計まとめ

3 月　活動報告発表会

概　　要　：

・企画内容の具体化

　アンケートをするにあたって活動してきたもの、書く内容をピックアップして決定

・アンケート作成

　学年ごとに word で作成

・アンケート配布・回収

　特別奨学生が参加する授業前もしくは授業後にて配布し、教育学習支援センターに協力していただき、アンケートを回収する

・アンケート最終回収

・パワーポイント作成

・報告会発表

活動レポート　：

今回の未来力チャレンジで実施した活動は「特別奨学生制度向上に向けてのアンケート」。その動機は特別奨学生制度 1 期生目の私たちは制度自体が探り探りの中行われているのを感じていた。そこで学生たちの目線から見て、各活動はどのように考えているのか、どのように考えていたのかということを知り、まとめ、報告することにより、自分たちの今後の活動や私たちの後輩のこれからの活動に少しでも変化が出てくれることを期待したからである。

活動内容は活動計画、アンケート作り、配布、回収、統計、まとめである。作業は経済学部で特別奨学生である、佐高友滉君と共に行った。まず活動計画は図書室で行い、今まで自分たちが行ってきた活動を振り返り、どのようなことを聞くか、どのような聞き方をするか、配布する人数は何人なのか、いつ頃配布するかなど今後のさまざまな活動内容を決定した。アンケート作りでは word を使用し、活動計画で決定した内容を見やすいように、かつシンプルにということを心がけて作成した。配布時期は当初予定していた時期よりも遅くなってしまったが、特別奨学生の集まる授業（1 年生はキャリア特講、2 年生はグローバルコミュニケーション）でいっぺんに配布することができた。回収では教育学習支援センターの先生方にご協力いただき、封筒を配置して回収した。これは自分たちに直接渡す方法をとると時間の都合が合わない、匿名にした意味をなさなくなってしまう

といった面を考えた上での方法である。統計では各活動ごとに数を数えて、それらの意見や感想の中で 2 人が目にとまったもの、感心させられたものを抽出した。同じ活動を行っているにもかかわらず人によって考え方や臨む姿勢が違って面白いと思った一方で、あまり意味のないと感じられている授業・取り組みもあることも分かったことである。まとめはパワーポイントを使用して、3 月に行われる活動報告発表会に向けて作成している。まずは伝わらないことには始まらないので、シンプルにしている。内容は話してプラスすることもできるので、そこで補うことにする。

活動していく中でまず、キャンパスを超えた大所帯にすることの大変さと、何事も初動が大切であることを改めて実感するとともに学ぶことができた。また多くの人の協力なしで活動することも難しかった。アンケートでは普段聞けない特別奨学生の意見を見ることができて非常に面白いと感じた。同じ活動をしているにもかかわらず満足・不満足があり、考え方や取り組む姿勢もそれぞれが違っていたこともまた興味深いことである。中にはあまり意味のないと感じられている授業や取り組みがあり、そういった意見を聞くことができたということは学生たちの真意を聞けたとも言えると考えている。

これらの活動を通して、このようにさまざまな面から意見の言える特別奨学生で、全体がチームのようにまとまった活動・プロジェクトのようなものもあってもいいのではと考えた。それは自分が全体に貢献している、1 つのことを作り上げている、後に社会人になった時に非常に重要といわれているリーダーシップ力・コミュニケーション力の向上にもつながってくるのではと感じたからである。せっかくの大学生生活がよりよいものになるためにも意味のあることをしなくてはならないと考えさせられる活動であった。

活動テーマ　：　社会福祉のボランティアを行い社会貢献を目指す

活動分野　：　社会福祉

実践者名　：　阿部 まや　（社会学部 社会学科 2年）

活 動 先　：　ＮＰＯ法人 さわやか福祉の会

日程・場所　：

2月5日　さわやか福祉の会　書道のお手伝い

2月9日　さわやか福祉の会　ガレッジセールの手伝い

2月16日　さわやか福祉の会　くらしの助人、ガレッジセールのお手伝い

2月23日　さわやか福祉の会　ガレッジセールの手伝い

概　　要　：

新松戸にある NPO 法人さわやか福祉の会というボランティア団体の方々と一緒にお手伝いをさせて頂いた。この団体は生活やお金に困っている人の為に活動している団体です。例えば足の不自由で買い物が難しい人の代わりに買い物のお手伝いをするなど主にガレッジセールのお手伝いをさせて頂いた。第二と第三月曜日の朝の９時３０分から昼の２時や３時頃までお皿や洋服などをバザーのような形で、第三月曜日には福島から届けられたお野菜、手作りのケーキなどを加え販売した。自分の役割は商品を並べ、商品の値段を決める事であった。

その他には書道の手伝いや生活が不自由な方のお手伝いをさせて頂いた。

書道は第一木曜日に行われる。書道の先生が実際に教室を開き生徒を教える。今回私は先生のお手伝いということで参加させて頂いたが、折角ということで書の方にも参加した。最初だった為に書の基本である全てが詰まっていると言われる永遠の永という字の練習をした。また、お手伝いは買い物や掃除を行った。買い物は普段重くて持てないものなどを任され、掃除では利用者さんが普段出来ない家具の下などを任された

活動レポート　：

今回、私は新松戸にあるNPO法人さわやか福祉の会というボランティア団体の方々と一緒にお手伝いをさせて頂いた。この団体はおしきせでない、お金もうけでない、お互い様の気持ちでをモットーに互いが相互扶助の理念で高齢化社会を助け合って生きていくという地域社会を目指している、在宅生活支援ボランティア団体です。

介護保険や障害者支援制度では、賄いきれない部分や対象にならない方に対してボランティアとしてサービスを提供している。例えば足の不自由で買い物が難しい人の代わりに買い物のお手伝いをするなどです。また、地域の方々の交流の為に様々な教室を開いているそうです。「松戸くらしの助人」の意義である「お互い様の活動」、「人の輪づくりと若い人達に松戸は住みやすい良い街として引き継いでいきたい」という熱い思いから、介護保険の枠外での制約のない助け合い活動を続けている。

他にも様々なボランティアを行っており、私が主に参加させて頂いたのはガレッジセールです。ガレッジセールではボランティアの人達が品物を集め運営資金を集めるバザーの様なもので販売を行います。初日は風が強く寒かった為に人は少なかったもののなんとか利益を出すことができました。バザーなので値下げの交渉などが当たり前のようにあり、楽しかった点でもあったが、難し

かった点でもあった。ボランティアに参加している人のほとんどがパートや仕事などをしている方で、時間が空いている時間に来ているということであった。その人たちは「少しでも手伝いになればいいの。」と無償で手伝いをしている姿には感動しました。

次に私がお手伝いをさせて頂いたのは書道と暮らしの助っ人だ。書道は第一木曜日に行われる。書道の先生が実際に教室を開き生徒を教える。今回私は先生のお手伝いということで参加させて頂いたが、折角ということで書の方にも参加した。最初だった為に書の基本である全てが詰まっていると言われる永遠の永という字の練習をした。予想外に難しく１時間ほど集中してしまった。最後に後片付けをし、皆さんにお茶を用意した。共通の趣味を通じて仲間が出来ることは素晴らしいと思った。また、こういった同じ趣味を持った人と出会える場所がある事にも感心した。

暮らしの助人では買い物の手伝いを行った。足が弱く重いものを持つのが不自由という方で、道路を歩く事も大変ということだ。今回は米などの重いものなどを運ぶのを手伝った。その他にも部屋の細かい所の掃除などを行った。最後に人生についてお話して頂いた。私は普段年上の人との交流がないためこういった機会は新鮮だった。おそらく自分達の世代ではあまりお年寄りとの交流が多くないと思う。そのため、自分が知らなかった礼儀作法などを新たに学ぶ事が出来た。また、今まで自分が当たり前にやってきた事が出来ない人がいるという事が痛感したとともに実感した。

人との関わりの中で人は生きている。関わりがなければ人は生きていけない。そういった事を実感させられた活動だった。世界では関わりたくても関われない人が沢山いる。そういった人達の為にも何でも出来る自分達から手を差し伸べて関われるような場所を作っていくことがこれから先求められるのではないかと思った。将来こういったボランティアに積極的に参加し、色々な人と関わる事が出来るようにしたい。

アドバイザーコメント：

阿部さんは当初、「児童養護施設等で暮らす子ども達に、自分達で作って絵本や紙芝居の読み聞かせをしたい」ということで、私の所に相談にやって来た。しかし児童養護施設は長期ボランティアしか受け入れていないところが多いので実際には難しいという話をした。そして松戸市の地域活動に詳しい佐藤先生にお願いして、今回の「NPO 法人　さわやか福祉の会　松戸くらしの助っ人」を紹介していただいた。

阿部さんは今回の活動を通して、人と関わりことの大切さ、自分では当たり前のようにやっていることを出来ない人がいること、パートやアルバイトをしながらボランティア活動に参加し、「少しでも手伝いになればいいの」と言って無償で頑張っている人の姿を見られたこと等、初めての経

験がたくさんできたという。

　これらの経験は今後の阿部さんの人生に大きな影響を与える貴重な学びとなっていることはもちろん、この経験を今後も継続させ、さらに新たな課題を見つけてそれに向かって積極的にチャレンジして行く姿勢を持ち続けてほしいと思っている。

（社会学部　村田 典子）

活動テーマ　:　社会福祉に関するボランティア

活動分野　:　社会福祉

実践者名　:　福田　胡桃（社会学部　社会学科　2 年）

活　動　先　:　ＮＰＯ法人　さわやか福祉の会　松戸くらしの助っ人

日程・場所　:

2 月 9 日、16 日は、さわやか福祉の会の事務所前の敷地で、毎月第 2、第 3、第 4 月曜日に行われているガレージセールの売り場の手伝いを行った。

2 月 5 日には、さわやか福祉の会の事務所内の一室で「楽しい書」という書道教室の補助を行った。

2 月 18 日、23 日には、住所は個人情報のため記載することができないが、家事や介助移動を希望する方のご自宅に、サービスを提供するさわやか福祉の会員である方の補助役として同行し、助っ人活動を行った。

また 23 日は、午前中の助っ人活動が終わった後、そのままさわやか福祉の事務所まで向かい、ガレージセールの手伝いを行った。

概　　要　:

まずガレージセールでの活動について述べていく。まずガレージセールというのは、さわやか福祉の会の事務所の前の敷地で、毎月第 1 月曜日を除く月に 3 回ある月曜日に行われている活動のことだ。いわばフリーマーケットと同じもので、市民の方々から寄せられた使わなくなったお皿や洋服等を、その日に販売する活動である。そこでの売り上げは、事務所の活動資金となる。私の役割は、主に設営と販売であった。10 時からの販売のため 9 時半に事務所へ行き、事務所前にブルーシートを広げ、そこへ品物を並べていく作業を毎回行った。そして 10 時～14 時まで販売を続け、片付けという流れであった。次に、2 月 5 日に行われた書道教室の補助では、訪れる方からの参加費の回収、場所の設営やお茶を入れるという作業であった。途中、事務所代表の松下明子さんのご厚意により、書道教室に参加することができた。

また 18 日の依頼者の方のご自宅でのサービス希望は、今まで使っていた本棚を新しいものと交換したいということであった。そのため、古い本棚に電気ドリルを駆使してネジを外し解体し、ある程度軽くしたところで室内から外へ出した。次に新しい本棚を組立て、中身を移動させるという活動を行った。最後に 23 日での依頼者の方のサービス希望は、買い物の補助であった。そのため、ご自宅から一番近い新松戸にあるダイエーというスーパーまで向かい、お会計の後に品物を袋に詰めていき、ご自宅まで運ぶという活動を行った。その後、30 分ほどご自宅の掃除を行った。その日の午後は、ガレージセールの手伝いへ向かった。

活動レポート　:

今回の活動を行ってみようと考えた理由は、自らの将来について向き合ってみて、私が本当にしていきたいことは、何だろうかと考え始めたのがきっかけである。入学してから約 2 年間社会福祉の勉強をしてきて、そろそろ将来の進路を本気で考えなければならない時期が近付いてきた。そこではじめて、私はこのまま社会福祉士を目指して、国家試験を受けて社会福祉士として働いていくのだろうかと疑問を持ち始めた。さらに、なぜそういった疑問が湧いてきたかを考えてみたところ、座学として社会福祉の知識は学んできたが、実際の社会福祉の現場を体験したことがないため、迷

いがあるのだろうという結論に至った。そこでこの RKU 未来力チャレンジという場を借りて、社会福祉に関するボランティアを実践してみようという意欲が湧いた。

そして実際に約 1 か月の間、さわやか福祉の会でボランティアのお手伝いをしていくなかで、身に痛感した一番のことは、若者がいないということだ。それはボランティアをしていく中で、事務所の方々から幾度となく、「若い人がいてくれると助かる」という言葉を聞かされたからである。私もそう言われてみてはじめて、事務所で働く方々や訪れる方々の中で、同年代の方を見かけていないことに気付いた。また、事務所の方針は会員制で、サービス協力生会員と利用正会員が存在するが、利用側の方は高齢者の方が多くて当たり前なのだが、サービスを提供する側である協力正会員も、同じような年代の方ばかりなのだ。私がガレージセールの手伝いをした際も、品物は基本的に食器が中心となっており、それを何度も事務所の奥から外まで持ち運ぶのは、私でもとても苦労した。しかし、これまで高齢者の方だけで、ガレージセールを運営していたと考えると、苦労がうかがえた。さらに 2 月 18、23 日の利用者のご自宅での助っ人活動は、基本的には一人の協力正会員のみでサービスを行うのだが、18 日の本棚の解体はかなりの重労働であり、本来の形である正協力会員一人、ましてや高齢者の方では、かなりの時間を有するであろうという印象を受けた。

短い時間であったが、この 1 か月の間で多くのことを学べ、密度の濃い時間を過ごせた。ただ淡々と事務的にサービスの提供をしていくだけでなく、会話というコミュニケーションが必要となり、それによりサービス利用者の身体的不安だけでなく、精神的不安も軽減できるということが学べた。また実際に福祉の現場を体験したことによって、若者不足という問題を目の当たりにした。少子高齢化が著しく進む日本で、これからは若者が社会福祉に目を向けなければならないと考える。そこで 3 年生になってからは、この経験を活かして、流通経済大学の学生に向けて、社会福祉のことを深く知ってもらえるような活動を多くしていきたい。そのために、これからはより社会福祉の勉強に力を入れていこうと考える。

アドバイザーコメント：

福田さんは当初、「児童養護施設等で暮らす子ども達に、自分達で作って絵本や紙芝居の読み聞かせをしたい」ということで、私の所に相談にやって来た。しかし児童養護施設は長期ボランティアしか受け入れていないところが多くので、実際には難しいという話をした。そして松戸市の地域活動に詳しい佐藤先生にお願いして、今回の「NPO 法人　さわやか福祉の会　松戸くらしの助っ人」を紹介していただいた。

福田さんは今回の活動を通して、これまで座学を通して社会福祉の知識を学んできたが、実際の現場を体験したことがなかったため、将来福祉の現場で働くことに迷いがあることに気づいたという。そしてこの RKU 未来力チャレンジでの活動を通して、この迷いが払拭され、これまで苦手としていた初対面の人との会話や、一歩を踏み出すことの大事さを学ぶことができた。

この経験は、これから社会福祉の現場で実習を行い、将来福祉の現場で活躍したいと思っている福田さんにとって貴重な学びとなったことは間違いないし、今後この経験を後輩に伝え、自らもますます成長して行ってくれることを期待している。

（社会学部　村田 典子）

活動テーマ　：　グループ展の計画

活動分野　：　インターンシップ・実践

実践者名　： 相川 知未（社会学部 国際観光学科 2 年）

活 動 先　： バンタンデザイン研究所東京校（イラスト＆アートコース 10 月生）

日程・場所：

バンタンデザイン研究所東京校（恵比寿）

ギャラリー:

下北沢駅周辺の 3 店【café２店　アンソロップ、バロンデッセ/ギャラリー１店コンフォンツ】

11 月から 3 月までの授業日である毎週日曜日に、かかさず展示についての話し合いを進めた。この活動を進めた授業日は 2014 年 11/2,9,16,23,30,12/7,14,21,2015 年 1/11,18,25,2/8,15,22 の 14 日間である。

なお授業は一日 10 コマあるため､その時間内と授業後時間外の時間を使って話を進めていった。授業時間は朝 9 時半から夜の 8 時 20 分まであり、それでも時間が足りないときは前述の授業が終わった後 1－2 時間にわたり話し合った。1 月からは計画が詳細になってきたため、必ず授業時間後の時間も使って話し合いを進めた。

上記に加えて、1/29 と 1/30 の 2 日間にわたって、ギャラリーに足を運び、そこでオーナーの話を聞き、レイアウトプランを考えた。

概　　要：

自分が現在通っているデザイン学校の短期クラスである、同クラスのメンバー全員で参加するグループ展の計画をたてる。

➡グループ展で展示、発表する作品の制作過程ではなく、展示を行うまでの企画を活動とする。

グループ展の企画、運営について、一定範囲のことはクラス担当のスタッフが行うため、それ以外の自分らが決められる事項を決定、役割分担などを進めていった。

メンバーの役割分担は DM 作り、会計、当日のシフト係、キャプションという作品の題名などを記す紙を作る係であり、私は当日のシフト係を担当した。

ギャラリーにかかる費用の交渉などは、展示に関して未だ何の経験も積まぬ、またほかのクラス以上に時間が限られる我々には決定権はなかったため、手続きについては自分たちが触れられない部分もあったが、展示そのもののテーマ設定やギャラリーでのレイアウトである作品の配置について話し合った結果、「まち」というテーマとした。また開催場所については、決められる範囲内の場所である下北沢で行うことになった。それはこの学校の生徒なら費用も通常の半額くらいになることも考慮した。

実際に展示させてもらうギャラリーに足を運び、オーナーの方から話を聞いて、展示場所の詳細をよく観察してから、学校で全員で話し合った。

展示に対しての集客のために外部への発信作業については Twitter や Facebook で呼びかけ、DM づくりをするなど）とし、も自分たちで行った。ネット上への発信は各自が行い、DM づくりは 1 月末に分担で選ばれた者がデザインを決めて、全員に意見を求め承諾をとったのち、2 月初めに印刷所へ持ち込んだ。

活動レポート ：

この計画の実施期間の約半年は驚くほどあっという間に過ぎ去ってしまった。自分よりめまぐるしく大変な生活を送っている人は山のように存在することはわかっているが、それでもこの半年間は大学に通い、国家資格や語学の勉強、休日には当デザイン学校に一日 10 時間身を置き学び、展示の準備まででき、今までで一番濃縮に様々な範囲で学習できた期間だったと、このタイミングになってやっと実感している。事務的なことは前述したためここではなるべく精神面に焦点を当てて述べる。

展示の計画をたてる前は、まだクラスメートのお互いのことをよく知らず、異なった年齢や職業のメンバーの中で、自分のようなコミュニケーションの得意でない人間が混ざるそれ自体だけで、当初は不安要素が爆発しそうなときがあった。しかしお互いに話し合い、意見を出し合いときにはその真剣さゆえか周りが見えなくなって、ほぼ全員が成人しているのだが、ぶつかりあって雰囲気が悪くなるようなこともしばしばあった。しかし不思議なことにそうしているうちにそれぞれがどのような人なのかがみえてくるにしたがって、良いところ、補いあうべき点が次第にわかってきたため、その不安はいつの間にか消えていた。

今回の計画で、学業や仕事などで出欠席がばらつくことが多かったため、展示の運営・計画に関する全てのことがらを一人の人間が中心となって進行させるには無理があり、自分や誰か一人が全体の進行を担うことはなかった。だが、これに関しては逆に良かったと感じている。一見、15 人が集まるとリーダーや何かがいなければ進まなさそうに思えるかもしれない。しかし、ここは大人の集団、基本的には案外お互いがある程度筋を通しつつ、ほかの意見をも尊重するように全員で構想することができ、これはもしかしたらメンバーに恵まれたのかもしれない。次に何か何人かでプランニングするような機会があれば、今回クラスで共に活動した人生の先輩たちに倣って、もう少し積極的に発言できるようにしたいとも今になって感じている。さらに、私は何かグループや集団の中にいざ放り込まれると、自分の言いたいことがうまく言えなくなってしまうたちなので、この経験をきっかけに、一歩踏み出す勇気に加え、落ち着いて伝えたいことを伝えるプレゼンテーション能力の向上を図りたいと思った。

また人間的な部分だけでなく、計画を立てることは筋の通った、安定した活動をするには大変重要な役割を担っていることが感じられた。自分は典型的な右脳派の人間で本能・感覚のままに突っ走る傾向があるので、論理的に筋道立てて行動することの大切さをもう少し重んじたいところである。

アドバイザーコメント ：

グループ展の企画という本活動は、当該学生が将来、絵に携わる仕事をするにあたっての有意義

な機会になったものと考える。
　しかし今回の活動ではそれに留まらず、本人が述べているように、人とのかかわりや複数の人で「もの」を作り上げるやりとりについて大きな経験になったようである。また、芸術的作品の表現においては、直感的な感性が重要であると考えられるが、それを仕事としていくにあたっては、客観的な事実を考慮し、さらに人に伝えていくことが求められ、この報告書の作成などもその勉強になったものといえる。本活動を通して学んだことを通し、今後の諸活動の充実が期待される。

（社会学部　幸田 麻里子）

活動テーマ ： 龍ヶ崎市で市役所の許可を得て行う学生企画実現の取り組み
～中学生の学習支援のために無料塾を開校する～

活動分野 ： 起業・チャレンジ

実践者名 ： 早川 昂平（社会学部 国際観光学科 2 年）

日程・場所 ：

12 月上旬　龍ヶ崎市公式ホームページより龍流連携の過去の活動を調べ、企画書作成
12 月中旬　龍ヶ崎市役所企画課に企画書提出
12 月下旬　市議会議員と打ち合わせし、企画書を修正し市議に提出
2 月 12 日　無料塾活動を行っている龍ヶ崎市内の NPO 団体の活動見学

概　　要 ：

A)市議と連絡を取り、自分たちが「無料塾を開講したい」ということを伝え、実現のために必要となる具体的な手続きなどについてのアドバイスをもらった
B)龍流連携の過去の活動、東京や神奈川などの他の地域の無料塾の活動について調べた
C)企画書を作成
D)企画書を持参し、市役所の企画課と打ち合わせ(山口)
※活動実施を学年末テスト前として打合せをした結果、市役所企画課が中学校側へ日程調整を試みて頂ける事となった。
E)市議との打ち合わせを改めて行い、企画書の修正へ助言を頂き、今後の流れについて再確認
F)企画書を修正するとともに、無料塾の生徒募集要項を作成し、市議に提出(早川)
※1 月下旬に、市役所企画課より、日程調整についての回答があり、学校側と調整できなかったため実施できず。
G)市議の紹介により、無料塾と似た活動を行っている龍ヶ崎市の NPO 団体の見学
※見学した NPO 団体は無料塾としての活動もしているが、その活動の主体は学習支援よりも、生活支援であった。
※かっこ内の名前は主にその活動をした者の名前、名前を付していない活動は共通で活動

活動レポート ：

法学部の特別奨学生、山口くんと共同で、市役所の許可を得て、学生主体の企画を実施するまでの手続きを学ぶことを未来力チャレンジの活動目標とした。そして、その企画として、龍ヶ崎市内で無料塾を開校することを計画した。なぜ無料塾を開校しようと考えたかというと、二人とも学習塾でアルバイトをしていた経験があり、その経験を生かすことが出来ればいいと考えたからである。

今回の取り組みの概要をここで述べる。最初に取り組んだのは、今回の取り組みを市から協力を得て行うために、前例の確認作業であった。具体的には、龍流連携の過去の活動を龍ヶ崎市公式ホームページから調べることであった。確認した結果、流経大の学生が小学校に行き、水泳や持久走などの体育の授業を支援する活動が行われていた。だが、無料塾のような、小中学校の取り組みを支援するのではない、学生が立案した学習面に関する独自の活動は過去には確認出来なかった。また「無料塾」とインターネットで検索すると、東京都や神奈川県など、一部の都市部では NPO 法人等が無料で塾に通えない小中学生、高校生に学習指導する活動をしていることもわかった。以上の

ことを踏まえ、取り組みの実現に向けた、企画書の作成をした。

Ⅰ活動内容で書いたように、龍ヶ崎市内の塾に通えない・通っていない子どもたちの学習支援をするために、さらに龍流連携の新たな試みとして流経大生のボランティアを中心に無料塾を開校することを企画の趣旨とした。また、実施場所は龍ヶ崎市内の中学校をお借りする予定とし、実施日時は中学校の学年末テストの前の平日の放課後、二週間ほどを想定した。加えて、生徒の送迎の必要や、募集する生徒の人数を考える必要があった。企画書の作成に当たっては、市議会議員の坂本氏にアドバイスをいただいた。

作成した企画書を、12 月の中旬に、市役所の企画課に提出した。苦労して書いたおかげか、市役所の企画課の方が真剣に耳を傾けてくれた。このことで、非常にやりがいを感じることができた。この際の打合せで、企画課の方が、学校、教育委員会との日程を含めた折衝を引き受けて頂ける事となった。ただし、企画書についての助言も頂き、学校に対して改めて提示するために、12 月の下旬から 1 月にかけて、企画書を修正することとなった。

この企画書の修正に際して、坂本氏とは電話で何度も連絡を取り、一度ではあるが直接会って打ち合わせを行わせて頂くなど、企画の修正と今後の企画実現に向けた流れを確認させて頂く機会を得た。企画書の修正に鋭意取り組んでいたが、1 月下旬になり、市役所から、中学校、および教育委員会との折衝が不調に終わったとの連絡を頂いた。残念ながら、私たちは無料塾を実現することができなかった。

実現できなかった原因は、私たちが具体的な活動を始めるのが遅かったからである。企画書を市役所に提出したのは、12 月中旬であり、結果的に無料塾を開校する中学校や教育委員会との日程調整ができず、企画を実施できなかった。

何か企画を実施するときには、特に今回のような市役所、中学校そして教育委員会など複数の機関の協力が必要な場合は企画実現までに、十分な準備期間が必要であることがわかった。2 月に見学した龍ヶ崎市内で無料塾活動をする NPO 団体も、活動までの準備に 1 年かかったとのことを聞き取ることができた。このことからも、私たちの準備期間の 2 か月というのはあまりにも短すぎたと感じた。これは今後の教訓にしたい。

無料塾を実現することは出来なかったが、坂本氏の紹介で、龍ヶ崎市内の NPO 団体を見学することができた。この見学では、授業の様子を見ることができた。先生 1 人に対し、生徒 1 人か 2 人ほどで授業をしていた。また、NPO 団体の代表の方から、無料塾を開校するうえで考えなければいけないことを二つ教えていただいた。一つは、生徒をどうやって集めるかということである。塾に行っていない子どもの家庭には経済的な理由もあるかもしれないが、勉強嫌いな子どもが多い。だから無料塾があっても利用しない可能性が高い。このため、そのような子どもをどのように集めるかが重要になる。もう一つは、どこまでのことをやるか決めることである。具体的には、NPO の主催する無料塾に通っている生徒の親からは「アレをしてほしい」や「コレもしてくれ」というリクエストが多いそうだ。そのため、「私たちは学校のワークのわからない所を解説するが、他のテキストの解説はしない。」というようにやることとやらないことを決めておいた方が良いと教わった。この二つのことは、企画書を作成している段階で全く考えていなかったので意外だった。

見学させていただいた NPO 団体の無料塾の講師は全員がボランティアであり、中には大学生や高校生もいるという。上でも書いたように私たち自身で計画して無料塾は開けなかったが、今後このボランティアには参加しようと思う。また、来年度の「未来力チャレンジ」で同じようなことに挑

戦する学生がいれば、その時は私にも協力させてほしいと思う。今回の活動で学んだことと反省すべきことを、今後の学生生活に生かしていきたい。

アドバイザーコメント ：

本人のコメントにもあるように、テーマの設定までの準備期間が長く、結果として実働期間が短くなったことが、今回の取り組みの大きな問題点である。何が出来るかを入念に考えることは非常に重要なことではあるが、期間が限定されている場合には、行動を起こすことも重要である。この事に気がつくことが出来たであろうことが、本人にとって大切な成果であると考える。卒業論文をはじめとする今後の学業、就職活動などの課外活動において、上記のⅣ成果「自分自身の今後に与える影響」で自身が記述した通り、今回の経験を活かし、実践してくれることを期待したい。

（社会学部　高口 央）

活動テーマ　：　先輩から学ぶ活動

活動分野　：　学生生活支援

実践者名　：　山内 菜摘（社会学部 国際観光学科 2 年）

活 動 先　：　流通経済大学内

日程・場所　：

11 月 21 日　東先生と 1 回目の打合せ　1201

11 月 28 日　高橋先生と 1 回目の打合せ　3 階講師室廊下面談スペース

12 月 12 日　東先生と 2 回目の打ち合わせ　1201

12 月 19 日　高橋先生と 2 回目の打ち合わせ　3 階講師室廊下面談スペース

1 月上旬　東先生にテキストをお借りして、インタビューについて事前学習

1 月 16 日　高橋先生と 3 回目の打合せ　3 階講師室廊下面談スペース

1 月 31 日　16 時より 1003 教室にてインタビュー実施

2 月 9 日　東先生と 3 回目の打合せ　2 階教員室

インタビュー内容の文字おこし、レポート、パワーポイント、活動報告書の作成

概　　要　：

　高橋伸子先生のゼミ生３名（河内沙耶さん、古宮綾乃さん、エリザベータさん）の方々にご協力していただき、インタビューを行いました。３名の方々は旅行会社に内定が決まり、それは私自身が卒業後に目指しているところであります。就活に成功する秘訣を就活体験談や学生生活の中から探ろうと、この活動に至りました。まず、高橋先生にコンタクトを取り、高橋先生に仲介していただきインタビューのアポイントを取りました。今回私にとって初めてのインタビュー活動であったため、質的調査のテキストを用いて事前学習をしました。実際インタビューを行う際、記録に残すために IC レコーダーを使って録音しながら実施し、インタビュー後には録音した内容を全て文字におこす作業を行いました。その内容を基に就活成功のヒントを分析して独自にレポートを作成しました。

　テキストは以下を利用しました。

　『よくわかる質的社会調査　プロセス編』谷富夫・山本努編著　ミネルヴァ書房出版

　『よくわかる質的社会調査　技法編』 谷富夫・芦田徹郎編　ミネルヴァ書房出版

活動レポート　：

　私は未来力チャレンジの活動として、旅行会社に内定を得た３名の先輩方にインタビューを行いました。私は将来、旅行会社に就職したいと考えています。先輩方の学生生活の送り方や就活の体験談から就活成功のヒントを探り、今後に生かしていこうと思い、この活動に至りました。今回の活動から学んだことが３つあります。

　１つ目はチャレンジすることの大切さです。今回インタビューした先輩方は RKUweek の手伝いやオープンキャンパスの学生アドバイザー、イングリッシュキャンプなどのボランティア活動、資格取得などそれぞれ様々な活動に取り組んでいました。このような様々な経験で大人から自分にない知識や考え方など社会的常識を教わり、就活でも面接やエントリーシートで学生時代に頑張ったこととして伝えることが尽きなかったそうです。また河内さんから「就活中だけ嘘をつく人もいます

が、大人（面接官）は経験した人としてない人では感じ方や言うことが違うため見分けられてしまう」という興味深い話がありました。つまり、学生時代の様々な経験は自分自身を成長させ、他の学生と差をつけることができるのだと思いました。そしてそういうバイタリティ溢れる学生を面接官は探しているのだなと考えました。このようにチャレンジすることを恐れずに取り組むことが就活でそしてさらには社会で役立つのだろうと思いました。

２つ目は人から話を聞くことの大切さです。先輩方の経験したからこそ言える素直な感想がとても心に響きました。例えば「資格の勉強は１人でするより同じ目標に向かって一緒に頑張る仲間の存在が大切である」というお話を聞きました。まさに私は１人で勉強していて挫折していました。しかし励ましあい刺激しあう仲間がいることは大きな心の支えになり、目標を達成できたのだろうと考えました。また先生とコンタクトも多く取り、分からなくなったらとにかく聞きに行っていたそうです。このように１人で頑張ろうとせず、いろいろな人に頼ることも大切だと気づきました。このようなお話は聞かなきゃ教えてもらえないことであり、とても参考になりました。今回このような機会を作らなければ、直接先輩から話を聞くことはなかったかもしれません。自分が知らないことを思い切って聞いてみると、興味深い話やアドバイスなど今後に役立てられることをいろいろ教えていただくことができました。

３つ目はインタビューの難しさです。やってみると私は緊張してしまい、私はただ語り手の話に相槌を打つだけになっていました。そのせいか、少し雰囲気が硬くなっていた気がします。インタビュアーに求められることは、いかにコミュニケーションを活発にし、語りを生産的にするかということだと気づきました。また、よりよい話を引き出せるかどうかはインタビュアーの腕にかかっており、コミュニケーション能力は不可欠だと痛感しました。テレビで見るようなインタビューが上手な人は相手が話しやすいような雰囲気を作り、質問に答えてもらったことに対し、その場に応じて出てきたキーワードからさらに話を引き出す頭の回転の速さがあり、見るのと実際やってみるのは違い、インタビューは奥深いものだと感じました。

今回の経験は私にとって新しいことへの挑戦であり、とても貴重なものとなりました。チャレンジは取り組んでいるときは大変でも、それらを成し遂げた先には、自分自身を成長させることができ、得られるものがたくさんあることが分かりました。「大学は社会に出る前のやりたいことができる時間」というエリザベータさんの言葉や「チャンスがあったり、なにか自分が始めようと思うことがあったら、絶対にその時にやった方がいい」という河内さんの言葉が私の背中を強く押し、これからは新しいことに取り組んでいきたいと思うようになりました。具体的には、大学の様々なイベントに積極的に参加したり、旅行会社に就職したいという目標を持って資格の勉強に励んでいきたいです。いろいろな経験を通じて、自分磨きしていこうと思います。

アドバイザーコメント：

山内さんには、実は難易度の高い課題を実行してもらいました。インタビューは簡単なようですが、きちんと社会調査法としての手順を踏み、実行していくことは簡単ではありません。また、人の話を聞くことは人に上手に語らせることでもあります。人に上手に語らせることはとても難しいですが、その基本は相槌を打ちながら聞くことです。相槌はきちんと話を聞いているよ、というサインになります。そういう意味では、良いインタビューができたと思いますし、丁寧にテープおこ

しをすることで、きちんとその分析もできたのではないかと思います。
　調査の目標は先輩のインタビューから旅行会社に就職するヒントをつかむことでした。この分析を通して導き出された結果を、さらに就職活動一般に役に立つことと、旅行会社に就職する上で役に立つことに分けて結論づけられると、レポートとしては、さらによくなったと思います。
　高橋先生には、山内さんの調査のためのインフォーマントをご紹介いただき、本当にありがとうございました。

（社会学部　東 美晴）

活動テーマ ： 相手に喜んでもらうためにはどうしたらいいのか考えながら行動する

活動分野 ： 社会福祉

実践者名 ： 小嶋 美歩 （社会学部 国際観光学科 2 年）

活 動 先 ： 高齢者デイサービスセンター

日程・場所 ：

活動した日程

1 月 27 日～1 月 29 日

活動場所

高齢者デイサービスセンター

概 要 ：

1 月 8 日 ・社会福祉協議会に相談しに行く

1 月 27 日 ・自己紹介 ・高齢者の方と一緒に工作(詳しくは「Ⅵ活動レポート」参照)
・全員で「ほほえみ体操」 ・一緒に昼食 ・工作続き ・カラオケ観戦
・お茶、お菓子を食べる(お茶、お菓子、おしぼりの準備、コップ洗い)
・体温を計る手伝い ・見送り ・帰宅

1 月 28 日 ・高齢者の方とお話 ・全員で「ほほえみ体操」、「ペットボトル体操」
・一緒に昼食(高齢者の方の食事を運ぶ手伝い)
・次の日の参加者の名前仕分けの手伝い
・輪投げ大会(輪投げの手渡し、得点記入の手伝い)
・お茶、お菓子を食べる(お茶、お菓子、おしぼりの準備、コップ洗い)
・高齢者の方とお話 ・体温を計る手伝い ・見送り ・帰宅

1 月 29 日 ・高齢者の方とお話 ・全員で「ほほえみ体操」、「ペットボトル体操」
・一緒に昼食(高齢者の方の食事を運ぶ手伝い)
・フラワーアレンジメント(花配り、花を生ける手伝い、袋にしまう手伝い)
・お茶、お菓子を食べる(お茶、お菓子、おしぼりの準備、コップ洗い)
・最後のあいさつ ・体温を計る手伝い ・見送り ・帰宅

活動レポート ：

未来力チャレンジでは、テーマにしていた「相手に喜んでもらうためにはどうしたらいいのか考えながら行動する」を達成することができた。相手に喜んでもらうには、相手をよく見ることが大事であると感じた。

１日目、最初に高齢者の方とお話をした。高齢者の方は、よくしゃべり、よく笑っていた。私の地元の話や大学の話をすると熱心に聞いてくれた。また、お話をしながら軍手を使った工作をした。軍手の指の部分を切り、そこに綿をつめたり、糸で縫ったり、布を切って目や耳を付けてネコを作るものであった。高齢者の方は手先がとても器用で短時間で多くのネコを作り上げていて驚いた。私は、目や耳を付けたり、口を縫うことで苦戦していた。作業が終わるとほほえみ体操というものをした。これは、椅子に座りながら腕や足の運動をするものであった。他にも、口を大きく開けて話す、口の運動もした。 昼食は、食堂に移動し食べた。食堂には、同じ施設にいる障害者も集ま

っていた。その時、１人の障害者の人が話しかけてくれた。普段書いているスケッチブックや施設の人たちと出かけた時の写真を見せながら話をしてくれた。私はその時、話を聞こう、理解しようということで精一杯であった。 午後は、工作作りを再開し、終えるとカラオケをした。お茶時間、おしぼりを配ったり、お茶をくんだり、お茶菓子を並べる手伝いをした。お茶の時間が終わるとコップ洗いや高齢者の方の体温を計る手伝いをして、帰りの時間に見送りをして１日目のボランティアは終了した。

１日目は、何をすればいいかわからないことが多かったため、同じボランティアの人たちに言われたことしかすることできなった。２日目は、１日目と同様なことをした。しかし、１日目と違って昼食の時間におじいちゃんおばあちゃん方に食事のおぼんを運んだり、昼休み時間にボランティアの人に何か手伝うことはないかと聞いたりして率先して手伝いをした。お茶の時間も自分から動き、お茶の準備をしたり、おしぼりを配ったりした。だいぶやることがわかっていき、自分で考えて行動することができるようになったと感じた１日であった。

３日目の午前中は同様な時間を過ごした。昼休み、１日目に話しかけてくれた障害者の人が私のところへ来てくれた。今日でボランティアが最後だと伝えると寂しそうにもっと話がしたいと言ってくれた。はじめは話していることを１つ１つ理解することで精一杯だったが、徐々に理解できるようになり、笑ってさまざまな話をすることができた。高齢者を対象としてきたボランティアだったが、障害者の人から何を感じながら今を生活しているのか聞くことができて良い出会いをしたと感じた。

午後のお茶の時間、前回は人数分のお茶を作ることしか考えていなかったが、今回は、ひとりひとりにあったお茶の温度があると知り、ぬるめのお茶がいい人には水を足してぬるくしたりして配った。みながお茶を飲み終える頃、自らコップやおしぼりを回収しコップ洗いをした。 最後のあいさつをしたときにありがとうと感謝の言葉をもらったときはとても嬉しかった。また、帰りの見送りで高齢者の方たちが、私たちが車から見えなくなるまで笑顔で手を振ってくれたときが、この活動をして本当に良かったと感じた瞬間であった。

３日間を通して相手に喜んでもらえるためには、自分から行動してみる、声に出して相手に聞いてみる、相手の目を見て話を聞くことが大事であると感じた。一見簡単なことではあるが、自己中心的にならず相手を考えて行動することは難しかった。これらは、将来働く上で基礎になる部分であり、必ず身につけておかなければならないことである。将来のために資格をとることばかり考えていた自分にとって、この基礎を身につけたいと強く感じさせてくれるような３日間であり、有意義な時間を過ごすことができた。

アドバイザーコメント ：

・実施計画書に書かれている内容はおおむね実行されている。

・ボランティア活動を通じて、「自分基準」ではなく、相手の立場（この場合は、高齢者）に立ってものを考える視点を獲得し、それを実行するためにはどれだけ細やかな配慮が必要とされるのかを実感した点は、高く評価できる。
・ボランティア活動の詳細を時系列的に記述しており、実際の活動の様子が手にとるようにわかる報告書となっている。

（社会学部　高橋 巌根）

活動テーマ　：　ふるさとへの貢献

活動分野　：　地域イベント運営

実践者名　：　安達　雅人（流通情報学部 流通情報学科 2 年）

活　動　先　：　水戸市政策研究会　茨城県納豆商工業協同組合　ひたちなか海浜鉄道株式会社

日程・場所　：

10 月 19 日　日曜日　ひたちなか海浜鉄道湊線　勝田～阿字ヶ浦間

勝田、日工前、金上、中根、高田の鉄橋、那珂湊、殿山、平磯、磯崎、阿字ヶ浦

概　　要　：

納豆の消費拡大と、震災後廃線の危機にあったひたちなか海浜鉄道湊線の利用者拡大など地元茨城への地域貢献をした。

納豆列車の発車前に連結する食堂車の内装の飾り付けや無料で配る納豆、ご飯、薬味の準備をおこなった。乗り込んだ参加者にご飯を渡し、好きな納豆と薬味を自由に選んでもらい列車の中で納豆ごはんを食べるという非日常的状況を楽しんでもらった。その後、ゴミの回収と片付け作業をおこなった。

活動レポート　：

春学期の末、今回の自主活動の説明を受けた私はボランティアを自主活動で実践することにした。ボランティアといっても種類はたくさんあるので、まず水戸市役所の職員でボランティア活動をしている知人に相談し、水戸市政策研究会が行う予定のボランティアの中から気になった納豆列車の企画を紹介、参加させてもらうことにした。納豆列車とは、東日本大震災の影響で廃線しかけたひたちなか海浜鉄道湊線の運行再開のアピールと利用者拡大、さらに茨城県産の納豆をＰＲするのが目的で今回で二回目となる。ひたちなか海浜鉄道湊線の勝田～阿字ヶ浦間において食堂車を連結した列車を往復二回運行し、参加者にはご飯を配り好きな納豆と薬味を選んでもらい、非日常的な空間の中で納豆ご飯を食べてもらうことで納豆と湊線の両方を楽しんでもらおうというものだ。主催は、茨城県納豆商工業協同組合とひたちなか海浜鉄道株式会社で水戸市政策研究会はその運営の手伝いとして参加した。

イベントのまえには、水戸市政策研究会で内容の説明を含めた会議があり自己紹介も兼ねて参加させてもらうことになり、十月十五日に水戸市役所に向かうと自分以外にもボランティアとして参加する保育士の方がいて驚いた。十月十九日、当日になると知人と水戸駅から八時に阿字ヶ浦駅に間に合うように電車に乗って移動した。阿字ヶ浦駅に着くと、他の人の到着を待ち最終確認と運営スタッフ用のオレンジのジャンバーが配られ、納豆組合と湊線の職員にあいさつを済ませると準備がはじまった。最初の仕事は食堂車の内装の飾り付けだった。食堂車は四人掛けの座席にテーブルをセットしたもので、まずこのテーブルとご飯の配ぜんや薬味を置く長テーブルを列車に積み込み、納豆の各ブランドのポスターやのぼりを飾った。準備が終わると開会式が始まり、地元の中学生による演奏や水戸の梅大使、高校生が考えたゆるキャラみなとちゃんの紹介と撮影が行われた。撮影には NHK 水戸放送局や茨城新聞など多数のメディアが来ており、夕方のニュースで放送されるなど小規模ながら注目されたイベントであると感じた。参加者一人一人にご飯を手渡して感じたのは参加者の数だった。ひたちなかという立地を考えると非常にたくさんの子供からお年寄りまで幅広い

年齢層の人が納豆ご飯を味わっていた。なかには、外国人のグループも参加しており、より多くの人に茨城の納豆と湊線の魅力を伝えるというこのイベントの目的は達成できたのではないかといえる。

今回の自主活動では、ボランティアを通して水戸市役所の職員をはじめ鉄道会社や県の納豆組合員など普段の大学生活では関わらない多くの社会人と交流することができ、また現在でもたまに水戸市政策研究会の手伝いをしている。ボランティアに興味をきっかけにもなった今回の自主活動は有意義なものだったといえる。

アドバイザーコメント：

実践者が活動に選んだ「ボランティア」とは、他人のために無償の奉仕をすることばかりではない。ボランティアの活動を終えた人から聞かれる言葉は、「助けられ、救われたのはむしろ自分の方だった」というものが多い。

さて、今回の報告書で、「非日常」という言葉が目に留まった。電車と納豆が結びつくなんて、報告書を読んだだけでもワクワクするし、参加者は電車の中で納豆を食べるという「非日常」を、どれほど楽しみ、それに心を踊らせ、中には悲しみが癒された人もいるだろう。しかし、「非日常」はそれだけではない。実践者自身が、水戸市役所に相談し、出向き、説明会や、運営会議にも参加したことこそが、「非日常」であり、どれほど有意義な「非日常」であったことだろう。そして、その「非日常」は実践者にとっていつの間にか「日常」となっており、新たなる「非日常」に身を投じていくプロセスが報告されている。

実践者の活動は、大学生が社会に出て行く上で、自分の興味・関心を広げていくために理想的なステップであり、成功体験であった。この成功体験を得ることのできた大学生は本当に強い。

これからの更なる活動の発展が本当に楽しみであり、強いて言うのであれば、ぜひ後輩たちに同じ成功体験を味あわせて欲しい。

（流通情報学部　馬場 裕）

活動テーマ　：　森の清掃ボランティア

活動分野　：　地域貢献

実践者名　：　川畑 勇樹（流通情報学部 流通情報学科 2 年）

活 動 先　：　丸山サンクチュアリ

日程・場所　：

活動場所　丸山市民の森

日程　　10 月 18 日

11 月 4、15 日

12 月 20 日

1 月　17 日

概　　要　：

雑草の除草や森の中のゴミ拾い

歩きづらくなってしまった遊歩道に新しい木を持っていき修繕した

伸びすぎてしまった枝が危ないため、ノコギリを使って切った

森の外周を囲う木が崩れてしまい、積もった枯葉が森の外に落ちてしまうため、新たな丸太を積み枯葉が森の外に落ちないように修繕を行った。

活動レポート　：

私は地域の森の丸山市民の森で丸山サンクチュアリの皆さんと清掃ボランティアの活動を行いました。メンバーの数は日によって違いますが、８人ほどで作業を行いました。作業期間としては 10 月から１月までの４ヶ月の間、月に２回ほど参加させてもらいました。活動の時間は朝の８時から１２時からの４時間の活動で清掃活動を行いました。

主な活動内容は森の中の雑草の除草でした。この作業はスコップを使い雑草の根から掘り起こして除草するため、体に負担がかかり大変な作業でした。また、雑草でない草との見分けるのも最初は難しく、慣れるまでは大変でした。また、長くなりすぎて遊歩道に飛びでてしまった枝などを切る作業も行いました。この作業はそこまで大変ではないのですが、森が広いため量が多くて大変でした。その他にも、森に落ちているゴミを拾う作業も行いました。落ちているゴミは主に食べ物の袋のゴミが多く、ポイ捨てが多いということがわかりました。こうした行動が森を汚しているのだと感じました。他の作業としては、落ち葉が森の外に落ちないように森を囲む塀の修繕や人が植物を踏まないように、遊歩道にロープを張れるように丸太を使って杭を打ちました。これらの作業で使う木は森に落ちている丸太を使いました。この作業は時には大きな丸太を運ぶことがあるので、力がないと大変な作業なので、年配の方々だけでの活動の際には大変な作業だと思いました。特に大変だった力仕事は、大きくなりすぎてしまい、倒れると危ない木を切るといった作業です。この作業はノコギリを使って行ったのですが、ただ切るというのではなく、民家の方に倒れないように方向を考えて切るため大変でした。切り終わった後もその木を次の活動の際の修繕作業に使えるように切り分けを行いました。

この活動を通じて森がきれいなのはこうした作業を行うボランティアの方の日頃の活動のおかげであることがわかりました。メンバーの方になぜボランティアを始めたのか聞くとやりがいがあ

るからみなさんおっしゃっていました。私は今までボランティア活動をする人の気持ちがよくわかりませんでした。ですが、今回参加したボランティア活動で人のために無償で作業をするということは良いことだと強く思いました。作業中に森を歩いている地域の方々から感謝の言葉をもらった際に、作業してよかったと感じました。こうした誰かのためになる作業というのは普段の生活の中ではなかなか経験できないことだと思うのでボランティア活動に参加してよかったと思いました。

アドバイザーコメント：

なにげない清掃のボランティ活動から多くのことを学んだようですね。

地域の結びつきや地域の生活実態なども学習できたことでしょう。また、単に机上の考えだけでなく実際に身体を動かしたことは評価に値いします。個人のできる範囲から始めることは、重要なことです。この経験をもとに、地域への貢献方法、地域の結びつき、何が問題なのか、どうせればゴミを減らせるかなどまで考えられるようになるといいですね。

今後はこの経験を、学修への取り組み方法や学修目標などにも生かしてみてください。

（流通情報学部　関 宏幸）

活動テーマ　：　雑誌編集に携わってみて

活動分野　：　インターンシップ・実践

実践者名　：　中澤 秀治（流通情報学部 流通情報学科 2 年）

活 動 先　：　SUTTER magazine

日程・場所　：

活動日程は 1 月 28 日、2 月 2 日、4 日、10 日の四日間。午前 11 時から午後の 5 時まで活動しました。

場所は主に道玄坂にあるギャラリーコンシールというカフェか、渋谷区のマンションの一室であるスタジオで活動を行いました。スナップ撮影のために表参道、用具搬送のために三軒茶屋や新宿にも行きました。

概　　要　：

私はフォトカルチャー雑誌 SHUTTER magazine の雑誌編集に、編集インターン要員として参加しました。担当した業務は、モデル撮影時のカメラマンのアシスタント、街頭でのスナップ撮影補助、アンケートの集約、写真展の準備、撮影用具の荷物運びです。具体的にはカメラマンアシスタントとしてはカメラマンの方が撮影しているときに横にいてモデルさんの髪の乱れや服装のヨレを整えたり、撮影用具を撮影と一緒に運んだりしました。街頭スナップ撮影は、街中にいる方にモデルになって下さいと声をかけて撮影を行います。撮影の許可をもらったら、それと同時にアンケートに答えてもらいます。そして街頭スナップで集めたアンケートと他の撮影の時に答えてもらったアンケートを誌面に掲載できるようにパソコンにすべて打ちこみます。この他にも提携している渋谷の道玄坂にあるギャラリーコンシールというカフェで行った写真展の展示準備を行いました。先に展示してあった写真を包装したり、カフェの壁にカメラマンさんごとの展示スペースを測って分け、カメラマンさんの希望通りに壁にネジを打ち込んで飾っていきました。写真は写真展の準備時のものです。

活動レポート　：

今回の活動で雑誌編集に携わらせてもらい、それによって自分の中の様々な意識が変わりました。そもそも今まで僕は雑誌編集とは何か特別な技術が必要なのかと考えていましたが、そうではありませんでした。雑誌を作るということは撮影や取材のために様々な場所に飛び回って情報をかき集め、人脈を広げ協力を集い少しづつ完成させていくものだと感じました。現場に行ってみてわかったことは、とにかく行動を起こし続けていて、そうすることで常に何かが形になっていくものなのだということでした。無の状態から企画を考え、その企画を実行するために膨大な量の作業を繰り返していくことでやっと普段自分が目にしている雑誌が出来上がっていくのだとこの目で見て感じました。雑誌は世の中に情報を発信する一つの媒体なため間違いは絶対に許されません。自分が活動の中で行ったアンケートの集約が試作品で印刷されたとき、自分が関わっているものの責任を感じました。

活動の中でなにより自分に足りないなと感じたものは、社会に出て働くという意識でした。単に挨拶ができてお礼が言えるというだけではなく、周りや相手への気配りや配慮が出来なくてはなりません。しかしそれが自分には全くといっていいほど備わっていなく、活動中に何度も注意を受け

ました。撮影でいえば、モデルさんにあらかじめどの程度の時間がかかると伝えておくのは当然、撮影が始まる前に上着を預かったり、何人か同時に撮影している場合に待たせているモデルさんへの気遣いも忘れてはいけません。モデルさんにポーズなどを要求する際も言葉遣いに気をつけて、なるべく自然な流れで撮影を行えるように雰囲気も大切にしていきます。モデルさんに明るく話しかけ雰囲気をよく保ちつつ、自分の思った通りに写真がとれるように立ち回るカメラマンの方は本当にすごい方でした。写真展の準備時には、展示スペースを貸していただいているカフェで必ず一人一杯注文したり、展示を見に来る方のためのお茶菓子も甘いものと塩味のものの両方を用意することなど、関わっている人全員に気配りを欠かさないようにと様々な指導をいただいたときに、これは社会に出たときに必要となるものだと強く感じました。

この活動を通して、自分になかった意識や考えを得ることができました。社会にでて仕事をするということは、自分の行動に責任を持ち、気配りや配慮を欠かさないことだと知ることができました。この考えをふまえてこれからの大学生活のうちに新たな活動を行いたいと思いました。

活動テーマ　：　音楽部プロモーションビデオ作成

活動分野　：　学生生活支援

実践者名　：　馬場 武志（流通情報学部 流通情報学科 2 年）

活 動 先　：　流通経済大学 音楽部

日程・場所　：

ビデオ撮影

・サマーライブ　8 月 31 日　流通経済大学龍ヶ崎キャンパス

・つくばね祭　11 月 1 日、2 日　流通経済大学龍ヶ崎キャンパス

・クリコン　12 月 23 日　柏ＡＬＩＶＥ

概　　要　：

・文化祭や部内でのライブイベントの際に、ビデオを撮影する。

・ＰＣ（windows movie maker）によってビデオを編集しプロモーションビデオを作成する。

・新入生や他の生徒にビデオを見てもらうことで音楽部の活動を知ってもらい、部を盛り上げていくことが目的。

活動レポート　：

自主活動を行うにあたって、自分が流通情報学部であることを活かし、何らかの情報技術を利用できないかということ。そして、音楽部部長として、部活に貢献できないかということを考えた結果、音楽部のプロモーションビデオを作成するという考えに至った。目的はビデオを通して、新入生や他の生徒に音楽部の活動を知ってもらい、部活動を盛り上げていくことだ。ビデオの内容は活動の説明と、ライブの映像をまとめたものだ。

プロモーションビデオの作成において、まずはライブの様子を撮影することにした。今回はサマーライブ、つくばね祭、クリコンの３つのライブを撮影した。そうして集まった動画をＰＣ(windows movie maker)で編集した。最初はビデオの作り方などまったくわからなかった。まず必要なフリーソフトを探すことから始め、ビデオの形式を変更したり、構成を考えたり、とても苦労した。作業をしていく過程で、僅かではあるが情報技術の知識を得ることができた。そして、簡単なビデオを作成する力を身に付けることができた。それを活かして、結婚式や送別会のためのビデオを作ったり、将来ビジネスにおいてビデオを用いたプレゼンを行ったりしてみたい。もちろんその際は、フリーソフトだけでなく様々なソフトウェアを使いこなせるようにしたい。

まだ、新入生にビデオを見てもらったわけではないので、どれだけのプロモーション効果があるかはわからないが、このような試みは面白かったと思う。今までは入学式でのビラ配りや、RKU WEEKでの部活動紹介でしか宣伝する機会が無かった。しかし、ビデオならスマホを片手にいつでも、どこでも、何度でも、かつ手軽に見ることができる。Twitter や YouTube を利用したり、ビラにＵＲＬを載せたりしてビデオを広めていきたい。さらに、自分達がこのビデオを見て、客観的立場になることで、部活動の振り返りや向上ができるのではないかと思った。また、他大学の軽音サークルに音楽部を知ってもらい、交流につなげていければ面白いと思った。

今回の自主活動をきっかけに、音楽部を盛り上げていく活動を、より積極的に行っていきたいと思った。音楽部の活動を知ってもらえる機会や環境は、ほとんど無いのが現状で、気軽に部活に入

りづらいという声もある。まずはたくさんの人に音楽部を知ってもらい。それをきっかけに青春祭やつくばね祭といった文化祭に参加する生徒や一般客を増やす。そして音楽部を中心に文化部全体、いずれは大学全体をも盛り上げていきたい。

アドバイザーコメント：

あらゆる場面で個別化が進むなか、大学生活もその例外ではない。大学（キャンパス）をどのように活気づかせ、盛り上げていくのかという問題は、いまや本学だけの問題ではない。いかに大学側が仕掛けをしたところで、学生たちが有機的に交わり合い、学生本人たちからの発信がない以上、そこに文化は根付かないだろう。

今日、私たちの身の回りに溢れている様々なコミュニケーションツールは便利な反面、それによって、個別化が加速されてしまうことが指摘されている。しかし、重要なことは、ツールにあわせてコミュニケーションの目的を多様化させていくのではなく、コミュニケーションの目的にあったツールを選択していくことであり、その力をつけていくことである。その観点において、実践者の活動は非常に有意義なものであったことが窺える。そして、今後、実践者が中心となって大学の文化が創出されていくことが期待できる。近い将来、自身が社会にでていく姿を想像しながら、常に傍らにある文化に着目し、その発信と発展にこだわり続けてほしい。

（流通情報学部　馬場 裕）

活動テーマ ： スマートフォンのアプリを開発してマーケットに公開しよう

活動分野 ： 起業・チャレンジ

実践者名 ： 山本 秀樹（流通情報学部 流通情報学科 2 年）

活 動 先 ： 他大学の学生宅及び自宅

日程・場所 ：

11/18…自宅及び他大学の学生宅にて、開発ソフトをインストール。

11/18,27 - 12/7…他大学の学生宅で、ドットインストール(http://dotinstall.com/)の Java 言語を学習した。

12/14,21,26,27,28 - 1/4,7,14,…自宅にて、Android の絵本(株式会社アンク)をもとに、Android アプリの開発方法を学習した。12/14 のみ、他大学の学生宅で学習した。

1/30 - 2/3,4,7,11,12,1718…自宅にて、カレンダーのアプリ開発を行う。

2/20,21,22,23,24…自宅にて、メモ帳のアプリ開発を行う。

概　　要 ：

まず、Android のアプリを開発するのに必要な、Java 言語の基礎を、ドットインストール(http://dotinstall.com/)というサイトで、他大学の学生と共に、約 9 時間学習した。

それから、Java 言語の開発ツールや、その Java 言語をもとにした、Android のアプリ開発ができる Eclipse というソフトウェアなど、開発環境を整えた。これには約 3 時間を要した。

次に、Android の絵本(出版:株式会社アンク)という本を用いて、実践的に、様々な機能を使用したプログラミングを学んだ。当初、他大学の学生宅で、この本を用いて学習する予定であったが、携帯しているノート PC の処理能力が足りず、エミュレーター(実機の代わりに異なるハードウェア上で仮想のマシンを扱うもの)の起動ができなかったため、結果的に自宅の PC での学習となった。この本で約 20 時間学習した。

また、その他のサイトを参考に合計 6 時間学習を行った。

学習に使った本やサイトをもとに、復習も行いながら約 1 か月の間 30 時間かけ、実際のアプリ開発を行った。完成には至らなかったが、ここまで合計 63 時間を活動に要した。

活動レポート ：

今回、他大学の学生宅及び、自宅にて、Java 言語の学習、そしてそれをもとにした Android アプリの開発を、約 3 か月にわたって行った。最初の約 2 か月間、開発環境を整え、Java 言語とアプリの開発方法を出来るだけ理解を深めながら学んだ。最後の約 1 か月間は、実際のアプリケーション開発に時間を費やした。

一番初め、自主活動のために、タブレット PC を購入し、プログラミング学習サイトである、ドットインストールというサイトを見ながら、開発環境を整えたが、Eclipse(アプリ開発のソフト)や、JDK(Java 言語の開発者用ツール)、エミュレーター(PC 上で Android を仮想で動かすもの）など、様々なツールをインストールしたりするのが以外にも難しかった。様々な問題がインストール作業中に発生したが、仲間と共にそれらを解決することができた。ドットストールで学んだことは、一つの単元ごとにノートをとって、復習できるようにした。

それから、Android の絵本という、アプリケーションの開発手法を実践的に紹介している本を利

用して、様々な機能を、エミュレーターを使いながら、プログラムを打ち込むことで確認していくことにした。当初、他大学の学生宅に、タブレット PC を持って行って学習しに行っていたが、PC の処理能力が足りず、エミュレーターが起動できなかったので、実機によるデバッグ(動作の確認)を試みた。様々なサイトを参考にしながら実機によるデバッグの準備をしたが、自分が自主活動用に購入したタブレット PC ではデバッグが不可能であることが分かり、やむを得ず、それからは自宅での学習と開発を行うことになった。

本を利用した学習が終わり、約 1 か月にわたるアプリケーションの開発が始まった。最初の半月間は、カレンダーのアプリケーションを作成していたが、自分が考えていた機能が複雑であったため、メモ帳のアプリ制作に変更した。このメモ帳アプリで実装する予定であった機能は次のようである。

1…01～50 番のリストを作る。

2…番号の列をタッチすると、別ウィンドウを呼び出し、その番号に保存された内容のページを開く。

3…編集ボタンをタッチすると、別ウィンドウを呼び出し、保存内容をテキストエディタで編集できる。

4…保存ボタンを押すと、アプリ内のデータベースに保存され、「保存しました」というメッセージが表示される。同時に、一番最初のリスト画面に戻る。

上記の 1 番は自分で作ることができたが、2 番は本に同じ例が載っておらず、様々なサイトを見たが、ほとんど理解できなかったので、この時点でつまずいてしまい、完成に至らなかった。その為、自主活動でのアプリケーション開発は止め、個人で基礎から時間をかけて学習することにした。

今回の自主活動では、沢山の時間をかけ、それでも期限内にアプリが完成しなかった。しかし、それによって得たものは非常に大きいと感じた。まず、プログラミングの難しさを知ることができた。これから自主活動以外の大学生活で、しっかりとプログラミングの学習をしていこうと思うようになった。時間をかけて、一つのアプリケーションを開発し、いずれマーケットに公開しようと考えている。また、今回使ったこのオブジェクト指向のプログラミング言語は、他の言語にも役に立つと考えている。卒業研究でも、Java などのオブジェクト指向のプログラミング言語を使って、学習・発表をしていきたい。

活動テーマ　：　日本の物流事業に貢献した梁瀬仁先生の軌跡を辿って（物流科学研究所にて資料整理）

活動分野　：　フィールドワーク

実践者名　：　小野寺　隼（流通情報学部　流通情報学科　2 年）

活　動　先　：　物流科学研究所（龍ヶ崎キャンパス５号館）

日程・場所　：

＊活動場所

龍ヶ崎キャンパス５号館２階　物流科学研究所

＊活動日程

8 月　　　活動内容の決定

9 月　　　アドバイザー教員への依頼

11 月～　活動開始（主に学生会活動のない毎週土曜日に作業）

2 月　　　現在作業継続中

活動日：11/25、11/29、12/20、1/10、1/24、2/10、2/12

概　　要　：

流通経済大学の龍ヶ崎キャンパスの５号館２階にある物流科学研究所にて、所有している文書や冊子などの資料整理を行った。

私の主な業務は、本学の前身である日本通運株式会社で活躍し、日本運搬管理協会や日本パレット協会の会長などを歴任し、日本の物流事業に多大なる貢献をした梁瀬仁先生の遺した資料の整理及び資料目録の作成である。パソコンのＥｘｃｅｌ機能を使って、資料の形状や詳細を打ち込み、まとめた。資料の数は、膨大で今まで流通情報学部の何名もの学生が関わってきたが、全ての資料のまとめをすることが出来なかった。私自身、１年時の秋学期の休業期間中にアルバイトとして参加し、資料整理をしたが、終わらなかった。しかし、今回の特別奨学生の未来力チャレンジの活動の機会を生かし、終わらなかった資料整理の作業を一刻も早く完了しようと思いと、元々、歴史に関わる書庫整理といった仕事に憧れを持っており始めた次第である。そして自分の所属の学部が流通情報学部なので、この機会を通じて、日本の物流の歴史の一部にふれることができた。

実際に活動を始めたのは、１１月からだったが、準備段階は８月から始まり、物流科学研究所を管理する吉村先生に作業の許可とアドバイザー教員の役割を依頼し、綿密に計画を立てて進めた。活動自体は、２月現在も継続中であり、作業をしている。

活動レポート　：

私は活動を通して、改めて日本の物流の歴史を学び、そのルーツにふれることができた。物流科学研究所内で資料整理をさせていただいた梁瀬仁先生のことは、最初は全く知らず、どんな人なのか分からないまま業務を進めていた。しかし、長期間で未来力チャレンジの活動として行うことにより、先生がいかに物流というものに携わり、研究していたのか、ほんの一部を感じられた。このような体験は、株式会社日本通運が創立し、物流を専門分野として扱う、流通経済大学でしかできないことだ。在学中に、このような貴重な体験をさせていただいたことは、これからの大学生活の励みになるだろう。

また、資料目録を作成する際、パソコンのＥｘｃｅｌ機能を使って、資料の形状や詳細を打ち込

み、まとめた。私は、元々キーボードで入力する速度が遅く、苦手意識を持っていたので、今回の活動を通して、自分専用のパソコンを購入し、それを利用して、多くの文字を入力する練習ができたので良かった。これから、日々の講義やゼミのレポートや卒業論文、就職活動のエントリーシートの作成でパソコンを利用して自分の考えた文章を打ち込む機会は、多くなる。これからも、頑張っていきたい。

普段のゼミ活動では、マーケティング戦略を中心に学習している。マーケティング戦略には、ポイントとなる４つの P がある。その要素の１つ、Place（流通チャネル）は、顧客へ製品を円滑に移転させるための流通経路の設定や物流に関する活動を示す。今回の活動を通して、この流通チャネルの大切さを改めて自覚した。なぜなら、現代では製品を包むパッケージなどの包装技術や倉庫や物流センターなど保管技術、船やトラックなど輸送運搬技術といった様々な技術が当たり前のように使われているが、100 年前では考えられなかったからである。特に第二次世界大戦後の高度経済成長期、東京オリンピックの開催に伴い、インフラ整備が行われたことやアメリカをはじめとした欧米諸国の物流網を学び、日本に応用したことが発展の要因といえるだろう。情報化社会が進む現代ではインターネットなどソーシャルメディアを利用した通信販売が急速に成長している。その成長に伴い、物流も変化しつつある。身近な例としては、株式会社 Amazon.com の注文から発送、商品が届くまでのプロセス（リードタイム）の短さだ。その背景には、物流センターへの全面的な設備投資という大きなリスクや送料無料に伴う運輸会社問題などがあるが、脅威のスピードを達成する技術には驚かされる。このように、時代の変遷とともに発展する物流の一端を今回の活動で垣間見ることができた。

このように、今回の活動を通して、アルバイトとして活動したときより、身近に物流の歴史を学ぶことができ、物流の発展が日本社会に多大な影響をもたらしたことが分かった。このことは、流通情報学部に所属する一学生としてこの上ない経験である。更に、これから専門科目を学習するにあたり、バックグラウンドの知識を得られたことは、良い刺激になった。この力を生かしていきたい。

１年生の基礎演習ゼミでＰＤＣＡサイクルという手法を学習したが、今回のＲＫＵ未来力チャレンジに当てはめてみたい。

Plan（計画：何をいつまで）・・・物流科学研究所にて資料整理を２月まで
Do（実行：する）・・・物流科学研究所にて梁瀬仁先生の資料整理及び資料目録の作成をする
Check（確認：した結果を分析）・・・活動は現在も継続中、本報告書で振り返り
Action（行動：次に何をするか計画を立てる）・・・更に専門分野を学習、自身の考えを発展させる

大切なことは、今回の活動を自分の未来にどう生かすかであり、現状に満足していてはならない。
『現状に甘んじることなく、進化していかないと未来はない。』（野口英世）
『人生には進捗と退歩の二つしかない。現状維持とはつまり退歩している証なのだ。』（ニーチェ）

最後に、この場をお借りして、今回の活動を認めて下さった物流科学研究所を管理する吉村章先生と２年ゼミでお世話になり、活動について私に多くの助言をいただいた横井のり枝先生に感謝したい。吉村先生は今年度をもって退任されるが、日本の物流から社会における知識など多くのことを教えていただいた。先生に教えていただいたことは、私にとって財産となるだろう。本当にありがとうございました。

アドバイザーコメント：

2013 年の春休みから、小職所管の「平原・梁瀬記念文庫（仮称）」の諸資料の整備及び資料目録の整備作業に従事していただいていたが、昨秋からも引き続き土曜日の半日を割いて遂行していただいた。わが国物流・ロジスティクスの発展を具体的に裏付ける貴重な諸資料であるだけに、小野寺君も大きな関心を抱いて取り組んでいた。本学学生として得難い人材であるだけに、こうした歴史的な背景を知りえる業務は、大変励みになったものと確信します。ありがとうございました。

（流通情報学部　吉村 章）

通情報学部で学んでいても、我が国における物流の発達、流通の歴史のみならず、その発展に寄与した人物の功績にじっくりと向き合っている学生は多くはないだろう。そんな中、今回の活動によって得た「故きを温ねて新しくを知る」経験は、彼にとって貴重だったに違いない。

今後、その知見を自分のものだけに留めず、ともに活動するゼミや学生会の仲間とも共有してもらいたい。切磋琢磨し、成長し合う中心的な存在となってくれることを期待している。

（流通情報学部　横井 のり枝）

活動テーマ　：　子供向けワークショップからファシリテーション技術を学ぶ

活動分野　：　インターンシップ・実践

実践者名　：　木間 大貴（流通情報学部 流通情報学科 2 年）

活 動 先　：　特定非営利活動法人 Collable　×　SCSK 株式会社　×　株式会社グッド・グリーフ

日程・場所　：

【2014 年 11 月 04 日】特定非営利活動法人 Collable の事務所にて事前打ち合わせ

場所：東京都文京区本郷

【2014 年 11 月 07 日】子供向けワークショップ「ピッケのつくる絵本」開催

場所：東京大学　福武ホール

【2014 年 01 月 04 日】特定非営利活動法人 Collable の事務所にて打ち合わせ

場所：東京都文京区本郷

【2015 年 01 月 30 日】活動計画書作成

【2015 年 02 月 16 日】活動報告書の作成

【2015 年 02 月 28 日】コーディネーターへ活動計画書・活動報告書提出

概　　要　：

特定非営利活動法人 Collable　×　SCSK 株式会社　×　株式会社グッド･グリーフが主催する、ハンディを持った子供とそうでない子供が一緒に活動するワークショップの運営サポートとして活動した。ワークショップの内容として、「 iPad（タブレット端末）端末内のアプリケーションソフトを活用し、誰にでも簡単に物語を創作することができる『ピッケの作る絵本』を利用して絵本をつくる」といったものである。

運営サポートで私の役割は、ファシリテーターであった。今回のワークショップでは、子供たちの能力を最大限に発揮できるように、指示をするのではなく、子供たちが自発的に行動できるサポートを行った。サポート内容としては、以下の 5 つである。

①プログラムの進行や会場全体の把握

②子供達の意見の橋渡し

③ワークショップの雰囲気作り

④子供達のクリエイティブな発想を最大限に引き出す

⑤会場内の安全管理

これらをファシリテーターとして、今回のワークショップ内で活動を行った。また、ワークショップ終了後に運営関係者とともに反省会を行い、子供達の製作過程の態度・言動から各々の意見等のブレインストーミングを行った。これにより、次回のワークショップでの子供達とのコンタクトのとり方を改めて考え、ファシリテーションの仕方・運営自体の質の向上を図った。

活動レポート　：

プログラム開始前に会場の設営を行った。子供達が安全にプログラム実施時に過ごせるような設営、ファシリテーターが子供達全員の状況を確認しやすく、物理的にも精神的にも近づけるようなスペースの設営を心がけた。（写真 1 枚目）

次に、団体との最終打ち合わせを行った。ここでは、プログラム実施内でのファシリテーターの

役割の再確認（Ⅰ活動内容で上げた 5 つのポイント）役割をこなす上での心構えを話し合った。心構えとして、必要なのは、子供が主役ということを忘れず、子供達一人一人と真剣に向き合い、子供達の小さな変化に気づき、小さなことでも言葉にして感動を伝えるというものであった。この心構えを把握したうえでプログラムに臨んだ。（写真 2 枚目）

実際にプログラムがスタートし、輪になり自己紹介の後、メインのファシリテーターによる【今日すること】の説明があり、子供達へのプログラム全体の見通しを立てていた。これにより、子供達のプログラムに対する安心感を与えている。ここでの子供達は、話をしている最中うるさくなってしまうのではないかと思っていたが、場を把握し、静かにしていたのにはとても驚いた。これは、活動するスペースが２カ所あり、3 枚目の写真の場では、主に発表などを行う場として使用し、場をわきまえる場所。もう一カ所は本を製作する場で、交流を図りつつ活動する場所。といったように活動スペースの差別化を行ったからではないかと感じた。（写真 3 枚目）

絵本製作の前に、２グループに分かれ、お話作りの練習を行った。物語の展開が簡単にできるように、お話カードというキーワードが書かれたものを使い、そのキーワードをつなげて物語を作った。ある子供は物語を考える上で「死ぬ」「地獄に落ちる」などのネガティブで汚い発言が多々見られた。子供達全員が明るい物語を作る必要があるため、そのような発言をした時には、ネガティブなワードを避け、ポジティブなワードを提示した。このような行動をしたことで、以後その子供からネガティブで汚い発言がなくなった。その言葉は使ってはダメだと自覚した心境の変化を感じた。（写真４枚目）

練習終了後、実際に制作の工程に移った。子供たちは、簡単に操作説明を受けたあと、物語を作り始めた。子供達の頭の中では既に物語が出来上がっているのか、あっという間に物語を完成させてしまっていた。（写真５枚目）　ファシリテーターに頼る子供はほとんどいなく、子供達同士、グループ内でコミュニケーションをとり、物語で使われる積み木などのアイテムなどの使い方などの、わからない問題を解決していた。本当に解決できない時には、自らファシリテーターのところに向かいアドバイスを受けている光景も見られた。ファシリテーターから差し伸べられた手で解決するのではなく、自己で問題を解決していたところはとても素晴らしかった。

ある子供に関しては、以前は通りがかりのファシリテーターの手をつかみ、わからないことの回答の要望をしていたことが多かったとのこと。その子供は数回にわたり、このワークショップに参加したことにより、問題解決をするうえでの行動変化があったのは、大きな成長を遂げたと捉えることができる。ファシリテーターが後方でサポートするという方法をとったが故の結果だと感じた。

プログラム開始時は、物理的にも精神的にも距離が子供達とあったが、プログラム終盤になるにつれ、子供達から寄ってきてくれて、会話をスムーズにできるようになり、関係がとても深まった。コンタクトがとりやすくなったことで、クリエイティブな発想を引き出しやすくなったり、子供達の小さな変化により気づきやすくなったりすることが多くなった。これは子供達が主体であること

を意識したファシリテーションの方法を心がけたからではないかと感じた。（写真５枚目）

プログラムの最後には、出来上がった作品を各子供達が、全員の前で発表した。どの子供達も大人では考えないような発想があり、私は終始感心をすると共に驚きを隠せなかった。（写真６枚目）

今回の参加した子供の人数は１１人で内３人は知覚障害のハンディを持っている子供であった。しかし、言われてみないとわからないほど、ハンディを感じさせなかった。私自身のワークショップの参加がすくないため、その子達の行動・心境の変化は確認ができなかったが、団体が言うにはワークショップを行うたびに行動・心境の変化があるとのこと。この変化を確認するため以後参加をしたいと考えている。また、ハンディを持っている子の中には、自分の胸をたたき続けたり、常に大きな声を出していたりする子供もいた。しかし、周囲の子供達は大して気にしていなかった。組織、グループでの活動内において、奇想天外な行動を起こす人物は避けられがちだが、今回のように彼らの行動を許容し、さらに初対面でありながらも自然に解けこみ、互いに良いコミュニケーションをとれているのなら、子供達の姿勢を見習うべきだと感じた。一方、我関せずと周囲に無関心であるとすれば、子供達に対するファシリテーションの方法を改めていくべきだとも考える。これらについては、今後のプログラムへの参加で紐解いていきたい。

今回の参加で子供達を主体とし、後方からのサポートを行うファシリテーションを行ったことによって、相手の心境や行動の変化を感じたり、クリエイティブな発想を埋めることなく最大限に引き出すことができたりと、前方からサポートするファシリテーションの方法では得られなかった結果が多く出てきた。そのため、今回の RKU 未来力チャレンジの活動は、今後の学内学外での活動や、将来の就職先においての柱となる活動になった。今回の活動で終わりにするのではなく、この得たスキルを発揮できる場所で日々磨き続け、今後最大に力を発揮できるように努力をしていく。

アドバイザーコメント：

なにげない清掃のボランティ活動から多くのことを学んだようですね。

地域の結びつきや地域の生活実態なども学習できたことでしょう。また、単に机上の考えだけでなく実際に身体を動かしたことは評価に値いします。個人のできる範囲から始めることは、重要なことです。この経験をもとに、地域への貢献方法、地域の結びつき、何が問題なのか、どうせればゴミを減らせるかなどまで考えられるようになるといいですね。

今後はこの経験を、学修への取り組み方法や学修目標などにも生かしてみてください。

（流通情報学部　関 宏幸）

活動テーマ　：　森林美化活動

活動分野　：　地域貢献

実践者名　：　木村 勇也（法学部 自治行政学科 2 年）

活 動 先　：　船橋木の子の会

日程・場所　：

活動場所は船橋市神保町にある、船橋木の子の森。

五回行ったのですが、日にちは覚えていません。

概　　要　：

活動内容として、森林にあるごみ拾いや色々な道具を使って行う腐敗した木の伐採、森に生息する生物の調査、花の観察などがある。私が担った役目は腐敗した木の伐採、ごみ拾い、花の観察だ。

活動レポート　：

私は 10 月の上旬から 11 月の下旬にかけて、ボランティア活動として森林整備を目的とするボランティア団体に参加した。

大学の授業で自然環境論という授業があり、その授業で森林というのは地球温暖化と関わりの深い温室効果ガスを吸収する役目があるということを学び、自然というものに興味があったので森林ボランティアに参加した。とは言ってもボランティア活動自体には興味がなく、特別奨学生としての課題なのでやるという感じだったし正直に言えば面倒なことだと思っていた。

私が参加したボランティア団体は、船橋木の子の森を活動場所として月 3 回活動している「船橋木の子の会」という団体であり、その森は車で約 15 分の場所に位置し、保育園に隣接している。規模はそれほど大きくなかったのだが、多くの種類の花が繁殖しており、100 を超える種類があると知った時は驚いた。活動した内容としては森林の清掃や道具を使って行う腐敗した木の伐採、生態系の調査などで、はしごを使い高くまで登るといったことや、チェーンソーを使ったりするなど、かなり危険な作業も含まれていたが、会員の方の協力のおかげでこういった作業にも少しではあるが参加できた。ボランティアには 5 回参加したが、ほとんどの活動を経験させてもらうことが出来たし、人数は多くないが優しい方が多く、最年少の私に対しても気さくに話しかけてくれた。活動は大体 14 時くらいに終了するのだが、とにかく疲れるというのが感想だ。しかし、疲れるとはいってもやりきったという満足感や充実感が含まれており、今まで経験したことがない達成感があった。活動をする前は面倒としか思っていなかった気持ちが、活動後に自分たちが綺麗にした森林を見たり、会員のひとから「ありがとう」とお礼の言葉を言われたりして、また参加したいという気持ちに変わっていた。

ボランティア活動を通して一人では出来ないような作業でも同じ目的意識を持った人たちが集まり団結すれば出来るようになる可能性が大いにあること、ボランティア活動に限ったことではないがどんなに小さなことでも何か行動を起こすことの大切さを学べた。行動を起こさなければ何も始まらないし何かの役に立つこともできない。行うことに意義があるのではないかとボランティアを通して考えるようになった。

改めて森林美化ボランティアに参加できて学んだこと、得たものがたくさんあった。この経験を活かし、今度の機会に人を相手にするようなボランティア活動に参加してみたい。

活動テーマ　：　里山を自分たちの手で守っていく

活動分野　：　地域貢献

実践者名　：　関 耕平（法学部 自治行政学科 2 年）

活 動 先　：　里山

日程・場所　：

10 月　公園整備

11 月　公園整備

12 月　餅つき大会

1 月　　蕎麦打ち体験

概　　要　：

三ツ堀公園で草むしりをしたり、木を刈ったりして公園の整備をしました。

私の役割は、切った木や草を運んだりする力仕事を率先して取り組みました。また、餅つき大会や蕎麦打ち体験の時には、子供たちが安全に楽しめるように見回りをしたり、会場の設営の手伝いをしました。

活動レポート　：

私は本大学の特別奨学生に選出され、日々の学習を今まで以上にますます積極的に取り組んだり、特別講義を履修することができるようになり、普通の人にはできない様々な貴重な経験をすることができました。

その中で今回は、夏休み前に出された、未来力チャレンジのボランティア活動についての報告をしていきます。

私がこのボランティア活動の課題に取り組む先として選んだのは、子供の時によくあそんでいた地元にある三ツ堀里山自然公園の自然を守っていく活動に主に取り組んでいるボランティア団体です。そのボランティア団体で初めて取り組んだ活動は、三ツ堀里山自然公園での草むしりなどの園内の整備でした。その活動ではたくさんの大人の方々が参加していました。主な活動は、子供たちがあそびやすいように草をかったり怪我をしないように邪魔な木を切ったりしました。このようなたくさんの人たちの支えがあり、子供たちの遊び場が守られていたのだと感じました。また整備以外にも、公園の野鳥や自然の話や色々とためになるお話を大人の方がしてくださり、さらに職業の話や様々な人生経験も話していただき、色々とためになるお話を大人の方がしてくださり、もとても興味深く面白く、そして為になりました。ですが、大人の方々と話していると私が今いかに平和に暮らしていてなまけているなと感じ、残りの大学生活でやるべきことを積極的にやらなければいけないなという気持ちになりました。

その他の活動としては、餅つき大会と蕎麦打ち体験のお手伝いをしました。この二つの行事にはおもに子供たちが参加していて私はその子供達が怪我をしないよう見回りをしたり、会場の設営をしたりしました。見回りの時に子供たちが楽しそうにしている姿を見るととても嬉しかったのと同時に、懐かしい気持ちになりました。普段の生活では、子供と関わる機会もないし、餅つきや蕎麦打ちもできないのでとても貴重な体験になりました。

このように私は三ツ堀里山自然公園を守っていくボランティア活動を通してとてもいろいろな

ことを経験し、学ぶことができました。中でも１番の収穫は、地元の大人の人達とより深く関わる事ができたことです。いろいろな事や経験をしている大人の人たちと話をすることができ、私は、考え方が変わったりして成長することができました。

未来力チャレンジの課題は終わってしまいますが、これからも課題としてではなく自らの意思でこのボランティア活動に参加していきたいと思います。

アドバイザーコメント：

関君の場合は、「RKU 未来力チャレンジ」で行なう活動の内容が極めて早い時期から決まっていたこと、また課題のためだけの一過性の活動ではなく、ボランティア団体に所属して活動するという形だったこと、さらに活動内容も地元密着型で手ごろなもののようだったので、安心して報告を待つことができました。報告書によれば、大学から与えられた課題をこなすということを離れて、今後とも長くボランティア活動を継続していけるきっかけにもなったようですし、たぶん市長さんと話をする機会があるとは想定していなかったと思いますから、地域の人たちとのかかわりという点でも、意外な形で思わぬ人間関係が生まれ人脈ができていくきっかけにもなりそうで、これから先もいろいろ予想外の収穫が得られるかもしれない予感もして、たいへん良い活動であったのではないかと思います。

今回のボランティア活動では、よく言われる「草の根の」地方自治への入り口を経験できたようにも思いますが、どうでしょうか。公務員にならなければ地域の役に立つことができない、あるいは自治行政学科で学んだことを生かせないというわけでもなくて、地域に貢献するにもいろいろな方法があるのだということも知ることができたのではないかと思います。公務員としてではなくても、地元のコミュニティでボランティア活動を長年続けていれば、いずれボランティア活動のリーダー、さらには地域のリーダーということにもなりそうです。公務員を希望するかどうかも含めて、今回の活動は、関君の将来の職業や仕事の選択に向けても何らかのきっかけを与えるものになったようでもありますから、この経験を是非生かしていってください。

今回の活動は、公園整備や環境保全以上の当初の予想を超えたさまざまな成果を、関君にもたらしたものと思います。これからもこの活動を続けていってほしいとも思いますが、「RKU 未来力チャレンジ」としては、とにかくひと区切りということですから、活動お疲れ様でした。

（法学部　信太 秀一）

活動テーマ　：　ベルマーク仕分け他

活動分野　：　社会福祉

実践者名　：　高野 聖（法学部 自治行政学科 2 年）

活 動 先　：　公益財団法人オイスカ

日程・場所　：

12 月 6 日　13:00-17:00

12 月 12 日　14:00-18:00

12 月 19 日　14:00-17:00

12 月 24 日　13:00-18:00

12 月 25 日　13:00-17:00

いずれもオイスカ本部事務所にて

概　　要　：

ベルマーク仕分け

ネガフィルムスキャン

講義公聴

活動レポート　：

ベルマークの仕分けは会社毎どころか、同じ会社でも複数の番号を使用している場合もあった。そのため会社別に分ければいいという単純な作業でない煩わしさを感じることになったと共に、なぜ番号を分けているのか疑問を感じた。後者に関しては仕分けているうちに、ロッテに関して確証は無いにせよ部門によって分けている可能性が浮かんだが、なぜそのように分けているのかは推測の域を出ていない。

ベルマークは往々にしてその面積が小さく、必然的に番号も小さくなる。目が疲れやすくなるため使うことは少ないが、眼鏡が必要なほど私の目が悪いため、番号毎に分ける作業も当然ながら、同一番号内で点数の集計をする作業において、かなりの労力を費やした。

ネガフィルムのスキャン作業はフィルムを機械に通して、画面を確認しながらスキャンしていくだけの作業であった。これはベルマークの仕分けのように細かい数字を確認する必要はなく、目に優しいと思いながら作業を続けていたが、本体と一体の画面の小ささと角度の悪さがあり、これはこれで労力を必要とした。それでもベルマークの仕分け作業と比べるといくらか負担は少ないように感じた。

スキャンを行っていると、当然にその細かい内容まではわからないものの、イベント時の写真が多く、様々な活動の一端を見ることができた。

お誘いを受け参加した樋泉克夫教授による講義は数回行われたうちの一回だったらしく、前後に関しての詳細はわからなかったが、毛沢東・鄧小平時代の中国の歴史の話と、エコノミストの『中国の終わり』というテーマに対し、中国は終わらない『領土拡張戦略　狙いはマラッカ海峡回避の欧州と中東への直結ルート』という答えで掲載した箇所を中心に講義をしていた。欧亜新大陸橋（連接南北・溝通中西（中国とその南に広がる広大な地域を連接し、中国とヨーロッパとを交流させる）を中心とした”夢の物流幹線”によってマラッカ・ジレンマを克服しようとしているというものだ

った。正直言って細かいことはよくわからなかったが、鉄道やパイプラインを引く（手助けをする？）ことで外国からの資源を確保し、アメリカ主導の対中国包囲網を避けようとするものらしい。

ベルマークの仕分け及びネガフィルムのスキャン両作業を行っているうちに「延々と単純作業を繰り返させることは拷問になり得る」という話の意味をなんとなくではあるが理解した。とは言え、対人コミュニケーションにかなり苦手意識を持っている私は、そちらと比較するまでもなく心理的負荷は少なく、やはりこういった一人でできる作業が向いていると実感した。

活動テーマ　：　野球による地域社会への貢献

活動分野　：　スポーツ地域貢献

実践者名　：　高橋 俊（法学部 自治行政学科 2 年）

活 動 先　：　墨田区野球連盟

日程・場所　：

12 月 14 日　野球連盟へ提案、話し合い

12 月 28 日　打ち合わせ

1 月 10 日　野球教室実施

概　　要　：

・企画発起人
　野球教室企画の提案、呼びかけ、野球連盟への協力の頼みこみ

・野球教室の主催者
　場所の確保、道具の調達

・野球教室指導者

活動レポート　：

今回の自主活動は自分にとって大きな財産になった。何より、幼少のころから好きでしている野球を使って地域に貢献できたのは、自信にもつながった。しかし、自分としては、収穫も大きかったが、課題も見つかる活動だった。まずは、何かをゼロから作り上げる経験がなかったことだ。野球というチームスポーツの中で多くの時間を過ごした自分にとって一人ですべての役割を担い何かするという経験はなく、今回とても戸惑った。今までは、集団の中の個として役割を担うことや、集団としてどういった方向性でやっていくかというものが決まっているのが、主であった。しかし、これから社会に出て行ったときに、今までのように集団のなかで、役割を担うこともあるだろうが、自分の評価を大きく高めるのは個としてゼロから何かを作り上げたときであると私は考える。したがって、今回の経験は大きかったとともに、これからもっと高めていかなければならない力であるなと感じさせられた。

また、今回の活動で人と人とのつながり、人脈の貴重さを強く感じた。今回の活動をするにあたって、様々な候補があったが、何をするにしても協力者が必要だったし、野球教室をすると決まったのも、中学校時代の恩師のつてで、掛け合っていただいたものであり、いざ野球教室の開催が決まった際もこのような、ボランティアの活動に協力し指導者をかってでてくれたのも、小、中学時代の仲間であった。このような協力があって今回の活動は成功することができ、強く人脈の大切さを感じることができた。

しかし、今回のように様々な協力者がいるような仕事を自分が仕切らなければならない中で、自分の器量のなさを痛感するとともに、このポジションの重要性を感じることもできた。やはり、多くの人が関わる仕事は全員の役割が明確でなければならないし、それを全員で共有していないと、うまく連携するのは難しいだろう。それは何より指揮を執る人の力が試される点である。今回の活動は正にそうだった。自分の力が足りず、全員の意思を共有することができなくて、手間取ってしまう場面があった。これは、もっと準備する時間が必要だっただろうし、当日ももっと周囲に目を

配り連携を図る必要があった。これを経験でき肌で感じることができたのは貴重な時間だったし、これからの課題でもあるなと感じた。
このように、今回の活動は、収穫や課題が多く見つかったものであった。この貴重な経験を生かして、自分という人間をもう一回りも二回りも大きくすることができると思うし、そうしなければいけないと思うほど様々な刺激の詰まった活動にすることができたと思っている。

アドバイザーコメント：
活動内容が決まるまでには、若干の紆余曲折がありましたが、結果的に、高橋君のもっている技能や興味、さらには以前から培ってきた人脈などを最も生かすことができるテーマに落ち着いたことが、活動の成果云々よりも、まずよかったように思います。短時間に多くの協力者を得て活動本体の実施に漕ぎ付けられたことは、高橋君のこれまでの人生における良好な人間関係、その基となる高橋君本人の人柄をも推察させるものであると思います。
活動から得られた成果や感想も、読んでいて納得のいくものでした。今回の活動は、将来に向けて、就職活動などについても、一つの経験として役に立つものになったと思います。
ただ、報告書には、あまり野球教室当日の具体的な状況が記されていないのが、やや物足りない印象があります。もっとも、これは、高橋君にとって野球そのものは最も得意とするところでしょうから、当日の技術指導よりも、そこに至る準備の方が苦労が多かったことを示しているのかもしれません。
高橋君自身にもそうした認識があるようですし、その意味でも今回の活動は有意義なものであったように思われます。お疲れ様でした。

（法学部　信太 秀一

活動テーマ　：　龍ヶ崎市で市役所を通して無料塾を開講する

活動分野　：　起業・チャレンジ

実践者名　：　山口　晋太郎（法学部　自治行政学科 2 年）

活 動 先　：

日程・場所　：

12 月上旬　龍流連携の過去の活動を調べ、市役所に提出する企画書作成

12 月中旬　龍ヶ崎市役所に企画書提出

12 月下旬　企画書提出市議会議員と打ち合わせ

2 月中旬　NPO の活動見学。

概　　要　：

・市議会議員の方と連絡を取り、自分たちが「無料塾を開講したい」ということを伝え、今後の流れについてのアドバイスをもらった

・龍流連携の過去の活動や他の地域の無料塾の活動について調べた

・企画書を作成し、市役所の企画課とその企画書をもとに打ち合わせ(山口)

・市議会議員の方との打ち合わせで企画書の修正案をもらい、今後の流れについて再確認

・企画書を修正し、無料塾の生徒募集要項を作成(早川)、その後提出
　※教育委員会と中学校との日程調整が出来なかったため、企画実施出来ず

・市議会議員の方と似たような活動を行っている NPO の見学

活動レポート　：

龍ヶ崎市に、塾に通いたいけど通えないという小中学生向けの無料塾を開講したいと考え、市議会議員の方に協力していただき、市役所と交渉していった。あと一歩のところで、企画の実行は出来なかった。しかし、このままでは終われないと思い、実際に似たような活動を行っている NPO の見学をさせていただいた。以下、取り組みについて具体的に書く。

まず、なぜ未来力チャレンジのテーマをこれにしたかと言うと、アルバイトで塾の講師をしていて、勉強の格差が広がっていると感じ、ボランティアで少しでも勉学の支援をすることが出来れば良いなと考えたためである。そんな中、市議会議員の方から、他の地域では貧困層を対象にした無料塾があるところが増えていて、龍ヶ崎市でもその制度を取り入れたいと市役所の方でも考えていると聞いた。そこで、その制度を作りたいと考え、実際に進めていくことにした。

では、その実行した流れであるが、最初に企画書を作成し、市役所の企画課の方との意見交換をした。そこでは、企画書の案を煮詰めていき、対象を誰にするか等の内容を具体化していった。年末にさしかかり、忙しい時期にも関わらず、積極的に協力してくれた。しかし、教育委員会とも、掛け合ってくださったが、日程調整が上手くいかず、実行が出来なかった。

その後、似たような活動をしている NPO があると聞き、その NPO の活動を見学した。そこでは、1 時間程の短い時間だったが、たくさんのことを学ぶことが出来た。自分たちの考えていた貧困層のイメージとはかけ離れていて、事態は過酷なものだった。考えの甘さを痛感した。NPO の代表者の方と会談をして多くのことを考えさせられた。また、貧困層を対象とした無料塾の開講の仕方の注意点等のアドバイスをいただいた。考えさせられたことの一例をあげると、人権のあり方、福祉に

ついて、各人にとっての普通とは何か等である。具体的に述べると、人権は、誰かが一人でも侵害されてはいけない。むしろその一人に焦点を向けていくことが大切である。福祉とは、無限に続く、すなわち、エンドレスであること。自分たちが何をするかよりも、自分たちが支援しないことは何かを考え、そこの一線は超えないことを決めておくことが必要であると分かった。各人の普通とは、育った環境に左右されるので一概に人を否定してはいけないと改めて感じた。話の中の具体例にも出てきたことを述べる。これからは、ボロボロの服を着た子供が目の前にいた時、汚いやこの子の親は何しているのだと冷たい視線をするのではなく、もしかしたら貧困なのかもしれない。もしかしたらこれが何らかの事情でこの子にとっての普通なのかもしれないと優しい視線をするように視点や考え方をシフトしていこうと考えさせられた。このようなことも知らずに、無料塾を実行しようと考えていた自分を未熟に感じた。

貧困層には、あらゆる問題や課題がたくさんあり、ただ単に勉強を教えようとしているだけでは実現できないことが現実と分からされた。このレポートには、書いても書ききれないほどの多くのことを学ぶことが出来た。

まとめると、未来力チャレンジとしてあげたテーマである龍ヶ崎市にも貧困層を対象にした無料塾を開講することは実現できなかったが、市と協力して何かを実現させていくことは出来なくないと感じ、できることなら、NPO 見学で学んだことをいかして、実現させることが出来たら良いなと考えている。地方公務員になって、このような自治問題も解決したいと思う。

活動テーマ　：　障害を理解するってどんなこと？

活動分野　：　社会福祉

実践者名　：　横塚 大河（法学部 自治行政学科 2 年）

活 動 先　：　鎌ヶ谷市総合福祉センター

日程・場所　：

2 月 10 日火曜日に鎌ヶ谷市役所内の総合福祉保健センターの６階で、行いました。

概　　要　：

今回は、ボランティア活動スキルアップ公開講座ということで、第一部では、講師方から、障害者差別に関する条例についてまた、障害者差別の定義、障害のある方のサポートの仕方等を学びました。

第二部では、レクリエーションを高齢者の方と行いました。ビンゴ、ラフターヨガ等を行いました。私は、ここでビンゴの番号を引いて発表、書き出す作業等を行いました。

活動レポート　：

まず、何かの催しを設営から参加し行ったのは、初めての経験で、終わった時の達成感はとても気持ち良かったです。

前述したとおり、第一部では、障害者虐待防止法、障害者差別の禁止の条例、障害者サポートのポイントについて、学びました。

まずは、虐待防止法について……この法律により、平成２４年１０月から、虐待を発見した場合の通報義務を定めたり、虐待を受けた人の保護や家族の負担の軽減、虐待防止等をはかるための法律です。

次に、条例について……正式には、障害のある人もない人も共に暮らしやすい千葉県づくり条例というのですが、平成１９年に施行されたもので、障害者差別の法律の中で、一番最初に制定されたものです。この条例の特徴は、地域住民が声を上げ、考え、作り上げたものであること。罰する・取り締まる・指導することはしない点。障害に対する理解を広げることが目的である点。話し合いを通じた解決が基本である点。制度や習慣を変えていく取り組みや、頑張っている人を応援する仕組みを提案する点が特徴です。また、差別の定義は、福祉、医療、商品サービスの提供、雇用、建物・公共交通機関、不動産の取引などの８分野における障害を理由とした「不当な取り扱い」を具体的に定義。例を挙げると、本人の承諾なしに勝手に家族が施設入居の手続きをした場合、店が狭いので、車いすの対応ができないという場合、普通学校に入学したいのに、希望をきいてくれない場合、会議に点字資料が用意されてない場合やエレベーター、またはスロープがない場合です。しかし、自閉症の子がクラシックコンサートで、行き慣れない環境にパニックを起こし大声を出してしまい、係員に「外でしばらく休んでください」と言われた場合は、クラシックコンサートは、静かな環境で音楽を聴くという共通の目的があるので、ここで大声を出せば、障害の有る無しにかかわらず迷惑なので、この退場処分は差別に該当しません。

最後に、障害もある人へのサポートについて……障害を持った方がどんなに困っている時でも、いきなり体を触られたり、手を引っ張られたりしたら誰でも驚きます。「お手伝いしましょうか？」などとまずは声をかける。障害の有る人は特別な人ではありません。同情したり子供扱いしたり、

へりくだって接するなど、特別扱いや言葉遣いは不要です。対等な立場で、同じ目線で接するようにしましょう。コミュニケーション方法もそれぞれで、手話や点字などは障害のある方にとって、大切なコミュニケーション方法ですが、誰でも使えるわけではないので、その人に応じたコミュニケーションをとる。

次に第２部では、高齢者の方々とレクリエーションを行いました。ビンゴ、ラフターヨガというものを行いました。ビンゴでは、番号を引く、発表をする係り行いました。ラフターヨガとは、笑いながら、軽い踊りを踊ります。人の脳は嘘で笑うのと本当に笑っているのを区別できないので、それを利用して、健康を促進させるものです。

以上が私のＲＫＵ未来力チャレンジの活動です。

活動テーマ　：　東北復興活動

活動分野　：　災害復興支援

実践者名　：　野口 佑太（法学部 自治行政学科 2 年）

活 動 先　：　アイミファクト株式会社

日程・場所　：

10 月 24 日　22:30　東京駅出発

10 月 25 日

6:00　宮城県山元町着

6:30～7:45　ボランティアガイドによる山元町についての語り部ツアー
　　　　　　場所：山元町駅、山元小学校など

8:00～11:00　午前ボランティア活動（泥かき）
　　　　　　場所：山元町いちご団地ハウスの直売所

11:00～12:00　昼食

12:00～15:00　午後ボランティア活動（午前の部の続き）

15:30　宮城県山元町　出発

16:30　夕食

23:00　東京駅着

概　　要　：

宮城県山元町での震災復興ボランティア活動に参加した。

ボランティア活動に先立って、まず「ボランティアガイドによる山元町についての語り部ツアー」という企画があり、町内の鉄道駅や小学校などの廃墟をまわって震災時の避難をめぐる話を聞くなどして、大震災に関する見聞を深めた。詳細については後で述べたい。

次にボランティア活動を行うためにとある苺農園の直売所に移動した。しかし、建物自体は津波で流されていたので、広い土地だけが残っている状態だった。私に割り当てられた役割はその直売所の用水路の泥かきだった。用水路に大量の雑草が生えていたので、それごと掘り返す作業から始まった。震災後から全く手つけておらず、泥を掘り返すには相当な体力を要した。また、作業の途中で大きな電柱が埋まっており、急遽全員で、掘り返すことになった。その電柱は長さ約３メートルもあり、これが津波で流されてきたことと、３年半もの間ずっと土に埋まっていたことは、津波の怖さと復興の遅れを感じた。そこから、昼休憩を挟んで、ずっと泥かきをしてボランティア活動が終了した。

活動レポート　：

この体験を通じて一番印象に残ったことは震災から３年半も経っているのにいまだに泥かきをしたことだった。私は復興が今停滞している理由として、時間が経ってできることが少なくなってきているからではなく、震災に対して関心が薄くなってきているからだと感じた。震災直後はボランティア活動をしてくれる方でいっぱいだったが、時間とともにその数は減少してしまうものだ。それを食い止め、復興の手伝いをしてくれる人を増やすためには、震災のことをもっと知ってもらう必要がある。しかし、ただ知ってもらうだけでは意味がないので、行動を促すまでの努力が必要だ。

そのためには語ることができる震災についての話があると効果的だと分かった。そのような話として今回のバスツアーで語り部の方が語ったことは、さまざまある。

津波の被害として、教習所で訓練していて、逃げ遅れた生徒が教習所に対して裁判を起こしていて、未だに決着がついていないということ、墓地全体が全て流され何も残っていないことなどがある。また、その墓地の隣に明治１９年に津波が来た際につくられた津波の状況を記した石碑が皮肉にも流されていた。私は被害の深刻さを目の当たりにしたことを多くの人々に伝えなければならない。また、実際に被災された土地に足を運んで行ってほしいと思う。

その後バスで別の場所に移動しながら、ガイドの方は語った。町のルールを決めるにしても、農業の方や漁業の方で生活が異なるため、統一したルールを作るのが難しいから復興が遅れていることや、東京オリンピックが決まって復興のために使える重機やトラックの数が少なくなってしまっていることなどを語った。震災当時は多くの人が復興の手伝いをしてくれたが、時間の経過につれ忘れてしまうものだと実感した。東京オリンピックは喜ばしいことだか、一方で、それに反対している人の声を間近で聞くことができてとても勉強になった。

ボランティア活動はやはり続けていかないと自己満足で終わってしまう。我々にはまだ復興を手伝える余地がありそのことを知らなければならない。また、行政的な面では、東京オリンピックとの兼ね合いで復興が遅れている。地方の復興よりも優先してまで開催することに意味があるとは思えないし、こういった状況でうまくいくとも考えられない。世界に目を向けて行動することも必要であるが、日本を活性化させるためにはもっと足元から見直していく必要がある。今回このような体験ができてとても勉強になった。

アドバイザーコメント ：

本報告書の記載内容のほとんどは、山元町の語り部ツアーで見聞したことやそこで野口君が考えたことで占められています。被災の現実を目の前にして語り部ボランティアの人から聞いた話によって野口君が受けたインパクトがひしひしと伝わってきました。この点だけでも被災地まで出かけて行ったことは意義があったのだと思えました。大震災の被害の悲惨さは、被災した現地に行って初めて実感できるものでしょうし、津波避難の教訓を学び、復興の現状や東京オリンピックにもかかわる課題まで知ったこと、さらには語り部ボランティア活動の力や必要性にまで思いが及んだの

は、大きな成果であったと思います。
　とはいえ、この活動で野口君にとって最も有意義だったのは、ボランティアの旅行プランを選択するところから、保険の手続きをして、実際にボランティア活動を行なって無事帰って来るまで、すべてを自分一人で行なったことではないでしょうか。
　ボランティア活動への参加、夜行バスでの遠出、いずれも一人で初めて経験するのは、それなりに緊張感があったと思います。大学在学中であってもこれから先、就職活動などもそうでしょうが、大人の社会に足を踏み入れようとすると、勉強以外のことで、一人で決めて一人で実行しなければならない局面に次々と立たされることになるでしょう。今回の活動は、そのときに備えての貴重な模擬実験の機会になったのではないかと思います。このような意味で、本活動は、ＲＫＵ未来力チャレンジの企画意図に沿った活動で、この点でも多くの収穫があったものと評価できます。ほんの少しだけ社会への扉を開けたにすぎませんが、この経験は、かならず将来に繋がっていくものと思います

（法学部　信太 秀一）

活動テーマ　：　新松戸光のフェスタに関するイルミネーションの作成・及びその点灯

活動分野　：　地域貢献

実践者名　：　平賀　勝也（法学部　自治行政学科 2 年）

活 動 先　：　流通経済大学新松戸キャンパス

日程・場所　：

■活動日程　11 月 7 日～21 日まで

（うち 7、10、11 日は学務課との打ち合わせ及びイルミネーション作成に必要な材料の買い出し。作成を開始したのは 12 日からである）

■活動場所　流通経済大学新松戸キャンパス

概　　要　：

11 月 22 日に流通経済大学新松戸キャンパスで開催される新松戸光のフェスタにおける大学のイルミネーションの作成が主な活動内容である。私の役割は大学イルミネーションの作成の総指揮及びデザインの考案である。私の担当場所は大学外の階段付近の木、丸善前の木、及び就職支援センター前の植え込みの装飾である。この大学外のイルミネーションは例年であれば新松戸キャンパスの学務課が担当しているものになるのだが、今回学務課に交渉しに行ったところ、当イルミネーションの作成をすべてこちらに一任してくれる事となった。したがって、所属している学生会より人員を選抜し、１－３年生から各３名ほど協力を要請し、承諾を得たため、自分を含めた約１０名で活動を行った

活動レポート　：

今回活動を行うにあたって、当初はボランティア活動を考えていたが、自己のスケジュール調整が上手くいかないこともあり、身近で何かないか模索していたところで、自己の学生会の活動に目を付けた。レポートのはじめに誤解が無いように述べておくが、今回の活動は学務課から依頼されて行った活動ではなく、自らの意志で活動したことを述べておく。

今回のイルミネーションの作成にあたって私が身に付けようとしたのは、伝えたいことを簡潔にまとめて話すことと、作業を効率的に進めるために人員の配置を工夫することである。リーダーの立場となって活動する機会というのがあまりない私にとって以上二つの能力を身に付けることによって自己の能力をより高めることができると考えたからである。

活動を行うに当たっては学務課に昨年度まではどのように作成したのか、何名ほどで行ったのかなど、本活動を行うのに必要な情報を逐一確認したり、予算など様々なことを確認するための打ち合わせをはじめに行った。実際に作業を始めたのは完成予定日の１０日ほど前であった。作業の前半は丸善前の木に装飾するためのイルミネーションを作成し、それが完成したのが作業終了の約１週間前。外の作業に取り掛かったのはそれからなので当初の作業工程からすれば遅れていた。しかしそこで作業をする人全員で自分の得意不得意分野を確認し、作業を効率よく進められるようにそれぞれの配置を考えた。外での作業はその日の天候によって左右されてしまうので、できる日に集中して作業を進めたのでどうにか完成日の前日に作業を終えることができた。

私が身に着けようとした二つの能力よりも様々なことが身についたと思った。活動を行っていて、当初の予定通りに進まないことは考えていたが、作業中に様々な不測の事態が多く発生した。この

ようなイレギュラーな事態への対応方法や作業を早く終えた際の次の指示の方法など、私が当初身に付けようとして考えていたことよりも、多くのことが身についたと考える。無論、作業中は考えを簡潔に伝えるようにしたり、用事などで作業に参加できない人の穴埋めなど自分が身に付けたかったことを身に付けられる機会が多くあったので、当初の目的は達成できたと思う。
リーダーとはただみんなの前に立って指示をしているだけの楽な仕事であると考えていたが、その考えは非常に浅はかであった。ただ指示をするだけでなく、作業等が円滑に進むように様々なことを考え、不測の事態にも柔軟に対応する。リーダーというのは目につかないようなところでも苦労を抱え、全体を見据えていると考えた。普段人の前に立って何かをする機会がない私にとって、今回の活動は非常に有意義なものであった。今回の活動をうけて、活動で身に付けた能力を発揮できるように機会があれば率先してリーダーに志願したいと思った。今回の活動で身についた能力は今後様々な場面において役に立つと思うので、多くに機会で使っていきたいと思う。

アドバイザーコメント：
活動内容を決める際には、他の先生から RKU 未来力チャレンジの活動に相応しい内容なのかどうか疑問も出されていたので、その点でやや不安もありましたが、結果的には、活動期間や活動条件などに鑑みれば、成功して終了するには、平賀君の選んだ活動は、ちょうど適当な規模だったように思います。
活動から学びえたことについては、新しい人間関係の積極的な開拓というような要素はあまりなかったように思われ、その意味では、確かに高校の文化祭の活動の延長線上にあるともいえないわけではありませんが、それでも、複数の人たちのリーダー格として一つのプロジェクトを完成させるというのは、誰にどのような仕事をしてもらえばプロジェクト全体がうまくいくか、さらに欲を言えば、どうすれば皆に仕事を気持ちよくやってもらえるかという意味での人事管理をはじめ、日程管理や経費管理、作業手順の効率化、不測の事態への対応など、また責任を負うことへのプレッ

シャーまで、平賀君ご自身も書いておられるように、今後役に立ついろいろな経験をされたことだろうと思います。その意味では、やはりとても有意義な活動であったと評価いたします。そして、たいへんなことも多かったと思います。お疲れ様でした。

ついでに一点付け加えさせてもらいますと、今回の活動ではリーダーとして仕事をするにはどのような資質や能力が必要かを、実際の経験からいろいろ考えることもできたようですが、今回の活動よりもはるかに大きく、また複雑なプロジェクトを組織として遂行する場合、役所や会社の仕事といってもよいでしょうが、そうした場合は、自分がリーダーでなくても、ただリーダーに指示されたことを指示された通りにやるのではなく、自分自身もプロジェクトの全体像を理解した上で、リーダーに助言するなど最適と思われる行動を、自分の頭で考えて取るべきときもあるように思います。ですから、リーダーとして活動するのでなくても、今回の経験は役に立ちますし、是非そうしてもらいたいと思います。また、リーダーとして活動する場合は、そうした人の話をちゃんと聞ける人であってほしいと思います。今回の活動で一緒に作業をしてくれた人たちの中に、そうした人はいませんでしたか？

（法学部　信太 秀一）

活動テーマ ： 小学生のサポート

活動分野 ： 地域貢献

実践者名 ： 内山 結衣（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2 年）

活 動 先 ： 茨城県龍ケ崎市立長山小学校

日程・場所 ：

11 月 13 日打ち合わせ

11 月 20 日から 2 月 28 日の木曜、金曜（計 12 日、21 時間）

・木曜： 13:00～14:00

・金曜： 13:00～15:00

概　　要 ：

以下の 3 つの時間帯において児童の活動のサポートを行った。

1. 掃除の時間
   廊下の掃き掃除、教室の雑巾がけ
2. 昼休み
   サッカー、縄跳び、鬼ごっこ、メダカ釣り などを校庭にて
   お絵かき、ピアノ、計算・漢字ドリルの手伝い などを教室にて
3. 授業時間
   国語 よみきかせ、テストのマル付け、文づくり
   算数 問題のヒント出し

活動レポート ：

今回のボランティアを通してさまざまなことを学んだ。

1 つ目は、子供たちとたくさん関わることの大切さについてである。昼休みに子供たちと一緒に遊び、コミュニケーションをとることで、一人ひとりの性格や個性を理解した。うまく友達とやっていけているのかという生徒間の関係も見ることができた。

また、信頼関係も築くことができて、一緒に遊ぶことの必要性と大切さを学んだ。

昼休みだけでなく授業中も、一人ひとりの様子や活動をしっかり見て、そして、全員の顔を見ることで、話をきちんと聞いているのか、しっかり活動しているのか、困っている子はいないか把握することができた。それぞれの様子や個性に合わせた指導や言葉かけをした方が良いことがわかった。

教師にとって、子供たちと過ごす時間はとても大切であることを学んだ。

2 つ目は、授業の進め方についてである。まず、気をつけなければいけないことは、声は大きく、丁寧に、ゆっくりと、そして、指示は何度か繰り返し言うことが大切だ。そして、教師は子供たちに、一方的に知識を教えていくのでなく、質問を投げかけながら、一緒に考えていくことが大切だとわかった。算数などの解が決められているものは、ヒントを与えるなどして、工夫することができた。何事も理解できているかきちんと確認しながら行い、できていない子には昼休みに個別で付き添って教えてあげるなど一人ひとり違った指導をする必要があることを学んだ。そうすることで、次の授業に他のみんなと同じスタートラインに立つことができ、また子供は頑張ってみようと思う

はずだ。教師は常に一人ひとりの面倒をみることが大切なのである。また、授業は先生と生徒という関係だけでなく、生徒と生徒という関係も大切であり、グループごとの作業を行い、コミュニケーションをとる機会を設けることも重要だ。子供たちに満足して楽しんでもらえる授業づくりを目指していきたい。

今回のボランティアで、学校の雰囲気を間近で見て、教師の仕事を詳しく学ばなければならないという気持ちになった。今までは、ただ教師になれたらいいなと思っていて深くはあまり考えたことなかったが、実際に教育現場を見て生半可な気持ちでは無理だと思った。教師とボランティアの立場は違うけれど、子供たちとの関わり方や授業の進め方、指導の仕方など本当にたくさんのことを学ぶことができた。どれも、大学では学ぶことができない貴重なことで、とても良い経験だった。

アドバイザーコメント：
活動計画、準備、実践、振り返りすべてにおいてもう少し主体的に取り組むことをが求められる。

（スポーツ健康科学部　武田 大輔）

活動テーマ　:　地域の方々が未来の自分の身体にワクワクしながらセルフコンディショニングを行う環境をつくる

活動分野　:　スポーツ地域貢献

実践者名　:　荘司 将徳（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2年）

活動先　:　ＮＰＯ法人クラブドラゴンズ

日程・場所　:

2014年4月・9月…ＦＭＳ測定

～　2015年2月末…月3回パーソナルトレーニング

2月末…現状把握アンケート実施①→分析

3月…第1回測定（ショルダーモビリティ、アクティブハムストリングス）

ＦＭＳ改善エクササイズ①（ショルダーモビリティ、アクティブハムストリングス）

3月22日…第2回測定

アンケート実施②（改善エクササイズを行っての感想）

4月～…ＦＭＳ改善エクササイズ②（プッシュアップ、ロータリースタビリティ）

以降ＦＭＳ改善または水中運動やヨガ（多くの要望や興味があったため）

概　　要　:

ＮＰＯパーソナルトレーニングに入会してくれた方は初回にＦＭＳ測定（身体の機能評価）を行う。

その結果や本人の要望（シェイプアップ、肩こりなど）をふまえて月３回（第 2～4 日曜日）1対1で運動処方を行う。

今回は今まで行ってきた運動がどれだけ日常生活に活きているか、これからやってみたい運動などをアンケートにより調査した。アンケート結果により『体幹トレーニング』や『ストレッチ』などを継続して行っている人が多かった。このことから身近にできるエクササイズを継続していることが分かった。

それをもとに、今後は身近でできるエクササイズで身体の機能改善をして変化を与えていきたいと感じた。そのために自分が学んでいるFMSの改善エクササイズを行う。3月のパーソナルトレーニングの時間で測定『ショルダーモビリティ』（肩の可動域）、『アクティブハムストリングス』（下肢後面の柔軟性）の二つを測定し、改善エクササイズを実施して3月22日に再測定をしてどれだけ改善したのかを調査する。

今後（4月以降）はFMSの他のテストについても測定→改善エクササイズ→再測定を年間を通してできるような働きかけを行い、1年を通じて身体の変化をさらに感じてもらう。また、アンケート結果の「今後行ってみたい運動」で『水中運動』や『ヨガ』などの意見も多くあったのでその運動を新しく始める上でケガをしないような肩の機能改善や柔軟性改善などを行ったうえでチャレンジできるようにしていく。

活動レポート　:

2月22日に実施したアンケート調査の結果から、パーソナルトレーニングに参加してくれている方の日常生活における運動定着の現状を把握することができた。

項目	割合
体幹トレーニング	32%
セルフマッサージ	20%
ストレッチ	20%
その他	28%

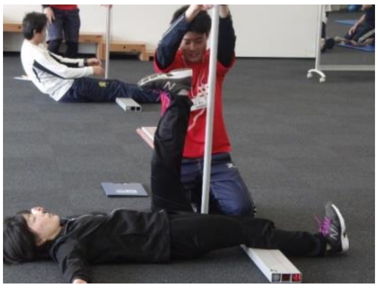
表1

表1より『体幹トレーニング』『セルフマッサージ』『ストレッチ』など手軽にできるエクササイズが多かった。この結果より、このパーソナルトレーニングを通じて、身近に行えるエクササイズは継続して行っていることが分かった。このことから以前よりも自分の身体について向き合う回数が増え、変化を感じてもうらことや、身体の変化に敏感に感じてもらうことが多くなったと考える。また、身体を変えようとする意識はアスリートと変わらないと感じた。

以前測定したFMSの結果に基づき、特に左右差や点数の低さがある「ショルダーモビリティ」「アクティブハムストリングス」の改善エクササイズを行うことにより、もっとパーソナルトレーニングに参加していただいている方に自分の身体を知ってもらい、将来の自分の身体をデザインしてもらえるようなきっかけになればいいと考える。

そのために自分たちトレーナーがその人を評価し専門的にエクササイズを提供するべきだとあらためて感じた。

アンケート結果により、パーソナルトレーニングに参加していただいている方の健康や運動に対する意識の高さ、特に有酸素系のエクササイズへの興味もみられた（水中運動やダンスエクササイズなど）今後は年間を通じてこのようなエクササイズもパーソナルトレーニングに組み込めるような仕掛けも行っていきたい。そのような新たなエクササイズを行う前に今一度その運動に必要な身体の機能（例：水中運動⇒肩の可動域・柔軟性など）を改善するエクササイズをケガを予防するためにパーソナルトレーニングの時間で行うこともトレーナーとして必要なことだと感じた。それを行ったうえでどんどん興味のある運動に積極的に参加してくれるようにパーソナルに参加していただいている方々がなってほしいと思った。



アドバイザーコメント：

将来の夢につながる企画である。

また健康な身体へ導くための仕組みとトレーニング方法を勉強し、それを実際に地域の方々へ実践する。健康に対する意識が高まり、その重要性認識されてきている昨今。スポーツ健康科学部の学生が、学問として学んだことを、社会貢献として実践できる企画である。

実際の活動はこれからの部分が多いが、3月の発表までに積極的に取り組んで、効果も期待したい。

（スポーツ健康科学部　小粥 智浩）

活動テーマ　：　ミニバスケットボールのボランティア

活動分野　：　スポーツ地域貢献

実践者名　：　田畑 高志（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2 年）

活 動 先　：　MATSUBA ミニバスケットボールクラブ

日程・場所　：

活動期間は、10 月の後半～現在までで、練習日は、月・水・金・土曜日である。練習時間は、月・水・金曜日は、17 時～19 時までで、土曜日は、15 時～18 時までである。日曜日には、不定期で大会や練習試合などが入る。練習場所は、月・水・土曜日が龍ヶ崎市立松葉小学校、金曜日が龍ヶ崎市立長山小学校で行っている。

概　　要　：

龍ヶ崎市内にある MATSUBA ミニバスケットボールクラブ（女子）にコーチの一人として活動していた。主に、低学年の子供やミニバスに入ったばかりの子供の指導をしていた。指導相手が低学年の際は、体を動かすことやバスケットを楽しいと思ってもらい、高学年なってもバスケットを続けてもらえるように練習メニューなどを工夫した。（低学年は基礎練習がメインとなり、つまらないと思う子供が少なくないため、基礎練習と基礎練習の合間に少し遊びをしたり、基礎練習の中に遊びを取り入れたりして、子供たちのバスケットに対する意欲の向上を図った。）

また、市対抗の大会に参加するために、龍ヶ崎市内の 4 つのスポーツ少年団のミニバスケットボールクラブの 6 年生が集まり、作られたチームのコーチの 1 人として活動した。そこでは、子供たちの指導だけではなく、練習場所の確保などの運営面も行った。

活動レポート　：

私は、RKU 未来力チャレンジで龍ヶ崎市内にある MATSUBA ミニバスケットボールクラブ（女子）のコーチとして活動した。以前から、指導することに興味があり、機会があればやってみたいと常々思っていた。そのような中で、今回の RKU 未来力チャレンジの話があり、せっかくならバスケを指導したいということで、MATSUBA ミニバスケットボールクラブのコーチになった。子供たちを指導していて、最初に感じたことは、まとめることの大変さだ。MATSUBA ミニバスケットボールクラブには私を含めコーチが 3 人いるため、私は主に低学年やミニバスに入ったばかりの子を指導している。さらに、女子のチームではあるが 4 人の男の子もいる。特に、低学年の子供たちは、まったくと言っていいほど言うことを聞かない。誰が先頭をやるのかなどのことでケンカがよく起こる。最初は、このことで頭をかかえ、子供たちをまとめることの難しさ・大変さに気付いた。しかし、ほかの指導者がどのようにしているのかなどを見たり、聞いたりして、まだまだの部分もあるが、今では、自分なりに子供たちをまとめることができるようになった。また、子供たちが自分の指導したことをなかなかやろうとしないことがあった。最初は、なぜやろうとしないのかわからず、イライラすることもあった。しかし、途中で、子供たちはなぜそのようにしなければならないかわかっていないということに気付いた。私たち大人にとっては当たり前だと思っていることでも子供たちにとっては初めての体験である場合がある。そのため、なぜこのようにするのかを指導して子供たちに理解させる必要があると思った。さらに、ただ教えるだけではだめだということも感じた。なぜ、そのようにしなければならないかを子供たち自身に考えさせる必要があると感じた。常に、な

んでも教えていては、子供たちの考える力は成長しない。指導者は、なぜ、そのようにしなければならないかを子供たちに考えさせ、正しい方向に導かせなければならないと感じた。

私が、コーチになって4ヵ月と少したったときに5年生以下の新人戦があった。その日は、たまたま、2人のコーチが指導者講習会にいっていたため、私1人が子供たちの指導にあたった。その大会で、子供たちを指導することの大変さを学んだと同時に、私たちのチームが初めて準優勝し、子供たちが素直に喜んでいるのをみて指導することの楽しさも学んだ。いつもは、少し生意気な子供たちだが、喜んでいるのを見て、自分もうれしい気持ちになった。そして、私も頑張ろうという気持ちになった。

未来力チャレンジの活動はすでに終わったが、私は、これからもMATSUBAミニバスケットボールクラブのコーチという活動を続けていきたい。指導者としてはまだまだ未熟なため、多くの体験をして、立派な指導者になるためにこれからも精進していきたい。

アドバイザーコメント：

地域スポーツを活性化させていく上で、保護者を巻き込めるという点も含めて小学生段階の子どもたちは極めて重要な対象である。特に低学年段階は学校内のクラブ活動等もなく、スポーツに触れる機会が存外少ないものである。そのような対象を扱うスポーツ少年団において指導経験を得たというのは非常に貴重なものである。さらに、そのような年齢段階の児童は、大人の言語指示について行間や文脈までを想像しながら理解することが不得手であるため、実のところスポーツ指導において最も難易度が高いと言うことができよう。そのため、多くの気づきを得たと思われるので、それを今後の勉学やスポーツ実践において活かしてほしい。

なお、この年代の児童たちは急速に心身ともに成長する。そして、３年生あたりから（言語理解の進捗とともに）気むずかしくなってくる傾向があるため、一人一人の指導メモを残すなどの工夫をすれば、今後指導者になったときの振り返り材料として活用できるのみでなく、他の指導者への申し送りとして業務上の活用もできることを申し添えたい。

（スポーツ健康科学部　高松 潤二）

活動テーマ　：　朝日ヴィントに所属する小学生へのサッカー指導

活動分野　：　スポーツ地域貢献

実践者名　：　中根 泉（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2 年）

活 動 先　：　朝日ヴィントサッカースポーツ少年団

日程・場所　：

8 月 2,3 9:00-翌 12:00 湯ったり館合宿、9 9:00-15:00 八郷 G、10,23,24,31 9:00-12:00　君原小、若栗 G

9 月 14　9:00-12:00 君原小

10 月 11 8:00-14:00 女化 G、19 9:00-12:00 君原小

11 月 2,8,9,16,30 9:00-12:00 君原小

12 月 7,21 9:00-12:00 実穀小

1 月 10,11 9:00-12:00　本郷小、実穀小、1/31,2/1 8:30-18:00 スポ少講習会

2 月 1/31,2/1 8:30-18:00 スポ少講習会、8 9:00-12:00 実穀小、14　9:00-11:00 本郷小

概　　要　：

朝日ヴィントに所属する小学１年生から６年生を対象にサッカー指導を行った。(1～3 年生担当)

サッカーに必要な基本技術や動きを指導すると同時に、毎回試合形式のトレーニングを行うことで、試合と同様の経験を多くさせた。また、オンとオフを通して自律（自立）を促した。

地域の組織が主催する大会に他チームとの合同チームで参加し、交流を深めるとともに実戦経験を積み、審判も行った。

これまで同様に今後もこの活動を継続するため、スポーツ少年団認定員養成講習会兼スポーツリーダー養成講習会を受講した。

活動レポート　：

私がこの報告書にまとめた７ヶ月間、朝日ヴィント SSS で小学生のサッカー指導に関わって来て最も感じたことは、７年前と比べて、小学生サッカーのレベルが上がって来ているということである。

今回、ボランティア活動をさせて頂いた朝日ヴィントは、私が小学３年生から６年生卒業まで所属し、卒団後も関わりがあり、３年前から指導者として在籍しているチームである。

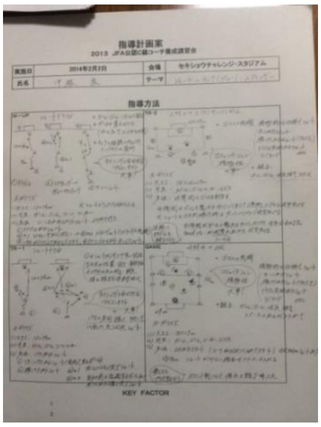
卒団後、練習に参加していた頃は、コーチの話を真面目に聞き、一生懸命練習に取り組む選手は学年に半分程であった。しかし、今回関わった小学１年生から３年生、体験に来た幼稚園年少の子たちは、初めのころは集中力が続かないものの、練習や環境に慣れていくと、サッカーを楽しみながら真面目に取り組んでいるのである。朝日ヴィントには８名の指導者がいるが、小学１年生でも全ての指導者と自分の意見を伝え、しっかりとコミュニケーションを取ることが出来るのである。それは、高学年の選手がコーチとよくコミュニケーションを取り、休み時間もコーチから何か良いものを盗もうと一緒に遊んで、練習中は真面目に取り組んでいる姿を見ているからなのかもしれない。

小学生サッカー全体の現状を示すものとして、夏に行われる全日本少年サッカー大会があるが、選手一人一人のサッカーに対する意識が高く、向上心があり、基本技術やサッカー理解がしっかり

していると感じた。また、選手間だけでなくチームスタッフや保護者ともコミュニケーションが取れているように見える。したがって、上記のように全国大会に出場しているチームだけでなく、地域レベルのチームであってもサッカーの基本技術や取り組む姿勢、サッカー理解といった、サッカー全体のレベルが上がっていると考えている。

私はこの７ヶ月間１年生から３年生を担当したが、１年生と３年生の基本的な運動能力の差があるにもかかわらず、選手の人数や帯同できる指導者の人数の関係で一緒に練習しなければならないという困難な状況を体験した。一人一人に課す課題を変えたり、オーガナイズや高学年の選手に協力してもらったりと、変化をつけてトレーニングを行って来たが、３年生の選手はもう一つ上の学年でもプレー出来ると考えられるため、来年度の対応を考えなければならない。来年度は指導者数も団員数も減り、一つ上の学年は全員他チームへの移籍が決定しているため、トレーニングだけでなく、環境を整えるところから始めなければならないと考えている。

また、１年の途中で入団して来る選手に対して、以前から在籍している選手と同様のトレーニングを行うだけでなく、それまでの分の補充が必要だと考えるし、より各年代に合ったトレーニングを設定していかなければならないと考えるため、各年代の発達特徴や JFA が設定している目標を理解し、各年代に合ったトレーニングを学んでいきたい。それに合わせて、問題を発見し状況に応じた修正をする能力や、具体的な指示・称賛が出来るといったコーチング能力を高めていきたい。



今回の活動で小学１年生から３年生を担当した経験を通して、走る・跳ぶ・投げるといった基本動作やサッカー特有の動きなど、自分の身体を思い通りに動かせない年代の子どもの運動に興味を持ったため、今後もこの活動を続け、小学生年代の運動特性や発達特性、トレーニング方法などを学び、子どもの運動能力の発達に貢献したい。

アドバイザーコメント：

子ども、サッカーをキーワードに自身が取り組んできたスポーツ経験とスポーツ健康科学部での学びを活かし、少年団で指導を行った。その中で、試行錯誤をしながら具体的なトレーニング内容を考えて実践し、そこから多くのことに気づき、子どもはもとより、指導者自身も成長していくわけだが、朝日ヴィントサッカースポーツ少年団という固有の組織に属しての指導となるため、オリジナリティーには欠ける。ぜひ、この活動を基礎とし、中根自身がスポーツ教室を企画したりなど、日頃から疑問に感じている部分を改善するようなプログラムや運営を一から計画してみることも視野に入れ、更なる発展を期待したい。

（スポーツ健康科学部　稲垣 裕美）

活動テーマ　：　健康づくりとスポーツ指導

活動分野　：　スポーツ地域貢献

実践者名　：　林 輝（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2 年）

活 動 先　：　ミナトスポーツクラブ天王台

日程・場所　：

・水泳指導　12 月～2 月の土曜日
・ジム　　12 月～2 月の平日
・大掃除　12 月 30 日
・新年のイベント　1 月 4 日
　上記の場所はミナトスポーツクラブ天王台
・守谷マラソン　2 月 1 日守谷市
・取手オープン　2 月 15 日取手グリーンスポーツセンター

概　　要　：

・プールでの水泳指導（年中～小学校４年生）バタ足～背泳ぎまで。練習からテストまで行った。
・ジムでの運動指導。簡単なエクササイズを一緒に行ったり、紹介したりした。
・１対１で行うストレッチ。１５分で全身をストレッチ。
・年末の大掃除の手伝い。
・守谷マラソンの会員さんのサポート。ウォーミングアップの手伝いやクーリングダウンをした。
・取手オープン（水泳大会）の役員の手伝い。計測や掲示の係りを担当。
・新年のイベント（餅つき、豚汁販売、フリーマーケット）の運営手伝い。準備。豚汁販売担当。

活動レポート　：

今回の自主活動のテーマは「健康づくりとスポーツ指導」でした。ミナトスポーツクラブ天王台さんの協力の下活動させていただきました。活動内容は、アスレチックジムでのトレーニング指導、1 対 1 での 15 分間の全身のストレッチ、マシーン器具の使い方の説明、館内の利用方法の説明、トレーニングメニューの説明、プールでの子供達への水泳指導、マラソン大会の補助、水泳大会の役員の手伝い（計時）、年末の大掃除の手伝い、新年のイベントの手伝い（餅つき、豚汁販売）等です。

すべてのものにいえるのは、コミュニケーション能力が、向上したことである。ミナトスポーツクラブさんは、スタッフ同士の仲が良いのはもちろん、会員さんとの距離がとても近く様々な情報交換ができます。時には、叱られることもあります。でも、それは自分たちのことを思って指導してくれているからです。会社の人からだけでなく、会員さんからの指摘や励ましで成長していると考えています。他のクラブと比べれば施設はあまり良いとは言えません。しかし、会員さんとの繋がりは他のクラブには存在しないものがあると思っています。感じたものがありまして、利益よりサービスの提供を重視しているように感じました。会員さんを第一に考えているところが、大変好印象です。

ジムでの仕事では、ストレッチができるようになったことで、会員さんとの距離が近づき、話すことで社会勉強にもなりました。普段学校の図書館で自分で本を読んで学んでいることを伝えたり、

トレーニングの指導をしたり、怪我や傷害の予防改善を知っている範囲で伝えられたのでいい経験になりました。

　プールでの水泳指導ではまず、第一に「安全の確保」を徹底しました。指導をするということは子供の命を預かっているという意識を常にもち取り組みました。そのため、子供がどこで何をしているのかを常に把握しなければならないので、注意力・観察力高めることができたと思います。どんなに気をつけていても事故が起きてしまったらそれは安全の確保が出来ていないことになるのでなにがあっても子どもの安全を第一に考えて指導しました。次に心がけていたのが、楽しいレッスンになることです。自分が担当していたクラスは水泳の基本となるストリームラインをとらせること、バタ足が出来るようにすること、クロールの呼吸なしであったため、ここで、水泳がつまらないと感じてしまったら後が続かなくて辞めてしまうと思います。子供達がいかに楽しめて、もっと上手になりたいと思えるようなレッスンになることを求めていました。レッスンの最後に子供に「楽しかった」と言ってもらえたときに一番やりがいを感じました。自分が考えた楽しいレッスンのつくり方は、自分がレッスンを楽しむ事だと考えました。コーチが笑顔で楽しそうにやっていれば子供も自然に笑顔になり楽しんでくれると感じました。ただ、楽しさが、ヒートアップするとふざけになります。そこはきちんとケジメをつけて叱ったりします。ケジメをつけることで楽しいレッスンが成り立つと考えています。

　水泳大会の役員の手伝いでは計時の係りを手伝いました。自分も実際に大会に出場して水泳の楽しさを実感しました。選手宣誓も任され実行しました。マラソン大会ではマラソン大会に参加する会員さんのサポートをしました。ウォーミングアップやクーリングダウンの手伝いをしました。

　今回の自主活動では、今まで体験できなかったことが多く体験でき、自分にないものが身に付き成長することが出来ました。今後の生活に活かせるよう努力していきたいと考えています。

アドバイザーコメント ：

　活動に関しては、民間スポーツクラブの指導員としてどう振る舞えばよいか、スポーツクラブはどのようにあるべきか、そして指導員としての資質に関して何が必要で、何が現在不足しているか、今後の自分はどうあるべきか、今回の経験はどう生かせるかなど、さまざまな気づきが得られたようである。学校という比較的狭い空間から（ごく一部であるにせよ）社会の一側面をのぞかせてもらう機会をえられ、実習先の関係各位に謝意を表したい。

　本報告書に関しては比較的よくかけているが、所見時の文章において「である」調と「です・ます」調が混在していたため、最終提出において修正する必要があることを申し添えておく。

　なお、このような指導実践は経験を積み重ねるほど達成感や喜び以上に多くの課題が見つかるものである。今後、そのような課題に直面しても倦まず怯まず解決に向けて取り組む努力をすること、そしてそのような「くせ」をつけることを期待したい。

（スポーツ健康科学部　高松　潤二）

活動テーマ　：　ウォーキング教室

活動分野　：　スポーツ地域貢献

実践者名　：　山本 夏帆（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2 年）

活 動 先　：　坂本ゼミ

日程・場所　：

2014 年 9 月～2015 年 1 月

毎週金曜日　14 時 45 分～15 時 45 分

北竜台公園に集合し、龍ケ崎市内を約１時間歩く。

ルートは毎回異なった場所を歩く。

概　　要　：

龍ヶ崎市民の方々を対象としたウォーキング教室を開催。

参加者募集のために市役所にメールで広報誌「りゅうほー」への掲載を依頼。

担当者と依頼内容・掲載内容を確認。

広報誌には自身の電話番号を載せ、希望者からの電話対応をし、詳しい内容の説明などを行う。

ウォーキング教室では準備・整理体操とウォーキング。

参加者の体力に合わせた内容の計画。

活動レポート　：

今回、私は市内広報「りゅうほー」の掲示板への掲載を依頼し参加者を募集してウォーキング教室を開いた。広報誌には小さく掲載される程度のものであったので２・３人集まれば良いだろうと思っていたが、掲載後に続々と連絡が入り最終的には 10 人以上の方が参加してくださった。元々この活動は地域の人の「運動不足の解消」「健康の維持・増進」を目的として始めたものであったが参加者の方々にとっても私にとっても目的以上のものを得ることができたと思う。そして参加者も多く集まり良い雰囲気で最後まで活動を行うことができた。特にこの活動を行ってよかったと思えることは２つある。

１つ目は「地域の方々の交流の場」をつくることができたことだ。今回の参加者の方は、定年退職をした人や、主婦、一人暮らしのお年寄りなどがほとんどであり、最初の頃、参加者の声で最も多かったのが「日ごろから運動をしようと思っていても１人で行うとなるとなかなか続かない」というものだった。けれどもこのウォーキング教室では同じような目的を持った人が集まり、無理をしない程度の運動強度で、様々な話をしながら行うものであったので、「一人だとこんなに長く歩けないが誰かと話しながらだと１時間もあっという間に歩くことができる」との声が増えた。特に 1 人暮らしのお年寄りの方は、「普段家から出て誰かと話すことがなかったが運動しながらいろいろな人とお話ができて毎週楽しみに参加している。」と言ってくれた。ウォーキングをすることで「運動不足の解消」「健康の維持・増進」をするだけでなく、「交流すること」も求めてく参加してくれ、このウォーキング教室が「地域の方々の交流の場」となり良かった。

２つ目は私自身がこの活動を通して多くのことを得ることができたことだ。私は今まで一人で人前に出て何かをする機会も、しようとする積極性もあまりなかった。人の前に出て指示をしたり、自分の考えで人を動かしたりすることに対して不安や緊張、抵抗感があり今まで避けてきていた。

けれども今回の参加者の方々が皆、私の慣れない説明などに対して何も言わずに聞き入れて良い雰囲気を作ってくれたことで活動を重ねるごとに私は心に余裕ができてきた。そして最初の感情よりも、もっと上手く自分の思うように指示や考え、気持ちを人に伝えていけるようになりたいという気持ちが大きくなっていった。今回の活動でこのような経験ができたことにより、人前に出ることに対しての積極性が生まれたと思う。また、心に余裕ができてきたことで、次第に参加者へ声をかけていくということに気を向けることができた。何もないゼロの状態から作ったウォーキング教室であったので私、そして参加者の方同士も全員が初対面。そして年齢・性別も様々なので体力にもばらつきがある中、全員とコミュニケーションをとるようにしていかなければ集団はまとまらない。全体を見渡しながら、参加者の声を聴きながら活動することで今まで以上にコミュニケーション能力が身に着いたと思う。

最後に、今回の活動では年齢・性別も様々で普段話す事のないような人と多く話しをしたが、思っていた以上に話が弾み、話すことで印象も変わり、新しい発見をすることができ、とても楽しい時間を過ごすことができた。そして話をする中で、歳を重ねると共に運動をする機会や人と交流する機会が減ってしまっているのではないかと感じた。私はもともと子どもとスポーツに興味があったけれど、この活動を経て、お年寄りと運動にも興味が出てきた。若い人のスポーツができる環境だけでなく、お年寄りが同年代の方とだけでなく、若い人と交流をしながら運動を行える環境も増やしていきたい。

アドバイザーコメント：

ウォーキング教室開催のため、龍ヶ崎市の広報誌「りゅうほー」に掲載出来るよう調査を依頼。人に頼ることなく一人で解決してしまった。今回、ウォーキングの指導が初めての経験で心配していたが、受講生とのコミュニケーションも取れていていい雰囲気で行っていた。

学生主導で実施したことで、リーダーとしての難しさも体験した。この経験が今後の学生生活に役立つことだと思う。

（スポーツ健康科学部　坂本 充）

活動テーマ　:　海外スタディツアー　～村の小学校の子どもたちに体育を教える活動～

活動分野　:　国際貢献

実践者名　:　飯田 涼歌（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2 年）

活 動 先　:　カンボジア王国　(株)ピース・イン・ツアー　地球の歩き方

日程・場所　:

〈１日目、準備〉
　村のピース・イン・ツアーのコテージ
〈２日目、体操・遊具設置〉
　村のザヴィーヤ小学校
〈３日目、運動会〉
　村のザヴィーヤ小学校

概　　要　:

・実施事項(説明)【自分の役割】

・小学校のボランティア(運動会)の準備
　体操種目を考える(一人一種類、計１４種目)。二組に分かれオリジナルの応援合戦を考える。
　景品(折り紙のメダル、トロフィー)の作成。

・小学校に遊具の設置
　廃棄のタイヤを地面に埋めた遊具を作り遊び方(陣地取りゲーム)を教えながら一緒に交流する。
　【クワで地面を掘り、タイヤを埋める】
　【陣地取りゲームの見本を見せる】

・子ども達に自分たちで考えた体操を教える
　前もって考えた体操を子ども達と一緒に行い、身体を動かすことに徐々に慣れさせる。
　【子ども達の前に立ち、実際に体操をやってみせてマネをさせる】

・運動会の実施(最初に必ず見本を見せ注意事項の説明をする、１位には金メダルをあげる)
　【各競技のスターター】
　かけっこ、障害物競争(袋に足を入れジャンプしてゴールを目指す)、
　飴食い競争(小麦粉の中の飴を手を使わずにくわえてゴール)、
　ピンポン競争(スプーンにピンポン玉を乗せる)、
　ボーリング(ペットボトルのピンとバスケットボールで)、
　ボール蹴りリレー、玉入れ(新聞紙の玉を動き回るカゴに投げ入れる)、
　応援合戦(男組女組に分かれて子ども達にエールを送る)【女組担当、よさこいを交えた応援】、
　綱引き(男女に分かれて綱引き、それぞれに手作りのトロフィー授与)【女組に参加】

・子ども達との自由交流
　日本から持ち寄った遊び道具(折り紙、ビニールボール等)で各自子ども達と交流する。
　【折り紙で鶴や鯉のぼりの折り方を教える】
　【あっち向いてホイで遊ぶ】
　現地の音楽で輪になり子ども達と踊る(踊りは自由に)。

・日本の遊びを教える
　相撲、馬跳び、大縄跳び、じゃんけん列車等の身体を使った日本の遊びを教えながら子ども達と

交流する。
・記念撮影、歌のプレゼント
子ども達と人文字でスマイルマークを作り記念撮影する。【子ども達の誘導】
「ふるさと」の合唱をプレゼント。

活動レポート ：

今回の海外スタディツアーは私にとって初めての海外であり大きな規模のボランティア活動だった。始めは、たった２日間の訪問だけで現地の小学校の子ども達に影響を与えられるのだろうかと不安な部分があったが、活動を終えてみて、子ども達にとってはこの２日間が一生の思い出になることを知りこの活動の重みを感じた。このツアーでは毎回違う小学校に訪問しているそうで、少しずつだけれど確実に体育の重要性をカンボジアに広めていっているのだと思った。自分がその中に関われたことを本当に嬉しく思うと同時に、このような活動に大きなやりがいを感じた。世界には体育を知らない人がまだまだたくさんいるだろう。今回の活動で終わらずに、今後も積極的にこのようなボランティアに取り組んでいきたい。

子ども達に身体を動かすことの大切さを伝えることをメインのテーマとした活動だったが、その中には様々な意図があるように思えた。体育の楽しさや重要性を伝えるのは私たちであるが、その期間は短く、継続していくためには現地の大人たち(教師)の指導が必要である。現地では人手不足で教師が少なく、子ども達に体育が必要であるという概念がないため体育指導ができる教師などいない。そのため、子ども達にはもちろんのこと、大人達(教師)にこそ体育の大切さを伝え、これから学校にはいってくる子ども達にも体育というものを伝えていってもらうことで、現地に体育の概念を根付かせることが重要なのかもしれない。さらに、体育は身体を健康にするだけでなく、社会で生きていく際に必要となるたくさんのスキルを身に着けることができる。競技をする中でそれまでになかった、競い合うことの楽しさや勝つことの喜び(競争心)、仲間と協力する気持ち、順番や実施方法などのルールを守る大切さなどが徐々に子ども達に身についていく様子が目に見えてわかった。近年、日本では体育の在り方が議論されている。今回の活動を通して改めてその重要性を理解したので、私は日本でも体育教育はぜひ続けていくべきだと考える。それだけではなく、健康な身体作りのためだけにただ動作をこなしてしまっている風潮があるように思える日本の体育の現

状を受け止め、心身共に様々なものを得られることを教師のみなさんにきちんと理解してもらい、それを子ども達に伝えてほしいと思う。

今回のボランティアでは、人のために自分達が影響を与えるつもりで活動したが、たくさんのことを学ばせてもらい自分が得られたものの方が多かったように思える。この活動で得られた様々なものを今回限りにするのではなく、今後の学生生活や就職活動に役立て意味あるものにしていきたい。

活動テーマ ： 「児童の行動変容に対する一考察」－小学校一年生への学級活動補助を通して -

活動分野 ： 地域貢献

実践者名 ： 佐藤 莉々亜（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2 年）

活 動 先 ： 茨城県龍ケ崎市立長山小学校

日程・場所 ：

１. 事前学習（１～２は平成 26 年 12 月～平成 27 年 2 月）

流通経済大学図書館及び武田研究室　2 時間/12 日間（24 時間）

２. 本活動

長山小学校　3 時間/15 日間（45 時間）

３. 活動の振り返り

武田研究室　2 時間/7 日間（14 時間）

４. 報告書制作

自宅　2 時間/週×4 日間（8 時間）

計 91 時間

概　　要 ：

1. 事前学習
   アダルトチルドレンについて
2. 活動手続き
   ⑴ ボランティア受け入れ先の選出
   ⑵ 電話交渉
   ⑶ 現地での活動内容、日時の決定
3. 本活動
   ⑴ 国語、算数の学習補助

活動レポート ：

この活動を通して、子どもの言動や行動の表面だけを見てその子の人格を判断することや評価することは、間違っている可能性が高く、さらにアダルトチルドレンへと成長させてしまうかもしれないということが分かった。

ボランティアをさせて頂いている小学校は一学年が２クラスあるのだが、1 年 1 組は集団での生活にも慣れたようで、その生活の中でしてはいけないこと・悪いことの判別が自分でできるようになっていた。それに対し 2 組は時間を守れない・今すべきことやすべきでないことの判別ができないなど、集団生活の中で大切なことが身についていない子が多かった。その子たちは先生の言うことを聞かず、先生も半ば無理やりに指導するしかないというような状況だった。あまりにクラス内の状況がひどいので NPO 法人の方が手伝いにきてくれるようになったが、その効果はあまり出ていないように思う。

先生方や NPO 法人の方々は「問題児が 2 組に集まってしまった」と話していたが、私は本当にそうだろうかと疑問を抱いた。私も問題児と呼ばれる子供たちには手を焼いていたが、それぞれの担任の先生の能力に差があるようにも思えるし、周りの環境にも何かしらの原因があるのではないか

と考えた。
　そんな風に思っていたある日、S 君という一人の男の子にずっとついているよう先生に依頼された。その子は、授業中にも関わらず席を立ったり、おしゃべりをずっとしていたり、先生の言うことを無視または反抗するというような、要注意人物だ。
　最初はノートを書くように指示を出しても「後でやると」言って行わないなど、反抗的な態度であった。その後、指示や注意を控え、しばらく寄り添っていると「なんでずっといるの？」と私に関心を持ち始めたと感じられる発言をした。そしてある時不意に、サッカーをしているのだと控えめに自身のことについて語り始めた。そこで私は彼の話を熱心に聞いた。彼のことを知るチャンスだと思ったからだ。「どこのチームでやっているの？」「ポジションはどこ？」「週に何回やっているの？」という具合だ。すると S 君はよく答えてくれて、「この前の大会では優勝したんだ！」などと、質問に答えるだけではなく、自分のサッカーでの体験を主体的に生き生きと語ってくれた。その時の彼がとても楽しそうで、そんなにサッカーが好きなら将来はうちの大学にきなよと言ったところ、S 君は嫌だと答えた。理由を尋ねると、「強いところって体が大きい人いっぱいいるでしょ？S は体が小さいから強いところに行くとその人たちに負けちゃうから。」と話してくれた。週に２回しか会わない私に対し、このように不安に思っていることまで話してくれるようになったのは大きな進歩だと感じた。
　このような彼との対話を通し、彼がサッカーに興味・関心があることとそれに対して抱えている不安を理解することができた。そしてその後、反抗的だった態度から素直な態度へと変化した。指示に対し、即座に行動したり、他者を援助するような行動が見られたのだ。いつも帰りの準備が遅い S 君だったが、その日はとても早く準備を終わらせており、ノート配りまで進んでやってくれたり、それも終わって遊び始めそうになったので、「まだ帰る準備が出来ていない子の手伝いをしてくれる？」とお願いしたところ、わかったと言って他の子の支度を手伝ってくれたのだ。
　このように行動が変容した S 君を見て、彼はやはりただの問題児ではないと考えた。問題行動をしていたのは、彼が自分にまわりの興味や関心を引こうとしていたからだと思う。これは推測であるが、S 君の両親は仕事で忙しく、相手をしてもらえないから、自分に注目を集めて相手をしてもらえるように反抗的な態度をとっていたのではないか。このように考察した理由は、アダルトチルドレンに関する著書の中の、アダルトチルドレンの子ども時代についての事例と似ていたからだ。大人は社会的に望ましいとされる規範を熱心に教育し、また、その規範で子どもを評価しがちであるが、それは正しいことだろうか。S 君のように、子どもが発しているメッセージにきちんと向き合ってあげることで解決することもある。大事なのは、子どもが起こす行動や態度の背景について理解を深める努力をすることではないだろうか。
　ただし、学校教育の場では学級に一人しか教員がいないため、これを担うことは難しい。よって、教員とは立場を異にする大学生などがその一助となる可能性がある。さらにその学生が、ただ活動をこなすだけではなく、その現場での自分の役割などを見出し積極的に行動することができれば、本学の実学主義の発展可能性へと繋がるのではないか。

アドバイザーコメント：
　児童との関わりをきっかけに、自身のことについて考えるようになった。それは本人の発達課

題に関わることであり、必然的にこれまでの自身の体験を振り返ることが求められた。

　教育現場でのボランティア活動などでは、学生の体験が実学の成果として短絡的に捉えられることが多いが、本学生の場合は、現場での体験をきっかけに、自分自身に対する気づきの幅や深さを拡げことなった。それは即時的かつ直接的に現場に還元する成果物とはなり得ないが、将来の教育現場に有能な人材を育むという観点において重要である。

自身について考えることは苦しさを伴うが、本学生はそれを避けることなく、学術的知見を頼りに積極的に取り組んだ。この態度は大きく評価できる。

　さらに、専門的な学術的探究心を抱き、本活動後も積極的に学ぼうとする姿を確認でき、今後の活躍が期待される。

（スポーツ健康科学部　武田 大輔）

活動テーマ　：　「throw アップトライ！！」サポート　体育授業サポート

活動分野　：　スポーツ地域貢献

実践者名　：　工藤 純菜（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2 年）

活 動 先　：　茨城県龍ケ崎市立馴柴小学校

日程・場所　：

「throw アップトライ！！」　馴柴小学校体育館

業間休み・・・9 月 25 日、10 月 2 日、10 月 30 日、10 月 31 日、12 月 4 日、12 月 11 日

昼休み・・・10 月 2 日、10 月 23 日、12 月 4 日、12 月 11 日

体育授業サポート　たつのこプール、馴柴小学校体育館

10 月 2 日、10 月 30 日、11 月 6 日、12 月 11 日、1 月 29 日、2 月 5 日、2 月 12 日

概　　要　：

「throw アップトライ！！」では、毎回学年にあわせたゲームにしていたため、多種類のゲーム内容があった。お手玉を壁に貼った的に投げる的当てゲーム、飛びにくいバドミントンのシャトルを投げて正しいフォームを身につけさせるゲーム、強度を段階的に変えた紙鉄砲でいかに良い音を鳴らせるかを競うゲーム、お手玉をおもりの入った段ボール箱に投げて倒すゲーム、体育館の上の通路からスズランテープを斜めに垂らした中にラップの芯を通したものを投げ綺麗なフォームにするゲーム、鈴の入ったペットボトルを垂らして小さな的でも当てられるようにするゲームなどがあった。多くの道具を使うため、準備や片付けを行った。手術をして右手が使えなかったときはスタンプを押す係をした。手が治ってからは、実際に児童たちと一緒にやりながら具体的なポイントを教えたりした。

体育授業サポートでは、たつのこプールでの水泳の授業や小学校の体育館でのマット・跳び箱・縄跳びの授業のサポートをした。水泳では、手術をして右手が使えなかったので、プールサイドからの監視、綺麗なフォームで泳げているかの判定をした。また、授業内容に遅れている児童のサポートを行った。マット・跳び箱では、全体を見回りながら一回一回良かったところや改善点をアドバイスし、技を上達させるサポートを行った。縄跳びでは、癖が気になった児童の癖を直した。大縄を使った八の字跳びの時は、みんなで声を出してリズムを取る、並んでいるときもまっすぐ前に詰めて並ぶなど、好記録につなげるためのアドバイスをした。

活動レポート　：

今回、この活動を通して学んだことが本当にたくさんあった。学んだことの中で改めて考えたことは以下の３点である。

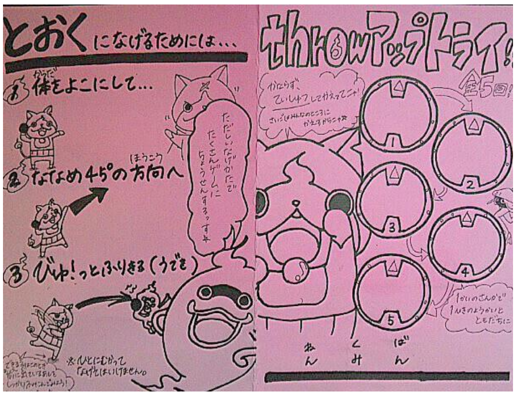
１つ目は、指導する側もしっかり体を動かせるようにするべきだということである。活動を始めた時、夏に手術をしたために右腕が固定されていて使うことができなかった。その状況で多くの児童を相手にした時は、準備するにも手伝ってもらった。また、見本を見せるにも普段なら利き手である右手を使う動きを利き手でない左手でやったりしていたため、迷惑をかけてしまうことが少しあった。それでも、すぐに固定は外れて動かせるようにはなったが、指導するときに自分で満足することができないこともあった。そのため、改めて常に万全の態勢でいることの大切さを学ぶことができた。服装や態度も大学で授業を受ける時よりもコーチらしくなれるように心掛けた。

２つ目は、体育を指導する人は体を動かせる人のほうが良いのではということである。小学校の教師は体育の専門家ではないことが多い。実際にサポートさせていただいた授業をしている先生は、男性の先生が中心になっていること多かった。しかし、自分で見本を見せていることは少なかった。そのため、言葉で指導していたり、体育が出来る児童に見本をやってもらったりしていることがあった。それを見て授業を受けている児童を見ていると、理解できていないような動きをする児童もいた。女性の先生は、列の後ろでやっていない児童に注意をしたり、安全管理をしていることが多かった。このような状況を見て、授業内容や指導法を考える先生が、実際に動いて見本を見せたほうが伝わりやすいのではないかと考えた。この活動では、自分はコーチという立場でサポートさせてもらった。自分が指導するときには、なるべくやって見せるということを心掛けた。

３つ目は、指導法を工夫することで積極的に参加してもらえるということである。「throw アップトライ！！」では、小学生に大人気の妖怪ウォッチのスタンプラリー形式で投力をつけるゲームをしていた。低学年は、妖怪ウォッチが好きで多くのスタンプを集めたいと参加者が多かった。それに比べ、高学年は、低学年のように妖怪ウォッチが好きという児童が少なく、参加者が少なかったように思った。ゲーム内容など様々なことを学年に合わせた工夫をすれば、もっと多くの児童に参加してもらえるようになるのではないかと考えた。今後、自分がこのようなことを計画することがあれば気をつけたい。

以上のことが、この活動を通して学んだことの中で改めて考えたことである。

今までの大学生活では、実践的な活動をすることがほとんどなかった。しかし、この活動を始めたことで大学の授業を受けていても気にするポイントが増えた。教材研究の授業で授業計画を考える時も、指導上の注意点が以前よりも細かい所まで出せるようになった。このように実践的な活動だからこそ学べたことが大学の授業にも良い影響を与えている。この活動をきっかけに他にも多くの活動に参加していくようにしたい。また、馴柴小学校の体育授業サポートも続けられたら良いと考えている。



アドバイザーコメント：

体を動かして手本を示せることや専門性を持つことの大切さ、スポーツ健康科学を専攻し運動を得意とする自らの強みを認識できて良かったですね。また、見せたり、話したり、させたり、指導する際のアプローチの仕方にそれぞれ長短があること、運動が不得意だったり、うまくコミュニケーションできない子どもに対し、相手の立場に歩み寄って考え行動できるのは素晴らしいことです。活動中も観察と考察がしっかりできているのだと思います。怪我をしている状況が、逆にいろんな気付きを与えてくれて良かったのかもしれないですね。物事がうまくいかないときにポジティブで

いることが大切です。

大学で学んだことを現場で試す、現場でうまくいかなかったことについて大学で学ぶ。大学での学びと実社会での学びを結び付けて、トライ＆エラーを繰り返してください。今後は、教育実習やゼミ活動など、自ら企画してマネジメントする機会が増えてきます。「正解」より「回答」、「思考」より「試行」、「成功」より「成長」を大切に、マネジメント能力の向上に努めて、計画力、行動力、観察力を高めてください。大学生活も折り返し地点を迎え、あっという間に過ぎて行きます。がんばってください！

（スポーツ健康科学部　西機 真）

活動テーマ　：　小学校の授業サポート　throw アップトライ

活動分野　：　スポーツ地域貢献

実践者名　：　坂井　竜世（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2 年）

活 動 先　：　茨城県龍ケ崎市立馴柴小学校

日程・場所　：

活動日程

授業サポート

　10 月～12 月、2 月　水曜日　10：45～11：30

throw アップトライ

　10 月、12 月　木曜日　10：20～10：40

活動場所

　馴柴小学校　体育館

　龍ヶ崎市総合体育館「たつのこアリーナ」

概　　要　：

・授業サポート

　２年生の体育の授業をサポートする。

　水泳（水中に入って生徒の安全確認）

　持久走大会（カメラマン、並走して生徒の安全確認）

　マット、縄跳び、ボール運動（準備、片付け、生徒の安全確認）

・throw アップトライ

　馴柴小学校の生徒は投力が低いということで、様々な物を使って、投げるという動作を楽しんでもらい、投力を上げる取り組み。

　的当て、シャトル投げ、ボールを投げる動作で紙鉄砲を鳴らす、

　紅白玉を用いたトレーニング、紐とサランラップの筒を用いたトレーニング（スタンプ押し、準備、片付け）

活動レポート　：

　私は馴柴小学校の授業サポートと小学生の投力を上げるために、「throw アップトライ」という活動を行った。

　授業サポートでは 2 年生の授業をサポートし、水泳、持久走大会、マット、縄跳び、ボール運動をサポートした。サポート内容としては、水泳では、水中に入って、生徒の安全確認やお手本を見せたり、持久走大会では、沿道を走るため、生徒が車道に出ないように並走しながら生徒の安全確認をしたり、マット、縄跳び、ボール運動では、指導や生徒の安全確認、準備、片付けなどを行った。サポートしてみて、まず感じたことは、小さい子たちを指導することの難しさをとても感じた。2 年生に普通に指導しても、生徒は言われたことを理解できないので、2 年生でも理解できるような言葉の選択だったり、口だけでなく、体を使って手本を見せたりと、指導方法に工夫が必要だった。また、自分の中では 2 年生でも分かってくれるだろうと思って指導しても、実際はあまり伝わ

っていないということがあったので、小さい子たちを指導するのは難しく、大変だと感じた。しかし、2 年生はとても元気がよく可愛くて、すぐに私のことを覚えてくれて、サポートに行く度に私のとこにたくさんの生徒が来てくれて、すごく嬉しかったし、毎回元気をもらい、授業も一緒に楽しくやることができた。また、サポートしてみて、授業の安全面をもう少し改善したほうが良いと感じた。そのように感じた理由は、30 人ほどいる生徒を先生 1 人で見なければならない上に、2 年生はまだ落ち着きがなく、すぐに遊んでしまう。さらに、先生は一度に生徒全員を見ることができないので、先生の目が行き届いてないとこで、トラブルが起きてしまう可能性がある。トラブルが起きてからでは遅いので、トラブルが起きる前に、対策をとったほうが今より安全に授業ができるのではないかと思った。そして、私たちのサポートが少しでも役に立ったのなら、これからも授業サポートを続けていきたいと思った。

throw アップトライでは、馴柴小学校の生徒の投力が弱いということで、投力を少しでも上げるために、的当て、シャトル投げ、紙鉄砲や紅白玉などを用いたトレーニングを行った。生徒たちの投げ方を見てみると、腕の力だけで投げようとする生徒や投げる時に、顔が下を向いているために投げる軌道が低くなってしまう生徒が多くいた。そこで、投げる時は腕だけでなく足も使って投げることと投げる時は斜め上を見て投げるということを重点的に指導した結果、指導前より遠くまで投げられるようになった生徒が多数いたので、指導した成果が出てよかった。また、生徒が書いてくれた感想用紙に「参加して良かった」や「楽しかった」などの感想がたくさん書いてあって、非常に嬉しかった。

今回の活動は私にとってとても貴重な経験になった。今後、小さい子供たちを指導したり、一緒に体を動かしたりする機会があると思うが、その時に今回の活動で学んだことを活かしたい。また、私は体育教師を目指しているので、今回の活動で教育の現場に行って、学校の雰囲気を感じたり、生徒に指導したりと、大学の講義ではなかなかできない経験や学習ができ、より一層、教師になりたいという気持ちが強くなった。そこで、これからの大学生活では、教師になるための知識や技能を身につけ、教育の現場に行ける機会があれば、積極的に行って様々なことを経験したい。

アドバイザーコメント：

現場でいろいろ体験したことが、体育教師になるという動機をより強くさせる結果になって非常に良かったです。今後は、生徒、先生、そして自分自身を、より深く観察して、何が足りなくて、どんな知識やスキルを身につけなければいけないのかしっかり考えましょう。いくら経験を積み重ねても、単に良かった、悪かっただけの感想で終わっているだけでは、成長にはつながりません。計画性を持って行動し、結果や現象に対して、その原因をきちんと分析できるＰＤＣＡを意識して

ください。

　大学で学んだことを現場で試す、現場でうまくいかなかったことについて大学で学ぶ。大学での学びと実社会での学びを結び付けて、トライ＆エラーを繰り返してください。今後は、教育実習やゼミ活動など、自ら企画してマネジメントする機会が増えてきます。「正解」より「回答」、「思考」より「試行」、「成功」より「成長」を大切に、マネジメント能力の向上に努めて、計画力、行動力、観察力を高めてください。大学生活も折り返し地点を迎え、あっという間に過ぎて行きます。がんばってください！

（スポーツ健康科学部　西機 真）

活動テーマ　：　国際交流活動

活動分野　：　国際交流

実践者名　：　佐々木 有里（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2 年）

活 動 先　：　インドネシア共和国　ジョグジャカルタ特別州

日程・場所　：

●2014 年 9 月 7 日(日)～9 月 15 日(月)　インドネシア

9 月 7 日　成田発　17：40　23：30 ジャカルタ着

9 月 8 日　ジャカルタ発 05：25　ジョグジャカルタ着 06：40、ホテルチェックイン

9 月 9 日　ガジャ・マダ大学

→インターナショナルスクール体験、学内見学、プレゼンテーション、ラーマヤナ物語劇鑑賞

9 月 10 日　ボルブドゥール寺院、バティック見学

9 月 11 日　孤児院訪問、バティック作り体験、マリオボロ通り

9 月 12 日　女性自立支援施設訪問

9 月 13 日　マリオボロ通り

9 月 14 日　ホテルチェックアウト、ジョグジャカルタ発 07：25　ジャカルタ着 08：45

ジャカルタ発 21：25

9 月 15 日　成田着 07：10

●2014 年 12 月 19 日　児童養護施設「こどもの町」見学

概　　要：

インドネシア共和国のジョグジャカルタへ行き、言語や生活環境の異なる海外の人たちとの触れ合いを通して、コミュニケーション・スキルや発信力を育みたかった。

そして、大学で学んでいることを振り返り、それを中軸とした交流企画を立てて実施することで得られる成果から、自身の専門性を見つめなおし、さらにそれを深めていくことを目的とした。

そのため、ガジャマダ大学や女性自立支援施設、孤児院を訪れた。

ガジャマダ大学では、インターナショナルスクールを様々な国々の留学生たちと共に受講した。その後、現地の日本語を専攻している生徒に向けてプレゼンテーションを行った。これをしたことにより、現地の生徒に教科書や本では学ぶことのできない、経験や刺激を与える役割を担うことができたと考える。この経験を通して、より日本を身近に感じ、今後の勉学に対してのモチベーションになることを期待した。

女性自立支援施設では、被害者同士のコミュニケーションを大切にしており、そのために初めにとるコミュニケーションとして、アイスブレイクの知識を必要としていた。カウンセリングについての専門家は数多く、ドイツやアメリカなどの先進国から派遣されているようであった。よってアイスブレイクという専門領域があることを伝えられたことは、女性自立支援施設にとって、大きな発見になり、私たちがその伝達の役割を担うことができたのではないかと考えている。

活動レポート　：

活動をするにあたり、大学で学んでいることを振り返り、それを中軸とした交流企画を立てて実施することで得られる成果から、自身の専門性を見つめなおし、さらにそれを深めていくために、インドネシア共和国のジョグジャカルタへ行き、言語や生活環境の異なる海外の人たちとの触れ合いを通してコミュニケーション・スキルや発信力を育むことを目的とした。

はじめに、ガジャマダ大学では日本語学科の生徒にプレゼンテーションをさせていただいた。私たちのキャンパスライフのことや、学んでいる分野の実体験として「アイスブレイク」という、言語が通じづらくとも、人と人とがコミュニケーションをとりやすい雰囲気を作り、さらに皆でなんらかの目的の達成に、積極的に関わってもらえるように促す技術を実施した。これをしたことによって、現地の生徒とコミュニケーションを図ることができ、また教科書では学ぶことのできない体験を与える役割を担うことができたと考えている。

また、女性自立支援施設を訪れた際、インドネシアの現状を知り、心に重みがのしかかった。男女差別や性教育の不十分さ、家庭内暴力、さらには人身売買などの問題が複雑に絡み合い引き起こす、負のスパイラル。想像もしたことのなかったことに直面したのである。インドネシアでは、日本より強い男女差別がある。それにより、どんなに家庭で暴力を振るわれたとしても、社会で女性が働き、その稼ぎのみで生活することは非常に難しいため、多くの女性が離婚することができずに話し合いの末、家庭に戻ることが大半であった。そしてそのうちの９割ほどの女性が、またうまくいかずにこの施設に戻ってくるというのが現状であった。さらには、性教育が不十分なために、子供が子供を産む実情。その子供は育てることが難しいことから、孤児院や人身売買に利用されてしまう。このような負のスパイラルが巻き起こっていた。これらの女性が施設に入っている期間、鬱などにならないために、同じ境遇をもつ人たち同士でディスカッションをさせていた。そのためには、初対面同士コミュニケーションを取り合うためにも、アイスブレイクのようなレクリエーションを行っているようであった。それに関する知識も、必要とされていた。

また次に訪れた孤児院でも、上記に述べたような問題が深く関係していた。この孤児院では０歳から６歳までの乳幼児の施設であった。養子にもらわれる多くの子が、この期間の子供でないと難しいのが現状である。ここでも男の子がもらわれていく確率が非常に高いようであった。それは、働き手がほしいと予測され、養子にするケースが多いようであった。ここでも男女の性差を感じた。

これらの活動を通し、ASE やアイスブレイクの活動に強く興味を持った。さらに今自身が勉学に励んでいる、マネジメントの知識と掛け合わせることで、海外でのチームビルディングのプログラムを作成したいと考えている。そうすることによって、自身の体験以上のものを、他の学生に味わ

ってほしいと考えるからである。この活動をしたことで、自身の専門性を見つめなおせただけではなく、新たに知識が増え、自分のやりたいことを見つけることができた大きな一歩になった。

アドバイザーコメント ：

この世に生を授かった瞬間，我々はいかに人生を拓くか，この問いに応え（答え）なければならない。解のない禅問答になるかもしれないが，いずれ卒する生物として， es から欲する知性と身体の中で考え続けることになるだろう。その解に近づく重要なファクターに教養（リテラシー）があり，いかにして身に付けるかによって人生観が変わるだろう。歴史，哲学，宗教，文学…。その前提条件に教育が存在するわけだが，一部諸外国において，教育を受ける権利さえも剥奪される現状。今回，佐々木氏の国際交流活動は，その一片を体験しており，大学生の教養教育に十分な価値を見出すことができる。スポーツ科学分野を研究することは，他者との合意形成に基づく，自己欲求をコントロールする，まさに 21 世紀社会に須要なスキル学習であると理解し，ego，super ego こそがスポーツのなかに交錯している視野を持って，途上国社会の現状と課題，あるいは解決策の一助を今後も探究していただきたい。

（スポーツ健康科学部　福ヶ迫 善彦）

活動テーマ　：　国際交流

活動分野　：　国際交流

実 践 者 名　：　村 遥佳（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2 年）

活　動　先　：　インドネシア共和国　ジョグジャカルタ特別州

日程・場所　：

9 月 7 日（日）17：40 成田発　23：30 ジャカルタ着
9 月 8 日（月）05：25 ジャカルタ発　　06：40 ジョグジャカルタ着
9 月 9 日(火) ガジャ・マダ大学（インターナショナルスクール体験、学内見学、プレゼンテーション）　ラーマヤナ舞踏劇　プランバナン寺院
9 月 10 日(水) ボロブドゥール遺跡
9 月 11 日(木) SAYAP　IBU(孤児院) 訪問
9 月 12 日(金) 女性自立支援施設訪問
9 月 13 日(土) マリオボロ通り
9 月 14 日(日) 07：25 ジョグジャカルタ発　08：45 ジャカルタ着　21：25 ジャカルタ発
9 月 15 日(月) 07：10 成田着

12 月 19 日（金）児童養護施設「こどもの町」見学

概　　要　：

ガジャ・マダ大学では、日本語学科の生徒に流通経済大学スポーツ健康科学部の学習内容や日本の文化など、私たちの日常生活についてプレゼンテーションをした。その中でも、チームビルディングのミニゲームをいくつか一緒にやってもらい、どのようなことを学んでいるのか実際に体験してもらった。このプレゼンテーションにより、スポーツを通してコミュニケーションをとり、仲を深めていくきっかけを作っていくことができるなど、スポーツが及ぼす健康づくりや人間関係の構築について、スポーツの役割を伝えることができた。

孤児院の訪問では、乳児から５歳までの子どもが生活している SAYAP　IBU で子どもたちの面倒の手伝いをしてきた。ここに預けられる子どもたちの現状や預けられた理由など、インドネシアの社会背景について施設の方に聞くことができた。

女性自立支援施設では、RIFKA　ANNISA という施設を訪問した。そこに避難している女性たちに直接会って話を聞くことはできなかったが、職員の方々に詳しく説明してもらい施設内を見学することができた。また、女性自立支援施設と孤児院の深い関係性から性教育の重要性、避難してきた女性たちのグループ活動の際に、コミュニケーションスキルを養うためにチームビルディングなどのスポーツの知識の需要があること、日本からの支援をまだ受けていないことなど、私たちが貢献することができるのではないかと、今後の学習につながるものを得ることができた。

活動レポート　：

インドネシアのジョグジャカルタスタディーツアーでは、次の２つのことを目的として行った。まず１つ目に、言語や生活環境が異なる海外の人たちとのふれあいを通して、コミュニケーションスキルや、発信力を育むことである。2 つ目は、大学で学んでいることを振り返り、それを中軸とした交流企画を立て実施することで得られる成果から、自身の専門性を見つめなおし、さらにそれ

を深めていくことにつなげることである。
　以上の目的を定め、主に大学、孤児院、女性自立支援センターの３つを訪問した。
　まず、ガジャ・マダ大学では、日本語学科の学生との交流企画を立てて、私たちの大学生活やスポーツ健康科学部で学んでいることについてプレゼンした。学んでいる内容の１つとして、チームビルディングを紹介し、実際にチームに分かれて行った。言葉が通じなくてもコミュニケーションをとることができ、場の雰囲気も盛り上がり、身体活動を通じたプレゼンによって成功裏に遂行できた。

　次に、乳幼児から５歳までの子どもが生活している SAYAP　IBU という孤児院では、施設の職員の方にお話を聞き、また現地のボランティアの方たちと子どもの面倒を一緒にみた。この施設では、両親を亡くした子どもや経済的な理由から、子育てを拒否された子どもたちが生活をしている。また、男女差別により男の子ばかりが引き取られていた。労働力の一面もあるかもしれない。

　そして、RIFKA　ANNISA という女性自立支援センターでは、いまだに男女差別が残るインドネシアで女性の自立支援を行っている施設である。最大２週間まで非難することができるシェルターがあり、そこには、常に３０人ぐらいの女性が避難している。主に支援が必要な事例としては、夫や家族からの DV、配偶者との死別、経済的貧困状態での子育て、近親者による性的虐待などである。ここでは、非難している女性たちと直接会うことはできなかったが、施設内の見学と職員の方の話を聞かせてもらうことができた。また、女性自立支援センターは孤児院との深い関係性がある。それは、インドネシアでは性教育が全くといっていいほどいきわたっていないため、望まない妊娠をしては子どもを孤児院へ預けての繰り返しで不の連鎖が続いているからである。これらは全くの別物ではなく、切っても切り離せないものである。このことから、貧困層への教育をどうしていくか、つまり教育格差社会の現実には、他にも課題が多く原因が絡み合っていた。

　以上のことから次のように考えた。
　ガジャ・マダ大学で行ったプレゼンからは、スポーツによって人は笑顔になり、絆も深めることができると感じた。また、それは言葉が通じなくともコミュニケーションがとれるため、国境を越えられると実感した。孤児院と女性自立支援センターでは、現状はとてもひどいものだった。さらに私は、ここにいる施設の人々は苦しんでいて可哀想だと思っていた。しかし、私の考えとは裏腹に、問題に対して解決しようと寄り添う人々は、みんなニコニコしていて温かい環境だと感じた。このような場所で、スポーツ健康科学の知識が活用できたら、さらに人々の笑顔を増やすことができるのではないかと考えた。
　今後の目標と課題としては、スポーツ健康科学部で学んでいる分野から、自分の専門分野を深め

ていくことである。特に東南アジアにおけるスポーツを通しての仲間づくり、女性の精神的・身体的健康の維持は、専門的な研究が皆無に等しく、非常に高い需要があるため、大学で学び、得た知識や技術を活用し、今後も継続的にインドネシアに関わっていくことを目標として取り組んでいこうと思う。
このインドネシアのジョグジャカルタスタディーツアーでは、初期の目的を果たすことができ、今後の学習へとつながる大きなきっかけを作ることができた。次の目的・目標を描くことができた。

アドバイザーコメント：

グローバル社会に生きる我々にとって，他国への理解力，あるいはコミュニケーション力は必須である。そのことを大学2年生で体験できたこと，しようと試みたことは高く評価できる。多文化共生社会では，利害が対立し競合する衝突の絶えない社会ともいえ，国境や文化の境界を超えるとマジョリティからマイノリティになる場合もあり，社会的な関係性のなかで絶えず状況関連的に判断する能力を必要とする。多文化共生社会を生きる大学生には，文化的な差異に加え，周辺社会の個人的な差異もある一方で，個人のなかで共通性を持つ存在もあることから，多様性と共通性のなかから解を導く能力を身に付けさせたい。ユネスコが明示する通り，全ての人間は，人格の全面的発達にとって不可欠な体育・スポーツへのアクセスの基本的権利を持っている。体育・スポーツを通じて肉体的，知的，道徳的能力を発達させる自由は，教育体系及び社会生活の他の側面においても保証されなければならない。身体知がノンバーバルな要素を多く包括していることに鑑みれば，村氏の活動は，スポーツの真の価値を理解する経験を得られたのではないか。一人の力はわずかでも，一人ひとりが途上国に目を向けることで，その社会に生きる人びとの人生に変革の鼓動を生み出す可能性がある。とはいえ，一面的・一過性的にとらえるのではなく，スポーツの負の側面，スポーツのジェンダー問題，スポーツの倫理的欠落などの側面から今後も継続的な活動を期待します。

（スポーツ健康科学部　福ヶ迫 善彦）

ＲＫＵ未来力チャレンジ活動報告会

■　ＲＫＵ未来力チャレンジ活動報告会 概要

開催日時： 2015 年 3 月 27 日（金）10：00～16：00
会　　場： 流通経済大学 新松戸キャンパス 講堂
主　　催： 特別奨学生指導計画委員会

　実践者の活動報告書の提出による活動修了に伴い、ＲＫＵ未来力チャレンジ活動報告会を実施した。（指定期間内の活動修了者率は 96%（56 名中 54 名）であった）

＜分科会＞
　午前中は、学部毎に分科会をつくり、ファシリテーターの指導のもと、それぞれの分科会で実践者が作成した発表資料を用いて活動の報告と質疑応答が行われた。（ファシリテーターは各学部のコーディネーターが担当した）

＜活動報告会＞
　各分科会より代表者を 1 組～2 組を選出し、9 組の実践者が講堂にて活動報告と質疑応答を行った。報告後、報告の内容と活動内容を踏まえ、最優秀活動と優秀活動について表彰を行った。

　活動報告会にはアドバイザー教員や学内の教職員の参加と共に、父兄の参加も見受けられた。また、特別奨学生 1 年生の参加を必修とした。質疑応答時には、来年度の活動を見据え、特別奨学生 1 年生から活動についての疑問点や達成感などについて活発な質問がなされた。

　プログラム

10：00～12：00	分科会①～⑤　5 教室
12：00～12：45	休憩
12：45～12：55	開会挨拶（教育学習支援センター 大西センター長） 開会のことば（小池田学長）
12：55～13：00	2014 年度ＲＫＵ未来力チャレンジ活動ふりかえり（立川委員）
13：00～14：10	活動報告　5 事例
14：10～14：20	休憩
14：20～15：16	活動報告　4 事例
15：16	審査
15：21	表彰・総評（佐藤校友会会長）
15：36	総括と閉会挨拶（教育学習支援センター 米原副センター長）

流通経済大学 特別奨学生プログラム

2014年度 RKU未来力チャレンジ 活動報告会

日時：2015 年 3 月 27 日（金）12：45 ～ 16：00

会場：流通経済大学 新松戸キャンパス 講堂

■ プログラム

12：45	**開会挨拶**	教育学習支援センター長	大西 哲
	開会のことば	流通経済大学長	小池田 冨男
12：55	**2014 年度 活動ふりかえり**	社会学部 教授	立川 和美
13：00	**経済研究サークルの立ち上げ**	経済学部 経済学科	松山 文哉
13：14	**経営学部 2 年ゼミ選択相談会の開催**	経済学部 経営学科	渡辺 篤司 佐高 友滉 土屋 宗之
13：28	**障がいがある子どもとの地域交流イベントに関わって**	社会学部 社会学科	齋藤 優華
13：42	**海外旅行の魅力 ～ヨーロッパツアーのススメ～**	社会学部 国際観光学科	片倉 美穂
13：56	**先輩学生へのインタビュー ～新入生向けDVD作成～**	社会学部 国際観光学科	山内 菜摘
14：10 ～ 14：20	**休 憩**		
14：20	**日本の物流事業に貢献した梁瀬仁先生の軌跡を辿って**	流通情報学部 流通情報学科	小野寺 隼
14：34	**野球教室で恩返 ～墨田区出身の大学生が教える野球教室～**	法学部 自治行政学科	髙橋 俊
14：48	**児童の行動変容に対する一考察 －小学校一年生への学級活動補助を通じて－**	スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科	内山 結衣 佐藤 莉々亜
15：02	**貧困層の子供と女性の教育権に関する検討 －インドネシアと日本の実態から－**	スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科	佐々木 有里 村 遥佳
15：16	**審 査**		
15：21	**表 彰・総 評**	流通経済大学校友会長	佐藤 克實
15：36	**統括と閉会挨拶**	教育学習支援センター副長	米原 立将

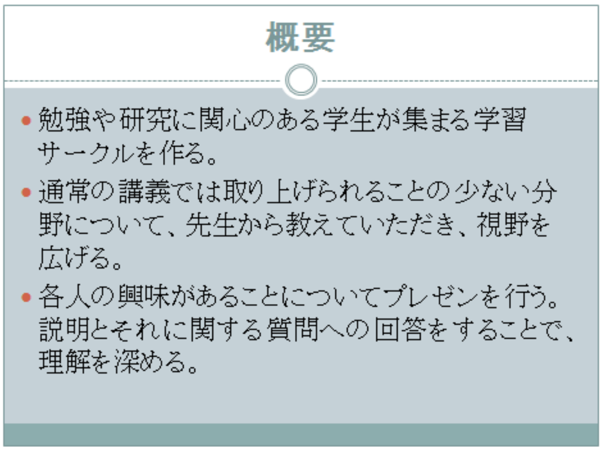
RYUTSU KEIZAI UNIVERSITY

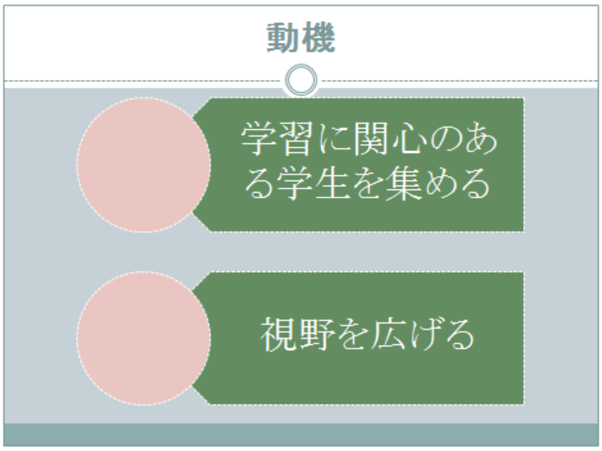
報告課題名　：　経済研究サークルの立ち上げ

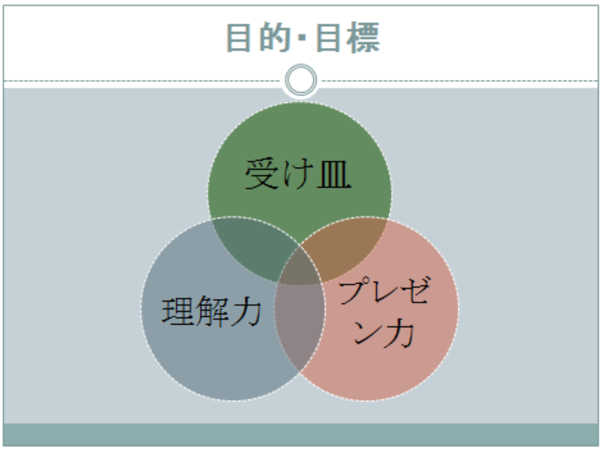
活動分野　：　学生生活支援

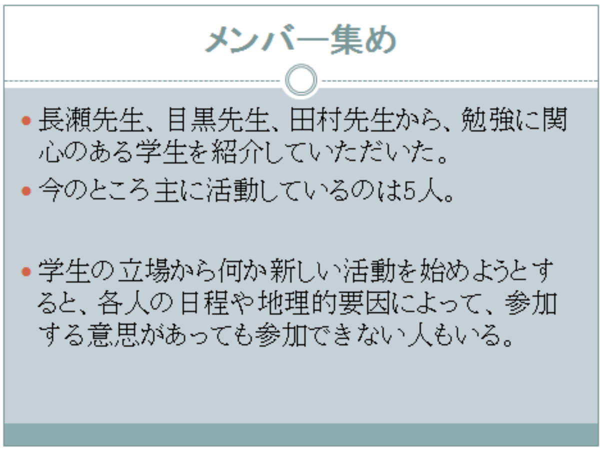
報告者名　：　松山　文哉（経済学部　経済学科　2 年）

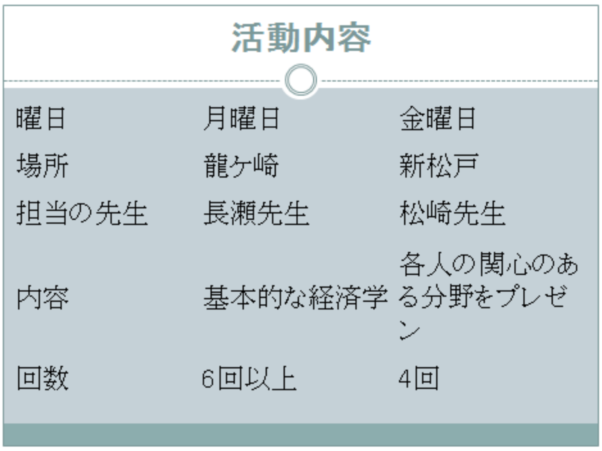
活　動　先　：　流通経済大学　経済研究サークル（仮）











勉強会

- 先生が教えるだけでなく、わかっている学生が説明したり、考えを出し合ったりする、参加型の形式を採った。

野村證券の見学

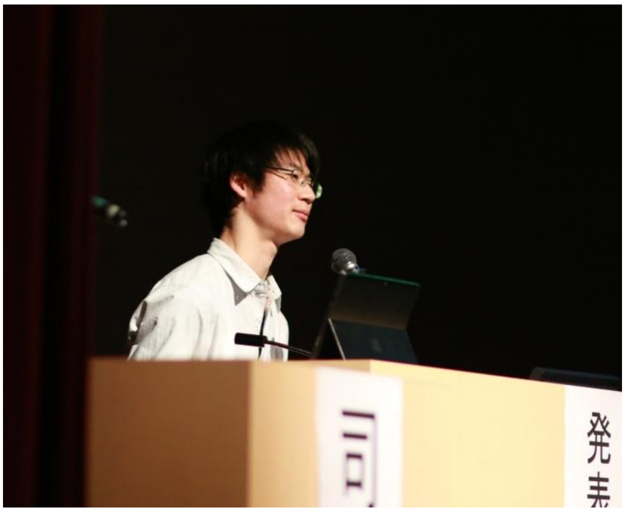
- 2月13日(NISAの日)に野村證券の見学に行った。
- 普段の教室内では勉強できない実践的内容も多くあり、実際の業界について知ることができた。

成果、感想

- 積極的に発言をすることができた。
- 経済学の理解がより深まった。
- 勉強だけでなく、仲間作りにもつながった。

これからの目標

- 新入生にも教えられるように、理解を深める。
- 説明する力や聞く力を伸ばす。
- 学生の能力を引き出すための活動をこれからも続けていきたい。

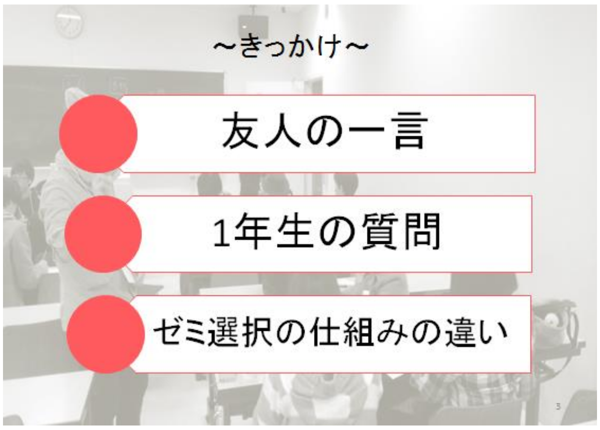


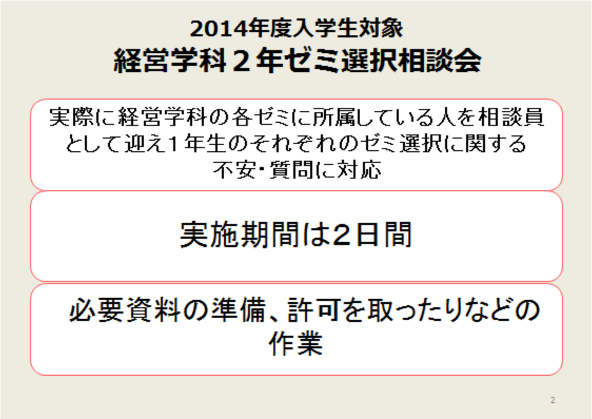
報告課題名　：　経済学部２年ゼミ選択相談会の開催

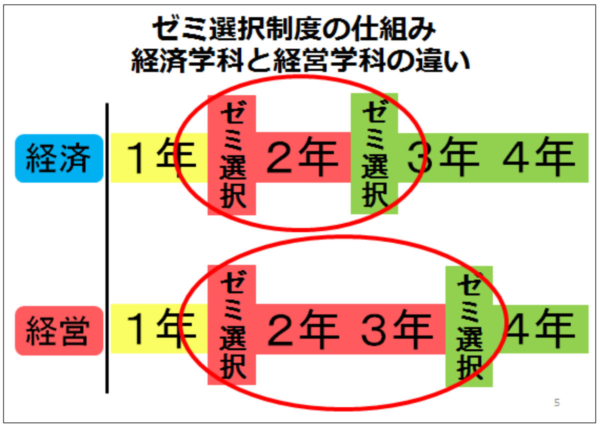
活動分野　：　学生生活支援

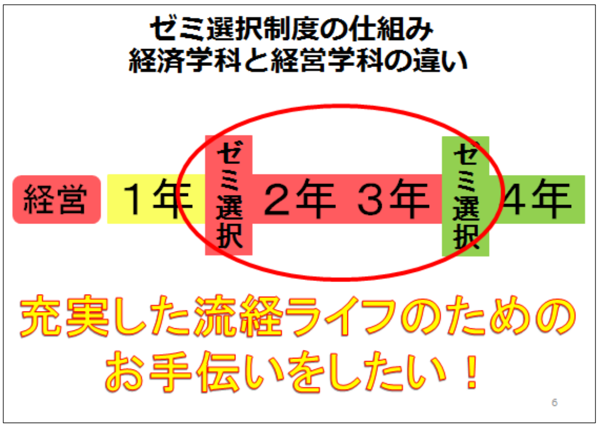
報告者名　：　渡辺　篤司（経済学部　経営学科　2 年）
　　　　　　　　佐高　友滉（経済学部　経営学科　2 年）
　　　　　　　　土屋　宗之（経済学部　経営学科　2 年）

活　動　先　：　流通経済大学　新松戸キャンパス

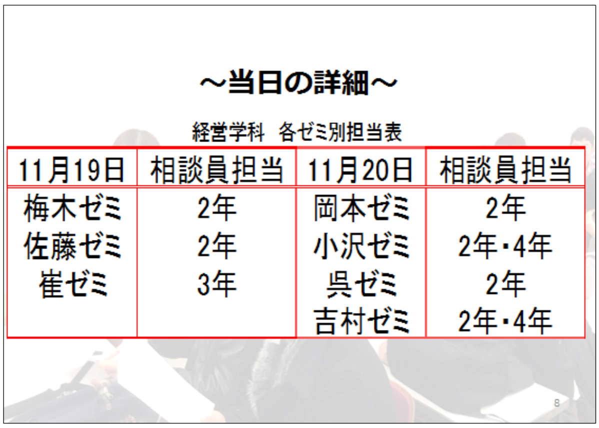


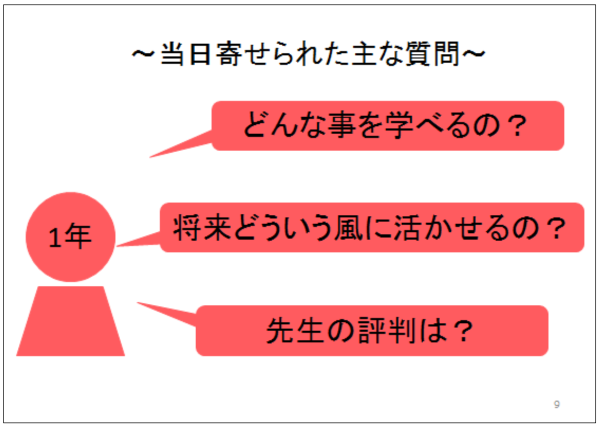




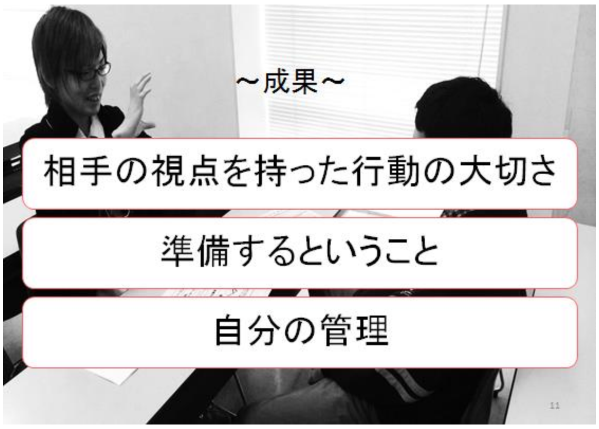


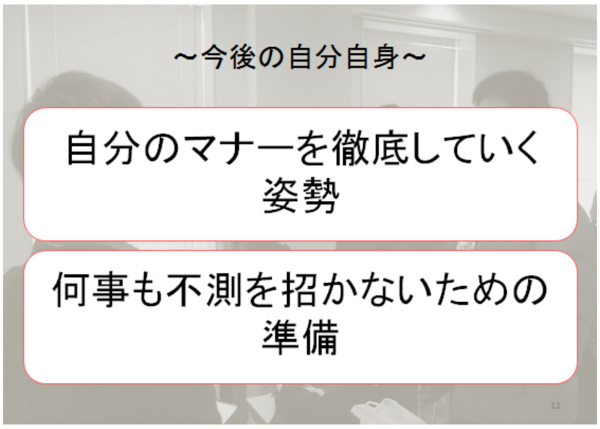
11月19日・20日


～当日の詳細～
経営学科　各ゼミ別担当表
11月19日
相談員担当
11月20日
相談員担当
梅木ゼミ
2年
岡本ゼミ
2年
佐藤ゼミ
2年
小沢ゼミ
2年・4年
崔ゼミ
3年
呉ゼミ
2年
吉村ゼミ
2年・4年
8


～当日寄せられた主な質問～
どんな事を学べるの？
将来どういう風に活かせるの？
先生の評判は？
1年
9

～感想･気付いたこと～
人をどう管理するか
甘い考えを発見＆痛感
10


～成果～
相手の視点を持った行動の大切さ
準備するということ
自分の管理
11

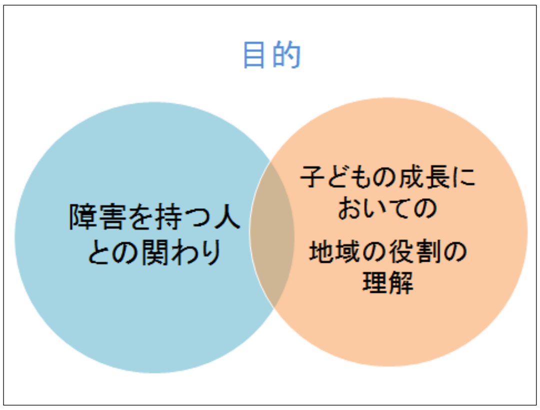

～今後の自分自身～
自分のマナーを徹底していく
姿勢
何事も不測を招かないための
準備
12

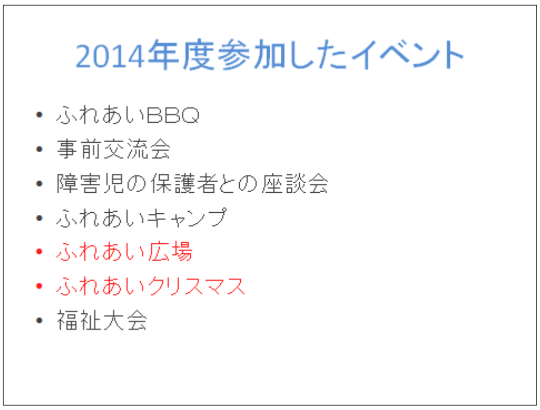
報告課題名 ： 障がいのある子どもとの地域交流イベントに関わって

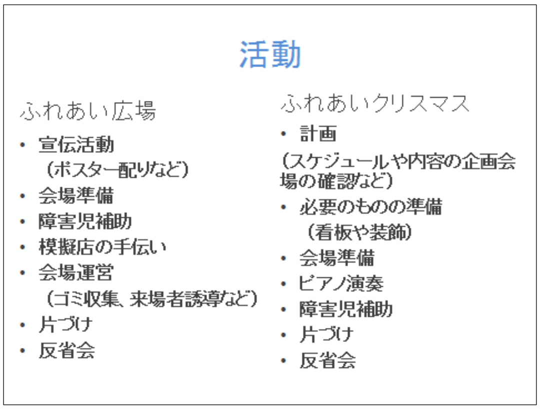
活動分野 ： 社会福祉

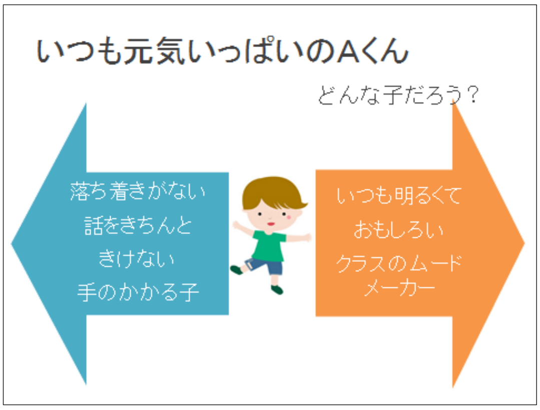
報告者名 ： 齋藤 優華（社会学部 社会学科 2 年）

活 動 先 ： 龍ケ崎市社会福祉協議会

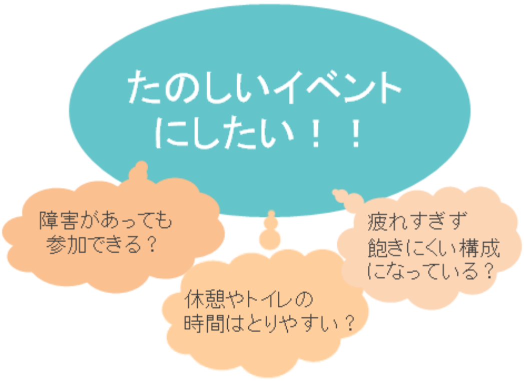








1．イメージする

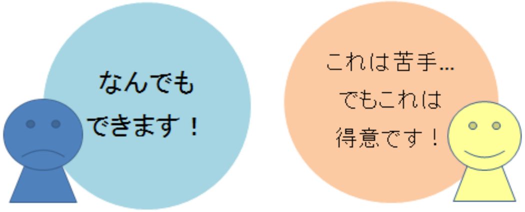


計画は実行者を理解し
想像することが大切

（例）資格取得に向けての勉強計画
毎週10ページよりも
自分の得意不得意を理解し、不得意に重点を置くほうがよい

2．自分の良いところを活かそう

どちらが魅力的であり、印象的？



なんでも完璧にできる人は少ない、
欠点のない人間より、長所の光る人間に。

3．周囲の人を頼る

1．イメージする

2．自分の良いところを活かす

3．周囲の人を頼る

未来力チャレンジ

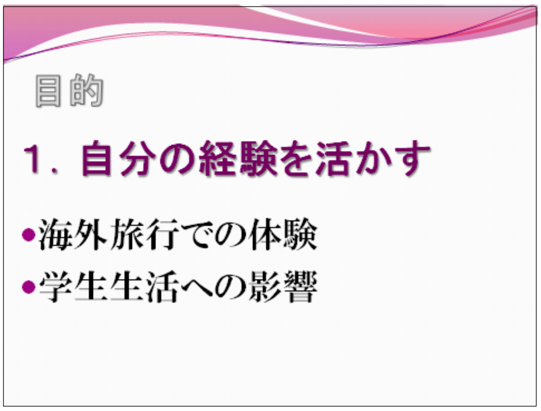
- 計画
  概要（活動の内容を具体的に）
  目標（活動の目標を多項目に分け、具体的に）
  スケジュール
- まとめ
  活動内容（実際に行った活動、自分が担った役割などを具体的に）
  活動日程・場所
  感想・成果（面白かったこと、新たな発見、今後の自分に活かしたいこと）

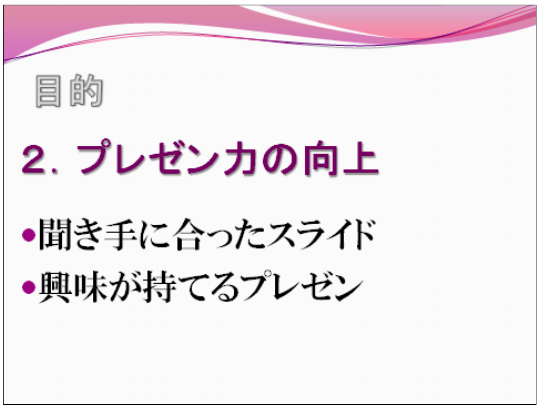
報告課題名 ： 人に伝わるプレゼンテーション ～海外旅行の魅力～

活動分野 ： 学生生活支援

報告者名 ： 片倉 美穂（社会学部 国際観光学科 2 年）

活 動 先 ： 第 39 回ヨーロッパツアー説明会、国際観光学科 1 年藤野ゼミ・秋山ゼミ





目的

2. プレゼン力の向上

- 聞き手に合ったスライド
- 興味が持てるプレゼン

活動詳細

1. **第39回ヨーロッパツアー説明会**

- **第1回：2014/11/10(月)16:00~**
- **第2回：2014/11/21(金)16:00~**

前回のツアー参加者として…

・ツアーの魅力・パリの楽しみ方・海外旅行の留意点
…を紹介

目標

- **ツアーへの関心を高める**
- **海外旅行の不安を減らす**

活動詳細

2. 観光学科1年ゼミ訪問

- 藤野ゼミ：2015/1/14(水)1限時
- 秋山ゼミ：2015/1/15(木)4限時

ヨーロッパツアーでの経験をもとに
学生のうちに海外旅行を経験する重要さ
海外旅行が学生生活にもたらす影響
…を伝えた

目標

- 海外旅行の魅力を伝える
- 学生生活への影響
- 飽きさせないプレゼン

目的

2. プレゼン力の向上

- 聞き手に合ったスライド
- 興味が持てるプレゼン

活動詳細

1. 第39回ヨーロッパツアー説明会

- 第1回：2014/11/10(月)16:00~
- 第2回：2014/11/21(金)16:00~

前回のツアー参加者として…

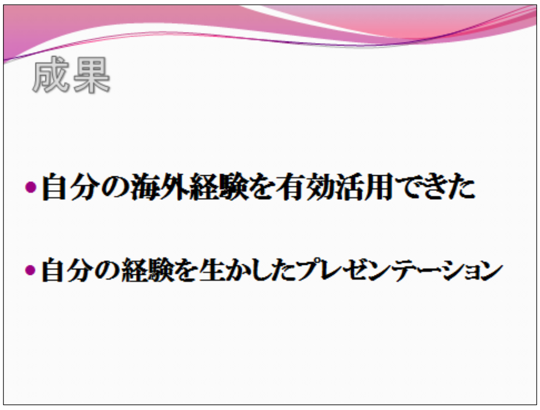
・ツアーの魅力・パリの楽しみ方・海外旅行の留意点
…を紹介

海外で考える
自分の将来
観光に関する職は？

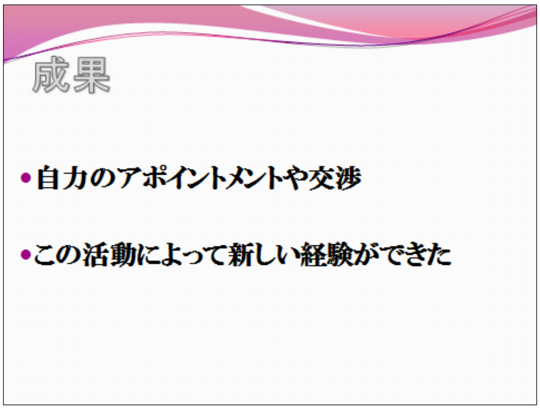
海外で感じる
五感を使う

見る
本物を見る・大きさに気づく
聞く
BGM・暮らしの音・行きかう車や人
味わう
本場の味・日本食との違い
触れる
物の質感・雰囲気
嗅ぐ
空気のにおい

海外に行こう！
自分を成長させる旅へ・・・


成果
•自分の海外経験を有効活用できた
•自分の経験を生かしたプレゼンテーション

成果
•プレゼンテーションの効果的な使い分け
説明会参加者
・海外旅行に興味がある人
ツアーの魅力メイン
1年ゼミ
・不特定多数
・興味なし？
海外旅行の本質


成果
•自力のアポイントメントや交渉
•この活動によって新しい経験ができた

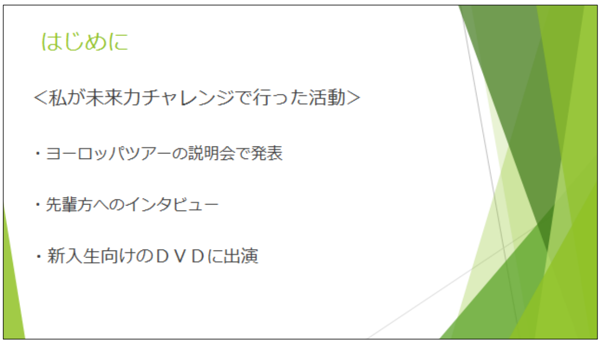
まとめ

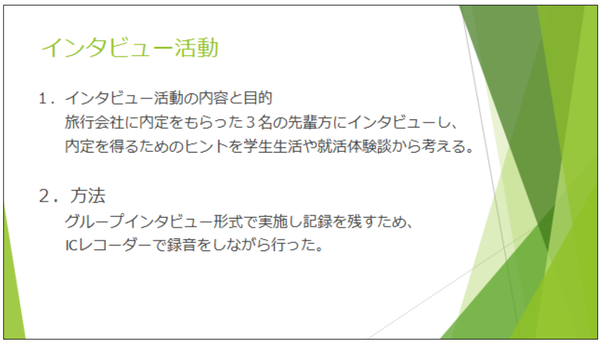
報告課題名　：　先輩学生へのインタビュー　～新入生ＤＶＤの作成～

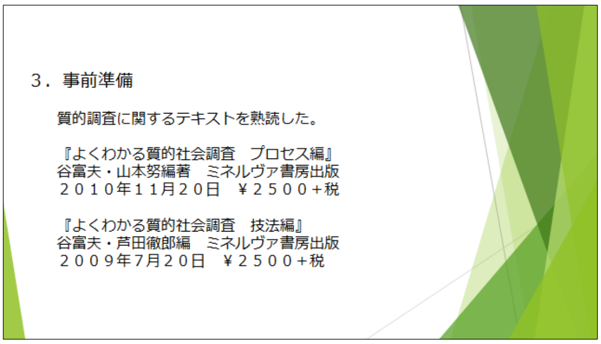
活動分野　：　学生生活支援

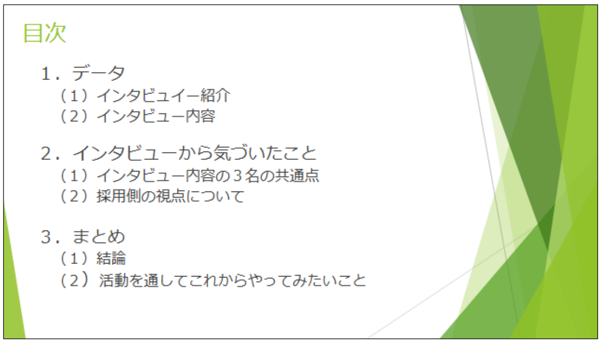
報告者名　：　山内 菜摘（社会学部 国際観光学科 2 年）

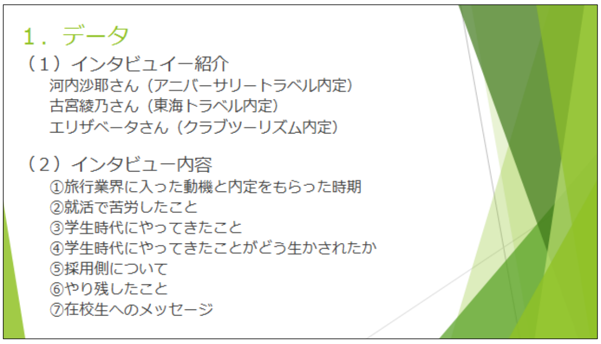
活 動 先　：　流通経済大学内

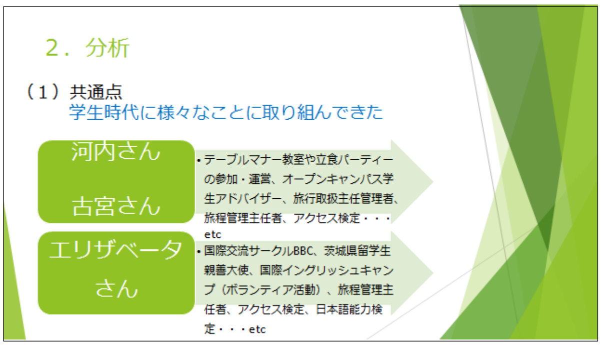


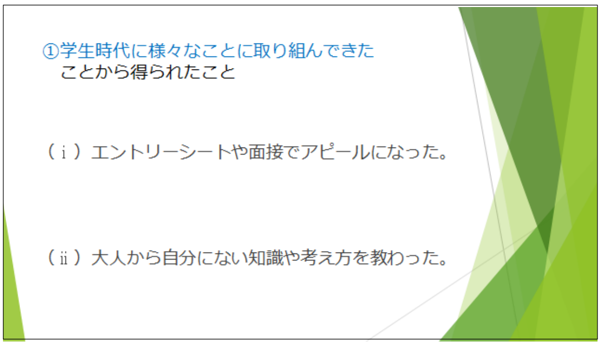


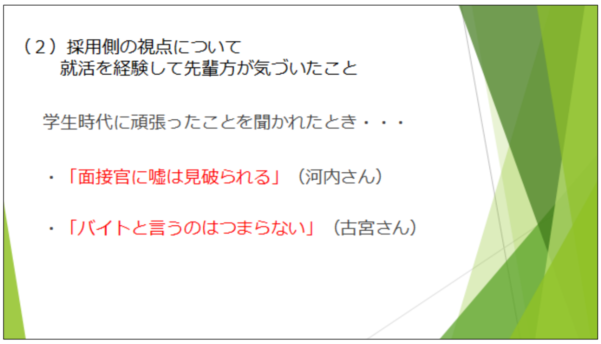


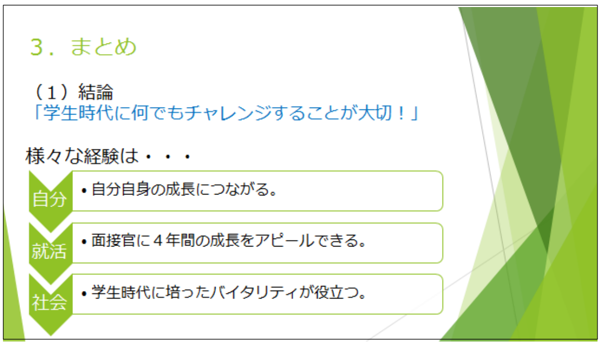


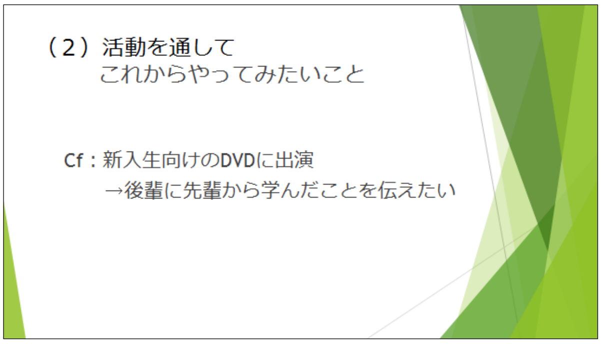



2．分析
（1）共通点
学生時代に様々なことに取り組んできた
河内さん
古宮さん
・テーブルマナー教室や立食パーティーの参加・運営、オープンキャンパス学生アドバイザー、旅行取扱主任管理者、旅程管理主任者、アクセス検定・・・etc
エリザベータさん
・国際交流サークルBBC、茨城県留学生親善大使、国際イングリッシュキャンプ（ボランティア活動）、旅程管理主任者、アクセス検定、日本語能力検定・・・etc


①学生時代に様々なことに取り組んできたことから得られたこと
（ⅰ）エントリーシートや面接でアピールになった。
（ⅱ）大人から自分にない知識や考え方を教わった。


（2）採用側の視点について
就活を経験して先輩方が気づいたこと
学生時代に頑張ったことを聞かれたとき・・・
・「面接官に嘘は見破られる」（河内さん）
・「バイトと言うのはつまらない」（古宮さん）


3．まとめ
（1）結論
「学生時代に何でもチャレンジすることが大切！」
様々な経験は・・・
自分
・自分自身の成長につながる。
就活
・面接官に４年間の成長をアピールできる。
社会
・学生時代に培ったバイタリティが役立つ。


（2）活動を通して
これからやってみたいこと
Cf：新入生向けのDVDに出演
→後輩に先輩から学んだことを伝えたい

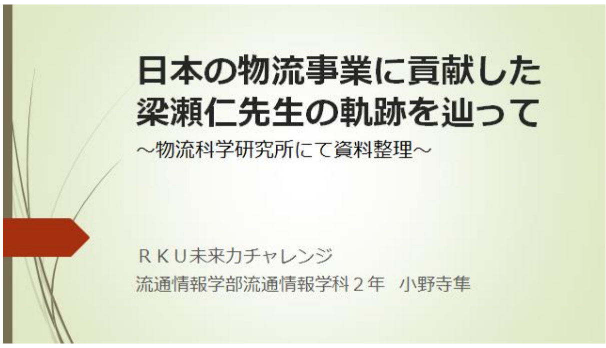
発表者

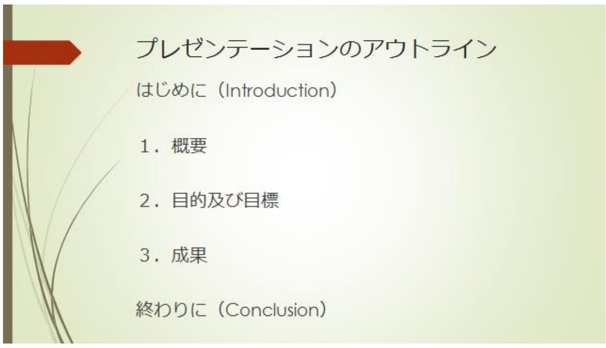
報告課題名　：日本の物流事業に貢献した梁瀬仁先生の軌跡を辿って　～物流科学研究所にて資料整理～

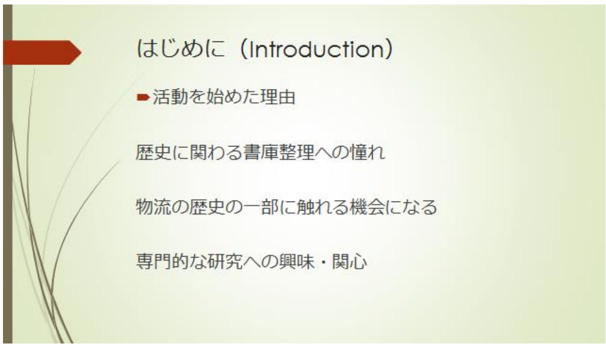
活動分野　：　フィールドワーク

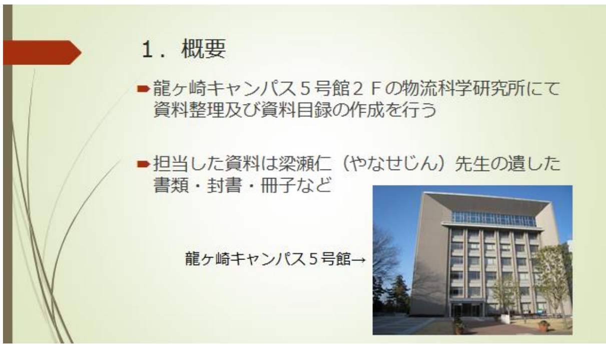
報告者名　：　小野寺　隼（流通情報学部　流通情報学科　2 年）

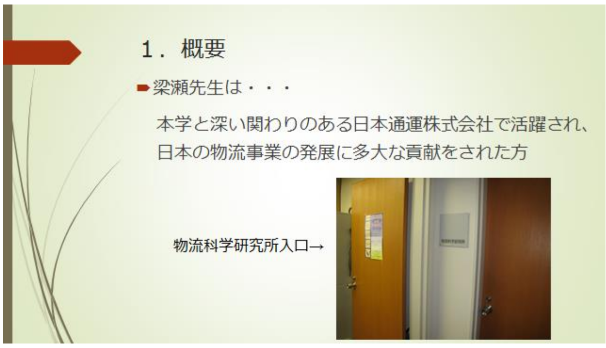
活　動　先　：　物流科学研究所（龍ヶ崎キャンパス５号館）

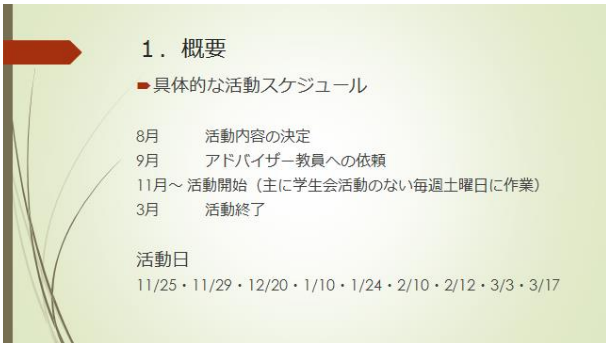












１．概要

- 資料目録の作成では下記の形式でパソコンのExcel機能を利用して資料の形状や詳細をまとめた

資料目録の一部→

70	書類	車の発生と騎馬の発展（1） ―交通の始原―	14枚 大矢[illegible]
70	冊子	第3回欧州物的流通視察団ご案内	主催 荷役研究所 昭和46年4月17日－5月15日、29日間
71	封書	早稲田大学 システム科学研究所報 No.25 物流の動向 シンポジウム報告	資料18部 1981年12月
71	封書	機械学会誌 解説「これからの物流機器のあり方」	レポート29部 昭和57年5月
71	封書	新しい出荷と輸送 原稿資料	日本通運株式会社
		日通考古帳 冊子切り抜き	21枚
		経営に立つ流通革命	コピー21枚
		荷役と機械誌 倉庫関係記事	薄いレポート用紙21枚 昭和40年1月
71	封書	日本通運（株） 技術開発部長 梁瀬氏宛て	日本包装技術協会
		APO包装技術指導者研修コーステキスト 運搬管理と倉庫管理	書類一式 1973年10月5日
		CARGO HANDLING MANAGEMENT AND WAREHOUSE MANAGEMENT	英文冊子 APO PROJECT 1973.10.5
		PENT-73 包装技術研修コース 標準マニュアル	APO PROJECT 社団法人 日本包装技術協会 昭和48年10月2日（火）－11月10日（土）
		包装技術研修コース 明細日程表	APO PROJECT 昭和48年10月2日（火）－11月10日（土） 6週間
		MARKETING AND PACKAGING	英文冊子 APO PROJECT
		UNIT LOAD SISTEM	英文冊子 APO PROJECT
		QUALITY CONTROL	英文冊子 APO PROJECT
		MATERIAL HANDLING AND WAREHOUSING	英文冊子 APO PROJECT

２．目的及び目標

★目的

日本の物流の発展に貢献した研究者の歴史に関わり、新たな発見を得ること

２．目的及び目標

★目標

・梁瀬先生の資料のまとめの完遂

・自分にとって成長につながることを見つける

物流科学研究所内の様子Ⅰ→

３．成果

・全資料の整理及び資料目録の作成

・一部資料（写真など）の寄託

・自身の打ち込み作業への慣れ

物流科学研究所内の様子Ⅱ→

３．成果

- 今回の活動を通して学んだこと

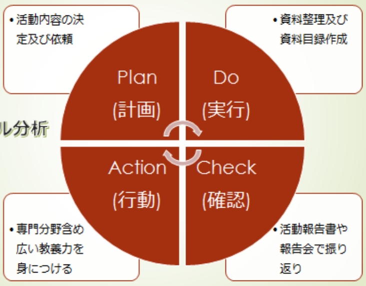
１．教養力（幅広い分野の学習）

２．流通チャネル構築の裏側（歴史的背景）

３．日本における物流の大切さ

３．成果

ＰＤＣＡサイクル分析



終わりに（Conclusion）

大切なことは自分の未来にどう生かすか

『現状に甘んじることなく、進化していかないと未来はない。』

『人生には進歩と退歩の二つしかない。
現状維持とはつまり退歩している証なのだ。』

おわり

ご清聴ありがとうございました

報告課題名 ： 野球教室で恩返し ～墨田区出身の大学生が教える野球教室～

活動分野 ： 墨田区野球連盟

報告者名 ： 高橋 俊（法学部 自治行政学科 2 年）

活 動 先 ： 墨田区野球連盟

RKU未来力チャレンジ

～野球教室で恩返し～

実施者名

流通経済大学　法学部　自治行政学科
硬式野球部　1317072　　高橋俊

活動概要

故郷で野球教室開催

活動目的Ⅰ

- 人間として一回り大きくなる

→野球というチームスポーツの性質上、誰かの意見や流れに乗ることが多く、自分から何かを発信することが少なかった。

活動目的Ⅱ

- 社会勉強

→小学校から今に至るまで、野球を続けているため、バイトなどの経験がほとんどなく、同年代の人に比べ社会での経験が少ない。

活動目的Ⅲ

- 野球で故郷に恩返し

→お世話になった墨田区に少しでも何らかの形で恩返しがしたかった。

活動の中で担った役割

- 企画の発起人
  …人間として一回り成長する
- 野球教室の事務管理
  …社会勉強
- 野球教室指導者
  …野球で故郷に恩返し

活動内容

『墨田区出身の大学生が教える野球教室』
というテーマで自身が中学時代に在籍した吾嬬第二中学校野球部が主催といった形で開催された。

活動内容

- 当日は主催の吾嬬二中を含め全国大会に出場した鐘ヶ淵中学校など5チーム、総勢67人の中学生が集まってくれました。

活動内容

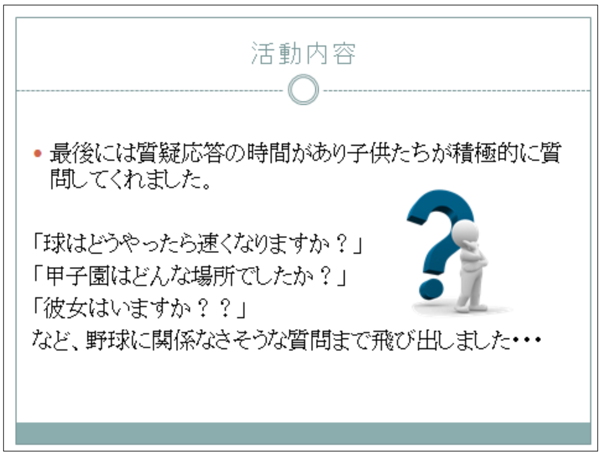
・当日の指導者は小学校時代に所属していた墨田選抜というチームメイトに声をかけました

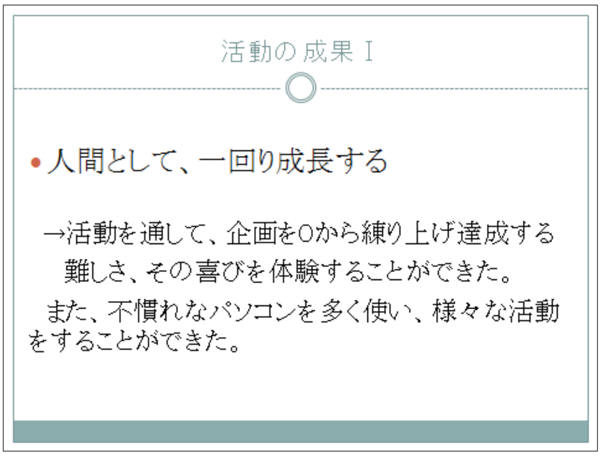
高橋俊・・・流通経済柏/千葉ベスト４
安西航洋・・・関東一高/甲子園出場
李福建・・・国学院久我山/甲子園出場
桶田祐史・・・横浜高校/甲子園出場
龍谷晃議・・・二松学舎付属/東京ベスト８
芦埜文則・・・葛飾野/東京ベスト16

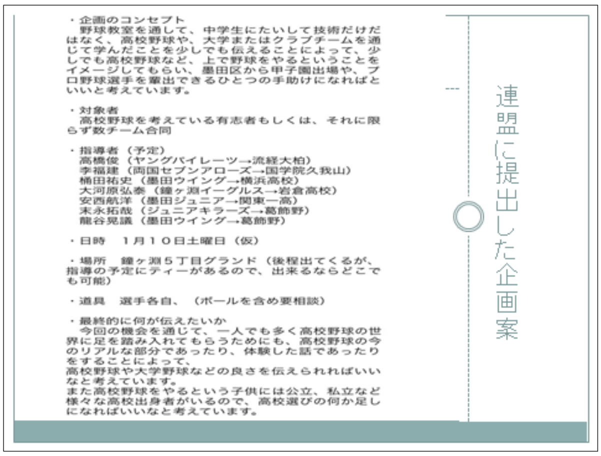
当時所属していた墨田選抜

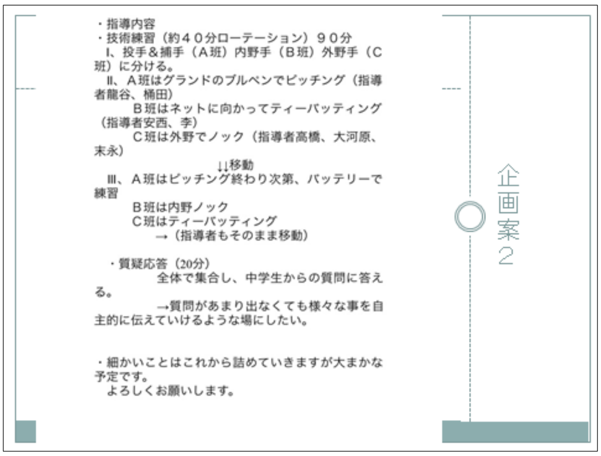
活動内容

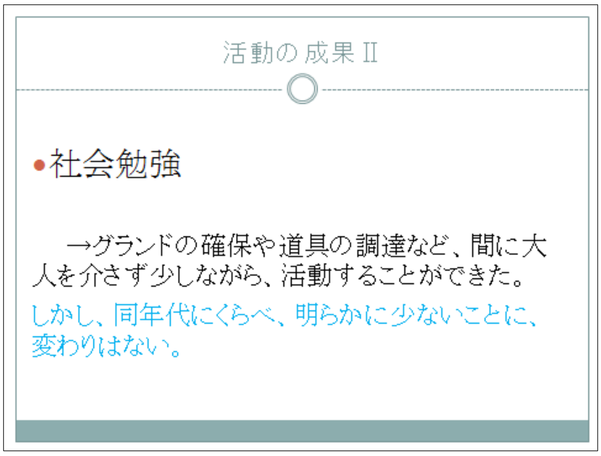
- 野球教室は全国を経験した選手や、現在も第一線で活躍する選手たちによって、約3時間高いレベルで技術指導が行われました。

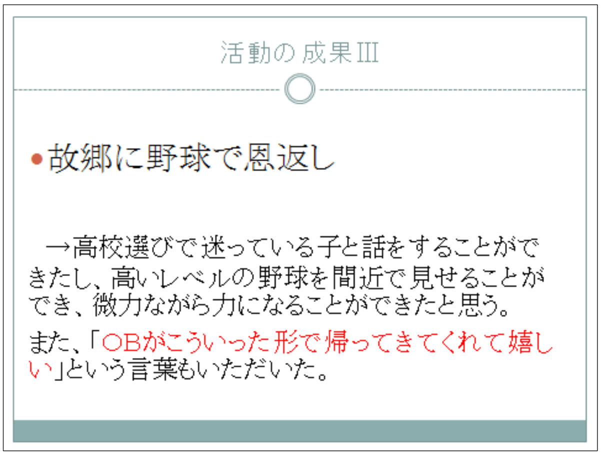

活動内容
最後には質疑応答の時間があり子供たちが積極的に質問してくれました。
「球はどうやったら速くなりますか？」
「甲子園はどんな場所でしたか？」
「彼女はいますか？？」
など、野球に関係なさそうな質問まで飛び出しました・・・

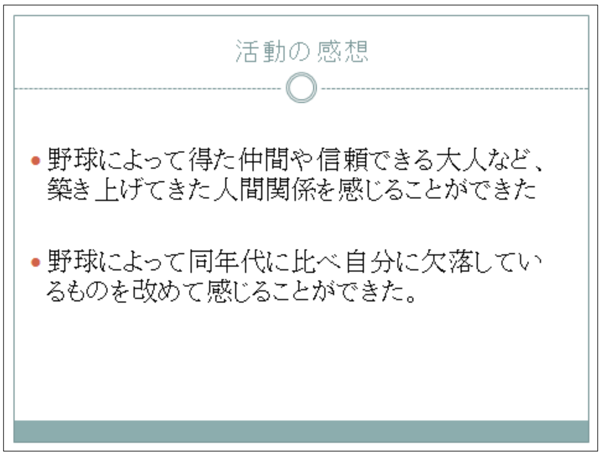

活動の 成果 I
人間として、一回り成長する
→活動を通して、企画を0から練り上げ達成する難しさ、その喜びを体験することができた。
また、不慣れなパソコンを多く使い、様々な活動をすることができた。


・企画のコンセプト
野球教室を通して、中学生にたいして技術だけだはなく、高校野球や、大学またはクラブチームを通じて学んだことを少しでも伝えることによって、少しでも高校野球など、上で野球をやるということをイメージしてもらい、墨田区から甲子園出場や、プロ野球選手を輩出できるひとつの手助けになればといいと考えています。
・対象者
高校野球を考えている有志者もしくは、それに限らず数チーム合同
・指導者（予定）
高橋俊（ヤングパイレーツ→流経大柏）
李福建（両国セブンアローズ→国学院久我山）
桶田祐史（墨田ウイング→横浜高校）
大河原弘泰（鐘ヶ淵イーグルス→岩倉高校）
安西航洋（墨田ジュニア→関東一高）
末永拓哉（ジュニアキラーズ→葛飾野）
龍谷晃議（墨田ウイング→葛飾野）
・日時　１月１０日土曜日（仮）
・場所　鐘ヶ淵５丁目グランド（後程出てくるが、指導の予定にティーがあるので、出来るならどこでも可能）
・道具　選手各自、（ボールを含め要相談）
・最終的に何が伝えたいか
今回の機会を通じて、一人でも多く高校野球の世界に足を踏み入れてもらうためにも、高校野球の今のリアルな部分であったり、体験した話であったりをすることによって、
高校野球や大学野球などの良さを伝えられればいいなと考えています。
また高校野球をやるという子供には公立、私立など様々な高校出身者がいるので、高校選びの何か足しになればいいなと考えています。
連盟に提出した企画案


・指導内容
・技術練習（約４０分ローテーション）９０分
Ⅰ、投手＆捕手（Ａ班）内野手（Ｂ班）外野手（Ｃ班）に分ける。
Ⅱ、Ａ班はグランドのブルペンでピッチング（指導者龍谷、桶田）
Ｂ班はネットに向かってティーバッティング（指導者安西、李）
Ｃ班は外野でノック（指導者高橋、大河原、末永）
↓↓移動
Ⅲ、Ａ班はピッチング終わり次第、バッテリーで練習
Ｂ班は内野ノック
Ｃ班はティーバッティング
→（指導者もそのまま移動）
・質疑応答（20分）
全体で集合し、中学生からの質問に答える。
→質問があまり出なくても様々な事を自主的に伝えていけるような場にしたい。
・細かいことはこれから詰めていきますが大まかな予定です。
よろしくお願いします。
企画案２


活動の 成果 II
社会勉強
→グランドの確保や道具の調達など、間に大人を介さず少しながら、活動することができた。
しかし、同年代にくらべ、明らかに少ないことに、変わりはない。


活動の 成果 III
故郷に野球で恩返し
→高校選びで迷っている子と話をすることができたし、高いレベルの野球を間近で見せることができ、微力ながら力になることができたと思う。
また、「OBがこういった形で帰ってきてくれて嬉しい」という言葉もいただいた。


活動の感想
野球によって得た仲間や信頼できる大人など、築き上げてきた人間関係を感じることができた
野球によって同年代に比べ自分に欠落しているものを改めて感じることができた。

活動の感想
何より幼少期から続けている野球で活動できたことが自分の大きな自信となり財産となりました

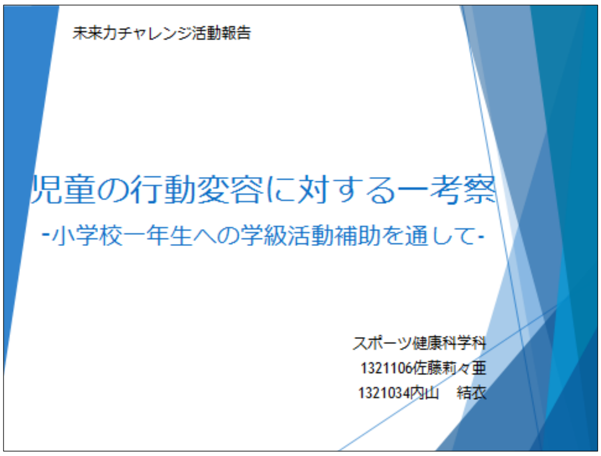
発表者

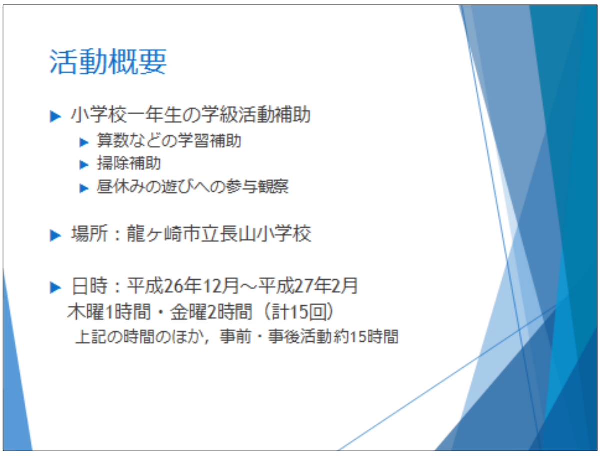
報告課題名　:　児童の行動変容に対する一考察　- 小学校一年生への学級活動補助を通して -

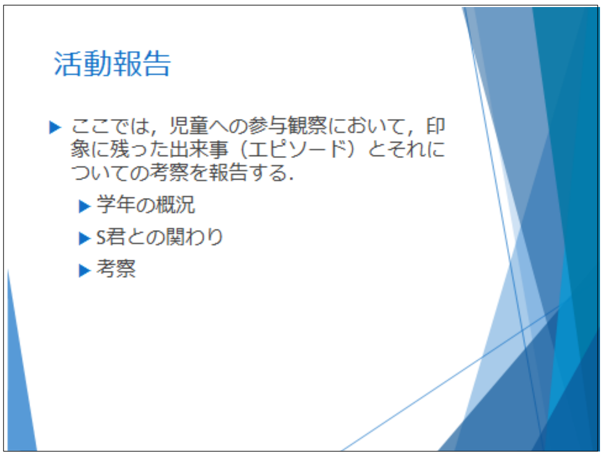
活動分野　:　地域貢献

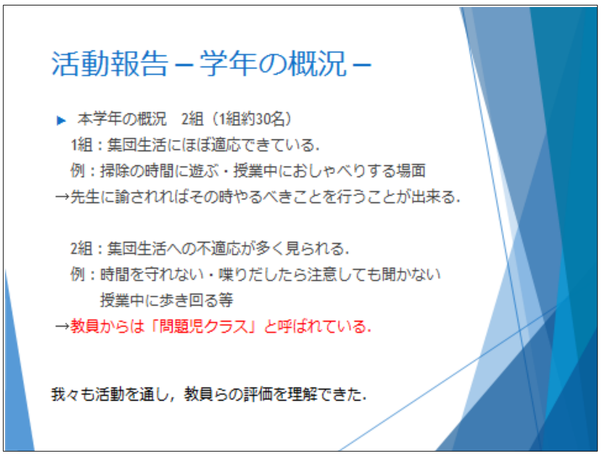
報告者名　:　佐藤　莉々亜（スポーツ健康科学部　スポーツ健康科学科　2 年）
　　　　　　　内山　結衣（スポーツ健康科学部　スポーツ健康科学科　2 年）

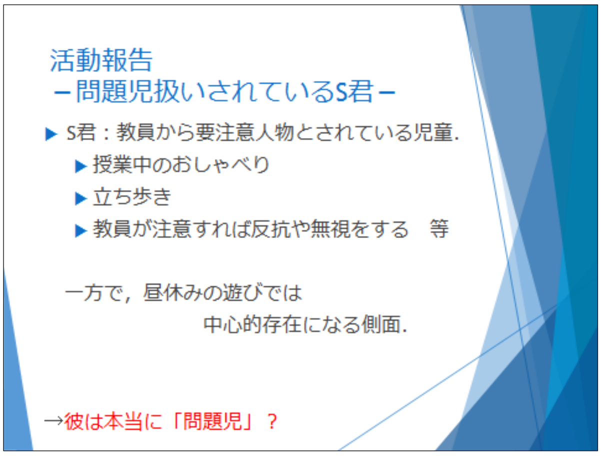
活 動 先　:　茨城県龍ケ崎市立長山小学校

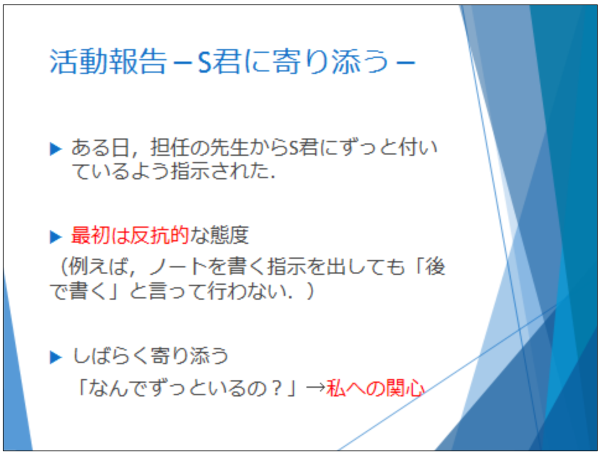












活動報告－S君との対話－

- ある時、自身のことについて語り始めた．

「Sね，サッカーをしているんだ．」
（控えめに話し始める）
<いつやってるの？>
「火曜日だよ．」
（彼のことを知るチャンスだと思い，できるだけこの話題を広げようとした．）

<どこでやっているの？>
「この学校の近くのグラウンド．」

活動報告－S君との対話－

<ポジションはどこなの？>
「キーパーだよ．この前ね，大会で優勝して大きいトロフィーをもらったんだ！」
（目を輝かせ，自信ありげに）

質問に答えるだけでなく，
主体的に話題を広げる発言

活動報告－S君との対話－

<S君サッカーうまいんだね！それなら将来はうちの大学にきなよ．強いんだよ！>
「それは嫌だ．」（表情が暗くなる）
<なぜ？>
「強いところは体が大きい人がいっぱいいるでしょ？Sは小さいから強いところにいったら負けちゃうもん．」
（弱気で悲しげな表情を浮かべる）
<まだ一年生だからだよ！これからどんどん大きくなるから大丈夫だよ！>
「そうかなあ？」と少しだけ表情に明るさが戻った

活動報告－S君の変化－

- S君との対話を通じた理解
  - 興味・関心
  - 抱えている不安
- その後の変化
  - 反抗的な態度から素直な態度へ
  - ・積極的活動（指示に対して即座に行動）
  - ・他者援助（他の友達や教員の手伝い）

考察１－行動に表れる心－

- なぜ行動が変容したのか？（ひとつの仮説）
- 彼の話に興味を持ち，熱心に聞いた

→存在価値の承認体験

S君のこれまでの問題行動は，性格特性に因るものだけではなく，自分に興味・関心を向け，存在価値を認めてほしいという心の表れであるとも考えられる．

- 考察の背景
  - アダルトチルドレン
  - ジュニアスポーツにおける子どものメッセージ性

考察２－子どもの心への理解－

- S君は「問題児」だったのか？
- 大人は社会的に望ましいとされる規範を熱心に教育し，また，その規範で子どもを評価しがちである．
- 子どもが起こす行動や態度の背景について理解を深める努力が必要ではないか．
- ただし，それは一人の教員が担うのは難しいため，教員とは立場を異にする大学生などがその一助となる可能性がある．

→本学の実学主義の発展可能性

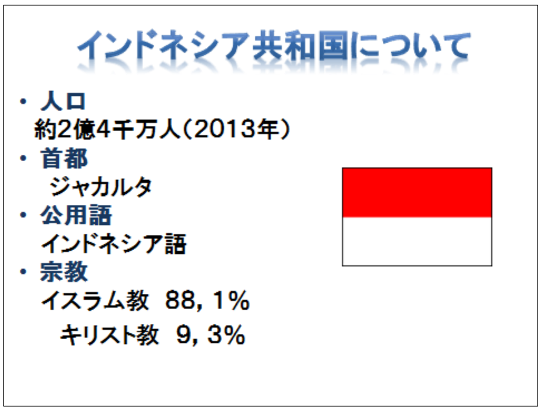
ご清聴ありがとうございました．

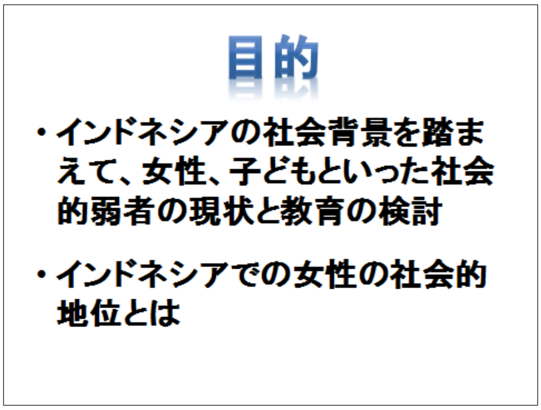
報告課題名　：　貧困層の子どもと女性の教育権に関する検討　–インドネシアと日本の実態から–

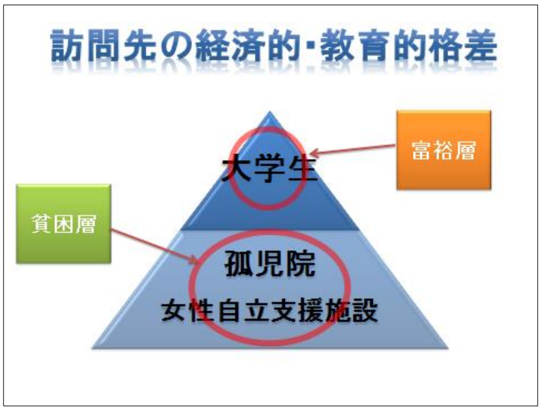
活動分野　：　国際交流

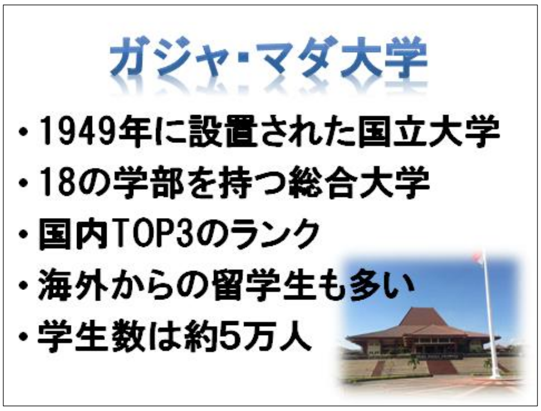
報告者名　：　佐々木 有里（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2 年）
　　　　　　　　村 遥佳（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2 年）

活 動 先　：　インドネシア共和国　ジョグジャカルタ特別州






訪問先の経済的・教育的格差
富裕層
大学生
貧困層
孤児院
女性自立支援施設


ガジャ・マダ大学
・1949年に設置された国立大学
・18の学部を持つ総合大学
・国内TOP3のランク
・海外からの留学生も多い
・学生数は約5万人

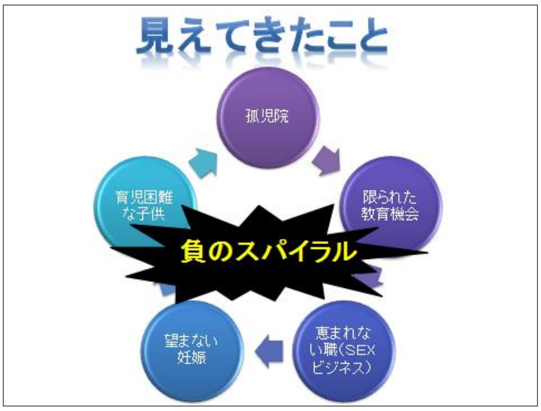
UNIVERSITAS GADJAH MADA

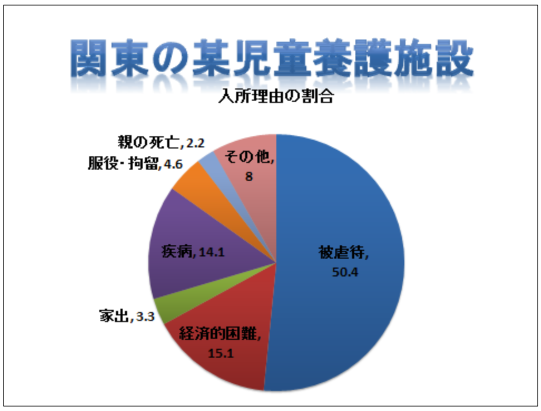
男女比率 8:2
日本語学科の学生との
コミュニケーション

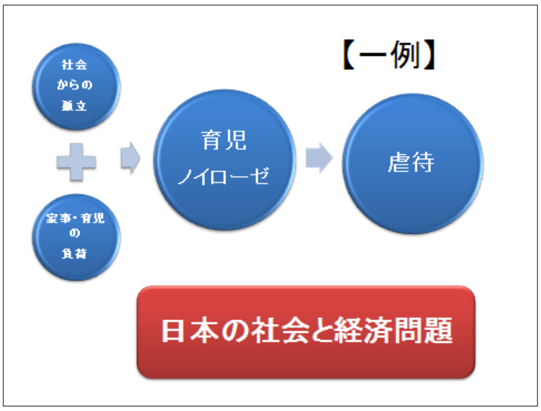
SAYAP IBU(母の羽)
・1955年に私設の孤児院として設立
後、政府の援助を受けて協会化した
・乳幼児から5歳までの孤児院

ボランティアとして活躍する高校生

RIFKA ANNISA(女性の友)
・1993年に設立されたNPO団体
・最大2週間まで非難することが
できるシェルターがある。そこに
は、常に30人ぐらいの女性が避
難している。





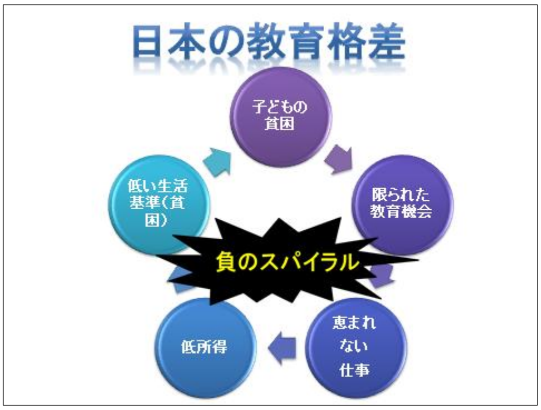


家庭の経済的・社会的状況の格差の影響

●就学援助を受けている生徒が多いほど、学力調査において平均正答率が低い傾向。

●両親の収入が高いほど4年制大学への進学率が高くなる。

●保護者の子どもへの接し方や教育意識も子どもの学力に影響。



日本とインドネシアの共通点

- 貧富格差が教育格差に繋がっている
- 貧困層の負のスパイラルができてしまうこと

スポーツで何ができるか

スポーツの価値

- スポーツを競技や健康だけのものとしてとらえるのではなく、家族や仲間づくりなどの観点からとらえることの重要性。
- スポーツの使い方が大切にされるべきである。

今後の活動計画

- 専門的な知識を身に付ける
- 現地の女性自立支援施設での研修
- 日本での支援活動

2014年度「ＲＫＵ未来力チャレンジ」優秀活動

最優秀活動

人に伝わるプレゼンテーション ～海外旅行の魅力～

片倉 美穂（社会学部 国際観光学科 2年）

優 秀 活 動

障がいのある子どもとの地域交流イベントに関わって

齋藤 優華（社会学部 社会学科 2年）

野球教室で恩返し ～墨田区出身の大学生が教える野球教室～

高橋 俊（法学部 自治行政学科 2年）

児童の行動変容に対する一考察 - 小学校一年生への学級活動補助を通して -

佐藤 莉々亜（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2年）

内山 結衣（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2年）

貧困層の子どもと女性の教育権に関する検討 –インドネシアと日本の実態から–

佐々木 有里（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2年）

村 遥佳（スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 2年）